

---

# 能力者は赤信号を認めない ~ 彼らの遅すぎる青春 ~

aoringo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

能力者は赤信号を認めない　　＼彼らの遅すぎる青春＼

### 【Nコード】

N7712Y

### 【作者名】

a o r i n g o

### 【あらすじ】

何の因果か転校させられた学園で仲良くなったのは、誰も彼も桁外れな能力を持った人ばかり。　　だけどこいつら、目を離すと何やらかすかわかったもんじゃない！

一人の普通の少年と、四人の最高ランク5の能力者が、理想の青春を求めて、VRゲームに海に山にデートに異世界に！　何でもかんでも濃縮してどたばた騒ぎ！！　巻き込まれ系主人公の非日常的な日常観察記になる予定。

話数が多くなってきましたが、一応章ごとに区切られていて、話

ががらりと変わっていくのでいつまでも話が続く、という形にはならないです。多分。

連載に当てる力を改訂に注いでいます。ほぼ描き直しますが、展開自体には変わりなく、追加台詞、描写中心。一話平均1500文字ほど追加。

MMO序盤、だれたヶ所や、くどい説明文全部カット予定。さっさとおわらせるぞおらー

連続感想、小話、雑談、批評、指摘、指導何でもコイデス。

人格攻撃・全面批判は削除・スルーします。受け取っても返しやうがないので。

現在VRMMORPG編中

開話 彼らは始点に立つ (再改訂) (前書き)

現在開いた時間を使って改訂を行っていますが、特に内容自体は変わりません。

セリフが増えたり減ったりしていますが、流れ事態に変更はありません。

不自然と指摘を受けたのでまたまた改訂。

## 開話 彼らは始点に立つ（再改訂）

彼は両手をぶらりとたらし、ぼけつと立っていた。両目はどこにも焦点の合っていないようで、しかし全てを見ていた。

砂塵の舞いそうなほどに寂れた住宅街。アメリカのどこかかもしれないし、イスラエルなどの昔話に出てくる紛争地帯なのかもしれない。だけど彼にはそんなこと、どうでも良かった。

少なくとも、彼が慣れ親しんだ町ではないどこか。それだけで、微動だにせず、人気の無い寂れた住宅街で、何かをただただ待った。

呼吸とそれに合せた衣擦れの音すら騒がしく感じる。  
タイムアップへとカウントが近づく。

「おちつけ、相手も焦っている」

そう自分自身を落ち着けるように、小さく、小さく呟いた。  
瞬間、目の端に動きを感じる。

見つけた……！！

腰をひねりながら右手にぶら下げていた、自分の獲物を振り上げ左手で支える。

弾は装填済み、セーフティーも外してある。吸い付くようにスコップが対象に照準を合わせる。

『スナイパーライフル』、遠くの敵を殺すとおく。その程度の知識しか彼には無かった。

だがそれでいい。扱い方さえ間違わなければほらこの通り。

手元で爆発。唸る轟音、感じる振動。

音が先か、赤い花の咲くのが先か、判断に迷うタイミングでスコップの先、敵の頭に真赤な真赤な花が咲いた。恐らく、あれで最後

の一人。

カウンターテロリスト ウィン

無機質な勝利メッセージが、音声と共に眼前に広がる。  
いつもの癖で、ささとメッセージを解除する。  
これで世界三位になったのか……。

「おめでとうケツト！！ すっげーな、マジかよ！！ 信じられねー！  
これで世界三位だ！！ それで明日なんだけ」

彼の耳に仲間の声が聞こえる。勝った事に興奮を隠せないようだ。  
大会の賞金をどう分けるのか争い、喧嘩し、さらにそれが原因で  
油断してさつさと彼を残して全員倒されたくせに、『自分達の手柄』  
だと暗に言ってくるその声に、彼は内心ため息をついた。

そんなに10万\$が欲しいのか？ 大切な物なのか？

『ゲーム』を遊ぶ事よりも？ 本当に？

突然全てが『どうでも良くなった』彼は、仲間の通信に静かに返答した。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え……」

それだけ言うとメニューから接続切断を選択。

彼を取り巻いていた風景が、匂いが、温度が、全てが霧散しブラ  
ックアウト。

ゲーム終了。

今まで高負荷な処理をしていたのであろう、背後の機械からファ  
ン音が小さくなる。

身体リンク切断。

ゆっくりと体を起こす。

極度の緊張感が手の平をじんわりと湿らせていた。軽く手を揉み、立ち上がる。

ずっと体を機械に預けていたせいで、『スカート』に皺が出来てしまっていた。彼女は皺の上を軽くなでつけながらため息をついた。結局、ゲームはゲームだ。楽しく遊んでいてもその関係はすぐに壊れてしまう。

あんなに簡単に、あんなに単純な物で。

皆で練習したあの日々はなんだったのか。皆で笑い合ったあの日々は何だったのだろうか。

共に腕を磨き、競い合い、自信をつけて大会に出た。

それだけの『繋がり』を持ってしても、たかが10万\$でその関係は崩れ去るのか。

だから彼女は思った。

ゲームでは、『本当の関係』は作れないのだと。

今更ながら、そう、思った。

それならば、『明日』。

明日は彼女にとっての一大イベントがある。

彼女にとって何よりも大切な、生活の始点が明日にはあった。

「……明日は」

\*\*\*\*\*

彼は体中に防寒着を何枚も着こんで、その場所へと立った。彼は今、まさに偉業を達成した瞬間だった。

彼は両手を挙げて喜ぶ振りをした！

この世界！！ 広大な空！！ 雲！！

俺の成し遂げた偉業を知れ！

そして見る。左を、右を、後ろを！ 前を！！ 下を！！ 36  
0度！

雲の上だ。俺は雲の上に立っている……！！

がくりと膝を突く。体を覆う全ての衣服を脱ぎ捨てて、涙を枯らして叫びたい。

嗚呼、世界はかくも美しい！！

だが、涙は出ない。それだけの水分はもうない。うなだれて顔が赤くなるだけ、服を脱いでも凍え死ぬ。

ここはアルプス山脈。地上4478mのマッターホルン山の頂上。長かったここまでの旅路を思いだし、彼はただただ震えていた。そのまま一分程度、全てを噛みしめるように、そうしていたが、突然。

「……もういいだろう」

そう言いつつ彼は立ち上がると、彼を見ていたたった『一人』の観客の電源をoffにした。

中学卒業記念に、夏休み丸々潰す計画を立てて登ったアルプス山脈。マッターホルン。なるほど。たしかに美しい。しかし、こんなものか……。

「このビデオも、お偉方は喜んで金にするだろう」

手の上でビデオカメラを弄びつつ、それまで彼を包んでいた壮大な景色に、一切の感慨も無く下山を始めた。

これだけ雄大な自然も、過酷な環境も、彼を『満足』させる事は無かった。

こんなにも素晴らしい景色なのに、こんなにも美しい世界なのに。



彼はただ、大自然の中に『一人』。  
面白くも無い。

何一つこの山は彼を満たす事は無かった。  
だからこそ、早く『次』に行かねばならない。  
さあ、早く降りないと間に合わない。

「下山するぞ」

彼は無線機を取り出して、指示をスタッフ達に出す。

結局この大自然では得られない物を、彼はここに求めてしまっていた。

そう、ここではない。ならば行かねばならない。『スタート地点』へ。

「二週間以内に日本に戻るぞ。間に合わないからな、何と言っても

」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

スポットライトが当たる。彼女を中心に真円にぼっかり浮かび、  
手の届く範囲にきっかりと計算された光の輪。

左手をゆっくりと上げる。視線が集まるのがわかる。そしてゆっくりと下ろし胸の上へ。

右手でスカートのフリルをつまみ、ゆっくりと腰を曲げる。

「ありがとうございました」

その一言を境に、会場を割れんばかりの拍手が彼女を包む。  
これで全ての日程は終了した。

この拍手、この声援こそが彼女の成功の証だと言っていていいだろう。たかが高校生の小娘一匹。箱は小さいが、世界中を回って一人芝居を行った。

彼女は体全てを使つて全てを表現した。

彼女は彼女であつた時もあつたし、彼でもあつた。そして彼らでもあつて。我々でもあつた。

最期の地はラスベガス。一時寂れたとはいえ息を吹き返し、今では昔のように光きらめくカジノ都市として昔と同じ息吹を感じさせている。

そんな中で彼女は演じた。

小さな小さな箱の中で。

指を折れば、その指先に妖精を感じた。

吐息を吐けば、草原を見た。

ひとたび声を出せばもう彼女は彼女でなくなり、一人の老婆が姿を現した。

誰一人として身動きができなかった。瞬きすらも惜しい。

『まるで幻術のようだ』

『詐欺でも暗示でも魔法でもなんでもいい。もう一度彼女の演技を拝みたい』

彼女の箱は小さい。100名入るか入らないかの小さな箱。

だが見た人は皆涙を流して、大枚を叩いてそれを見た。

そして、その夢はもう覚めた。

彼女は拍手に背を向けて、ゆっくりと舞台を降りた。

その表情は今までとは別。どんな表情も顔には張り付いていない。  
その顔はただの……………。

浮かべて

彼女はさっと表情を貼り付けて、マネージャーに笑顔を向けた。  
その顔は女子高生のあどけなさ、そのままだった。

ラスベガス、大成功と言って良い演目。

けれどもそれは、本当に自分の功績？ それとも。

彼女は急いでいた。今までの全てを取り戻すために、始まりに立たなければいけなかった。

この『顔』は結局、最後まで離れる事は無かった。それならばいつその事。

「さ、日本にかえろー！なんつたって来週は」

\*\*\*\*\*

「……」

しん……と静まりかえったプレハブ小屋の中で、まだ少しあどけなさの残った女性のか細い声だけが響く。

数名の人間が、一人の少女の指先に視線を集中させている。

その少女から発せられる圧倒的なプレッシャーは、彼女がただならない者だと周囲に容易に想像させる。

たとえどんな異能を持たなかったとしても。

「……」

彼女が指さす先にはテーブルに広げられた一枚の地図、その中の一点。周囲100km四方を切り取った市街地図だ。

淡々と無造作に指を地図の上を這わせる。周りは慌てたようにざ

わめいて、その指先が示した地点にピンを射していく。

「ここに指が……けれど腕はこっちです……。ここには携帯電話……いえ、ボイスレコーダー？」

ピンク、黄色、青、白……。

指がなぞった後を、まるで足跡のように色とりどりのピンが刺さっていく。

「えっと……下水路の地図はありませんか？」

横で数本の紙の筒を抱えていた一人が、慌てて今まで広げていた地図と入れ替えるように、新しい地図を広げる。

「ここに……頭が引つかかっています。流れが速く………ちよつと……これは？ 埋まつてる？」

それはまるで、地図上の演舞。

指が踊り、ピンが追いかけ、赤、青、緑。

ピンクに白に、またまた赤。

彼女は何を見ているのだろうか。いや、何を感じているのだろうか。

まさに異質。まさに異常。

途中そのプレッシャーに耐えられなかった一人が、顔を真っ青にして外へ出て行く。他の者も、背中を冷汗でじっとりと湿らせている。

天井についでる蛍光灯が、ヴーン……ヴーン……とうるさい。

と、彼女を覆っていたプレッシャーが一気に霧散した。

「終わりました」

一斉に、彼女の周囲が騒がしくなる。

携帯で指示を出す者、車に乗り込む者、へりに乗り込む者、地図を詳しく分析しはじめる者。

まるで時間が一気に濃縮されたように錯覚する。

「お疲れ様です。今回も遠くからわざわざご足労いただき……」

「い、いえ！ わたしもちょっと……お願いされたので……ちやうど良かったというか……」

低姿勢で接する現場監督らしき人に、彼女はおどおどと視線を宙に泳がせている。

腰まで流れるように伸びた白銀の髪が、ゆらゆらと揺れていた。

彼女が変なのはいつもの事だし、あまり追求しても自分の常識がダイナマイトよろしく、粉碎されるのが目に見えているので、彼は特に気にしないことにした。

異常な者に接するという事は、そういう事。

「……それで、今後の予定なのですが」

「あのっ……あ、明日はちょっと用事がありまして……」

手帳を取り出しながら打ち合わせを始めようとする彼に、待ったをかける。

彼女は思った。

私は変だから、違うから。

そう決めつけて今まですごしてきた。けど、変わらなければいけない。

だってこのままだったらあまりにも……そう、あまりにも自分は……。

だからこそ。

「ちょっとしばらく、お休みをいただこうと思ひまして、もう私が居なくても大丈夫だと思いますし……あの、明日は」

そう、明日は

「『『『始業式だから』』』」

一話 自己紹介をしよう？ (改訂) (前書き)

ほぼ書き直した状態になってしまいましたw

1 / 8 指摘を受けた場所を修正

一話 自己紹介をしよう？ (改訂)

「どうしてこうなった……」

俺は頭を抱えて首を振る。

自分でも思う。場違いすぎる。

右隣を見してみる。

なんか凄い筋肉むちつと制服からはみ出した人が居る。あ、見られた。

「なんだ？どうかしたか？」

「い、いえ！―！何でもないです……」

こえーよ。何だよこの人。高校生かよ。昔のカンフー映画に出てきそうな顔してるし……。

元は丸刈りだったのだろうか。伸び放題の髪を無理矢理整えたように、髪がつんつんと暴れ放題になっている。ギロリと光る切れ目がものぐさというより、ワイルドな風貌としての印象を強くしている。凄い筋肉だと認識はできるが、以外と線は細そうだ。

うーん。制服似合わねえ……。

「お前、見たことない気がするな。一学期にいたか？」

「い、いえ……えーっと今日から入学……です……よ？」

やべー、すげーこえー。

なんだよこれ、あと10秒睨まれたら俺ちびるぞ。

それとも、もっと畏まった方がいいのだろうか？ これ。

やばいな対応間違えたかな。

それにこの人明らかに『能力者』だよな……。



というより、俺の周り皆『能力者』……。

俺の学園生活初日にしてバッドエンドじゃないのだろうか？

世界は、ここ100年程で目まぐるしい技術の進歩の波にさらされた。遺伝子工学の発達、クローン技術の解放、VR技術発明、シックスセンスの確立……。

超能力や超常現象、未来の技術だと思われていたそれらが、一気に俺たちの目の前に『常識』として現実の物として現れた。そしてそんな中、俺達はきつと昔と変わらず平和に暮らしていた。

しかしあらゆる技術が進歩する中で、明らかに異質な能力を持つ人々が誕生してきた。

能力者。

『超能』『異常』『異能』を持った人達。

『幽霊が見える』

『異常な動体視力を持っている』

『電気を生み出す事が出来る』

『ワンフレームの小足余裕です』

虚実も勿論あっただろう。

しかし明らかな異質、異常を持つ人々は確かにそこに存在した。

彼らが何故誕生したのか、未だに良く分ってはいない。それでも『人』ならざる彼らは、国にとって貴重な研究材料に変わりはない。なかった。

もちろん俺の住む国、日本も例外ではない。

幼少期から成年後まで一つの地域で能力者の囲い込みができるように、広大な敷地を持つ『都市』を設立。

本土から遠く離れたこの『都市』で、俺も能力者達と一緒に生活している。

「そうか。俺の名前は志貴崎<sup>しきさき もみじ</sup> 椛<sup>もみじ</sup>という。よろしく。そこに座っているということは、同じクラスで授業を受ける事になると思う。分からないことがあったら聞いてくれ。手を貸そう」

志貴崎さんが、ぬうつと手が出してきた。

……握手でいいのかな？

「え、あ、どうも。上村<sup>かみむら けい</sup> 圭<sup>けい</sup>と言います。ありがとうございます。しきさき、でもみじですか。四季咲きの紅葉とは洒落ていますね」

俺も手を出して握手をする。ぎゅうつと、締め付けられるような握力にびっくりする。

志貴崎さんの手はごつごつしており、よく見ると傷だらけだった。深く考えないようにする。

とりあえず良い人そうだ。

志貴崎さんは俺の言葉に少しだけ口角を上げて、「おれも気に入っている」とだけ言った。

「それにしても、始業式に転校生か。何とも珍しいな」  
「そうですね。俺も驚いています」

そう。今日は始業式。

俺の名前は上村<sup>かみむら けい</sup> 圭<sup>けい</sup>。黒い髪に若干茶色の筋の入った瞳を持つ、生粋の日本人。身長は若干低めだが平均値、やや童顔。高校一年生。バスケットコートが8枚は収容できるほどに広大な体育館には、小学から高校までの全校生徒がずらりと整列中だ。

その数3、400人といった所。この人数が整列した所で広すぎる体育館には、まだまだ余裕がありあまっていた。

一学年30人いるかいないかといった感じだろうか。あまりにも少ないと思うかも知れない。

もちろん理由はちゃんとある。ここは『能力者達だけ』が通う、この都市唯一の能力者専用の小中高大院一貫の学園だ。

現在はその学園のトップ、学園長の挨拶中。

白髪が混じってはいるが、この学園のトップというにはまだかなり若く見える。生気漲るその顔、立ち振る舞いはただならぬカリスマを感じさせた。

といっても体育館が広すぎるため、大きなモニターに映した画面越しにみてるだけだが。

こういう前置きをする「おー、じゃあお前ってなんかすげー能力でももってるの？なんかやってよ」みたいな反応が返ってきそうだが、俺はまったくもって何の能力も持っていない。

平凡、ノーマル、平均値、標準。

特にこれといった面白みもない、ただの人間だ。

だからこそ思う。

どうしてこうなった！

と、横から制服の袖を引っ張られた。ちょっと騒ぎすぎただろうが。

謝りながら左に向く。

「あー、うるさくてごめんなさい。」

「……良い。……私も初めましてただいだけ」

見ると、小柄な女の子が俺の袖を引っ張っていた。

耳が隠れる程度のショートヘア。見ようによつては少年とも取れる、中性的な容姿をしている。肌の色は白く、ちよつと生気がかけているようにも感じる。そんな中、紅く染まる唇が何とも艶やかな印象を受ける。

そして、何と言っても特徴的なのはその瞳だった。ギラツと光る

瞳でも言うのか。見ていると吸い込まれそうな程に真っ黒で、彼女がどこを見ているのか正確に判断できなくなりそうだ。すっと手を出される。

志貴崎さんの手とは違い、華奢な手だ。

握手をしながら、お互いに自己紹介をする。

「……よろしく。……私は野谷<sup>のざうき</sup> 卯月<sup>うつき</sup>」

「上村 圭です。よろしく願いします」

内心女の子との握手にドキドキしてしまうが、必死に冷静を装う。

「……」  
「……」

やばい話が続かない。どうしようかこの状況。しかしこう。本当見つめられると吸い込まれそうな瞳だと思う。なんとも居心地が悪くなってきた……。

「ほう、野谷も今日は来ていたのか。直接会うのは入学式以来じゃないか？」

そこで志貴崎さんが口をはさんだ。

正直助かった。

「……お互いあまり学校……来ない。……あとミキも来てる。」

「ほう！山城もか。後で挨拶に行くとするか。」

「……ん」

それに野谷さんも答えるが、何とも違和感がある会話だと思った。入学式以来？今日は二学期の始業式だから、単純に三ヶ月から

四ヶ月程度はこの学園の高等部に在籍していたはず。しかも確か高等部は各学年一クラスずつ。

それにさっき志貴崎さんは、「そこに座っていると云うことは、同じクラスで授業を受けることになると思う」と言っていたから、同じ学年で同じクラスのはずだ（志貴崎さんと同学年というのに、改めて驚愕するが考えないことにしよう）。

「どういうことですか？同じクラスで授業を受けてるわけじゃないんですか？」

考えても分らないことは聞くのに限る。

「あー、俺たち二人は『特別』でな。いや、えーっと、あと四人ほど特別なやつが高等部にはいるんだが。それでー」

「……私たちは授業を受ける義務が……ない」

難しい顔をしながら腕を組んで「あー」とか「うー」とか言いながら、説明しようとする志貴崎さんと端的に答える野谷さん。

「はい？」

「……私たちは」

話を整理すると、この学園の中でも特別に力の強い能力者は、授業に出る義務自体が無いらしい。

能力者の中にはランクがあるらしく、それが一定を超えるとあらゆる研究機関や会社から様々な話が来る。

そういった所への協力をするために、学園へ休学届を出して行くわけだがなんと、この二人を含めた『特別』な人は、その休学届すら出さ無くても良いらしい。

チートか……。

「ちなみに俺は『異常者』に分類されていて」

「い、いえ！また後で聞きます！」

頼んでもいないのに志貴崎さんが、能力の話しを始めようとしたので、慌ててやめさせる。

これ以上俺の『常識』を壊さないでくれ。

「……私も『異常者』」

「そ、そうですか。それも後で聞きます」

「……うん」

野谷さんも負けじ（？）と張り合ってくるが、それは社交辞令で答えておく。

しかし二人そろって自分から、『異常者』なんて言わないでくれ。知識としてはあるがなんというか、サイコさんみたいに聞こえる。

野谷さんは自分の話を聞いてもらうのが嬉しいのか、うつすらと頬が赤くなっている気がする。

なんとなく頭をなでたいかわいさがある。小動物系というか、妹がいるとこんな感じなのかなーなんて、同級生に失礼な事を考えてしまう。

初めのうちはどうなるかと思ったが、なんとなくこの二人とは仲良くしていけそうな気がした。

そんなやりとりの間に始業式は終わっていたらしく、進行の指示により端の方からどんどん人が立ち上がり、体育館を出て行く。

「んーあと少しここに座ったままかなー」

3、400人と言う他の学校と比べて少人数でも、多いには変わらない。

自分たちが移動するまで、もう少し時間がありそうだった。

「そうですねー」

俺の何気ない一言にいきなり言葉が返ってきたので、びっくりして声のした方向に振り向く。

そこには銀髪の美しい女の子が立っていた。瞳の色や顔の造形が日本人の特徴をしている事から、恐らく日本人なのだろう。しかし、その髪に負けず劣らず整った顔立ちをしている。

野谷さんと同じ制服を着ていることから高校生だと思えるが、そのすらりと伸びた身長に、大きく膨らんだ胸と合わせてとても大人びて見える。

そつえば始業式始まる前にこの席に案内された時、この列の一番端に彼女を見た気がする。

自分の場違いさ加減に気が動転していて、気がつかなかった。

びっくりしている俺を見て、彼女は「すみません」と謝った。首を傾げて微笑んで、いたずら成功と言った感じた。

反則過ぎるだろ。

「今日からこの学園に入学するんですね？ 教室に案内するように先生から言われたんですけれど」

「ああ、なるほど。よろしくお願いします上村 圭と言います」

「鬼谷 きたに なぎ 凧です」

静かに微笑む鬼谷さんにどきまぎしてしまう。

優しそうな雰囲気にかわい物腰。こんなきれいな人とお知り合いになれるなんて俺って幸せ者だなー。能力者だろうけれどそんな事は関係無いよね！ ここに放り込みやがった姉には感謝するべきかなーなんて考えていると、

「おお、鬼谷も来てたか！」

「……久しぶり」

「あら。野谷さんとはたまに顔を合わせてましたが、志貴崎さんは入学式以来ですね」

なんて会話が。

さつきと似たような会話が繰り返されてる現状に、頭の中が真っ白になりそうだ。

「あの、志貴崎さん」

ギギギギっと、体の節々がさび付いたように動かしづらい。この予感を『事実』にする確認をするのがたまらなく怖い。

「なんだ」

「彼女も『特別』なんですか？」

「そうだ。彼女は『超能者』でー」

予感が事実になったと同時に、さらに能力の解説も丁寧にしようとした志貴崎さんを必死で止めて、とりあえず俺の精神汚染を食い止めることに成功した。

そんなやりとりをしている俺達を、鬼谷さんは静かに笑いながら見ていた。

「そろそろ移動しませんか？」

「あ、はい」

辺りを見るとかなり人の数は少なくなっており、俺達の列が移動する順番が来ていた。

移動を促され席を立ち体育館を出た後、彼女の後ろについていく。



そして当然のように志貴崎さんと野谷さんもついてくる。

「そついえば体育館から自分の教室まで、どうやって行けばいいのか知らんなあ」

「はあ」

ぼけつとそんなことを言い放つ志貴崎さんに、鬼谷さんがため息をつく。

いやいや、どんだけ学校来てないんだよ志貴崎さん。と思ったが、深く突っ込むと要らないことまでしゃべり出しそうなので、突っ込まない事にする。

まだ心の準備が……。

俺たちの教室がある建物は体育館から一旦外に出て、学園内の敷地をしばらく歩いた先にあった。

小、中、高、大、院の教養棟が5つ、文化棟、技術棟、研究棟、食堂、それに加えてよく分からない建物と寮が、いくつかこの敷地内にはあるらしい。

鬼谷さんの案内で高学棟へ、俺たちは皆一年生なので一階にある教室に入る。

ちなみにワンフロアにつき4つほど教室があり、それが三階建になつていて学年が上がるごとに二階、三階と上がっていくようだ。とは言つても1クラスしかない俺たちの学年では、一階の残り三つの教室は使わないことになる。

現在は倉庫となつていているみたいだ。

「私達のクラスはここで、席は」

「……私の横」

教室の一番後にある窓際、野谷さんの横に俺は座ることになるよ

うだ。

ちなみに鬼谷さんはだいたい教室の真ん中、志貴崎さんは廊下側の一番前。

なんというか皆『らしい』場所に席があるな。

俺の中のイメージとしてクラスの真ん中は委員長、窓際隅っこが目立たない子、廊下近く一番前がやんちゃ坊主といった勝手な偏見があるからだ。

「そつか。よろしく願いします」

「……よろしく」

野谷さんに改めてよろしくすると、照れてるのかちょっと下を向いてもじもじとしていた。

何ともかわいらしい。

席に着いて辺りを見回す。教室自体は前の学校と同じ典型的な構造をしている。

至る所になんかうっすらと傷がついてたりするが、ボクハナニモミティナイ。

まだまだ不安はある（むしろ不安しかないが）が、ここから俺の学園生活が始まる。頑張っていこう、と思った。

## 一話 自己紹介をしよう？（改訂）

「です。今日から一緒に勉強することになります。よろしくお願ひします。」

お辞儀をする。

無難にまとまったはずだ。趣味、好きな物。

これからの学園生活に、何の支障をきたさないような自己紹介をする。

ここにいる人達全てが能力者……。きっと魔法が使えたり、忍者よろしく天井上から降りてきたり、夢の中に現れて悪夢を見せたりするに違いない。敵に回すと恐ろしすぎて考えたくも無い。

「はいよろしくお願ひしますねー。誰か質問とかあるかなー」

横に立った担任が、皆に向かって質問が無いか促す。

黒縁めがねの『ちよつと疲れたサラリーマン』という風貌の人だ。始終なんだか口調が軽い。

「はい」

ぬつと手が上がる。

志貴崎さんだ。

「志貴崎さんどうぞー。というか久々だねえきみー、僕の名前おぼえてるかなー？」

「上村の能力をまだ聞いていない。差し支えなければ聞きたい」

あー、そうだった。

俺の身の上はまだ誰にも話していない。  
そして先生のスルーされっぷりがかわいそうだ。

「えっと、俺の能力は無いです。一般人です平凡です平均です。なので皆さんの能力にさらされると、一気に色々壊れると思うので手加減してください」

その言葉と同時に、周りの空気が固まるのが分かった。

志貴崎さんが変な顔をしている。

片目だけ目を見開いているような形で、口も「へ」の字になっている。

野谷さんも目をいっぱい広げている。

あんなに目って広がるんだな、なんて、のほほんと思っていると。

[illegible]

「な、なに！？　なにになに！？　俺悪いことした！？　ごめんなさい！　生まれきてごめんなさい！！」

教室中に響き渡る皆の声に俺は気を動転させて、とりあえず謝る事しかできなかった。

もはや半泣きだ。

何！？ 何で！？ こわいよーもううちかえりたいよー！

「な、何故なんの能力も無いや奴がここにいるんだ！」

志貴崎さんが一際大きな声を上げる。

「えっとおねえ……姉が俺を入れないと、学園から出て行くとゴネ

たらしくて……学園側が折れてここに入れられました」  
「学園が折れた！？ あ、ありえん……」

しかし学園側が折れたのは事実だ。

まあその理由は「弟と一緒に学校かようのつてたのしそужゃーん」っていただけなんだが。それに付き合わされる学園もたまったもんじゃ無いな、と他人事のように思う。

「学園が折れる……上村……もしかして上村さんの姉は上村<sup>かみむら</sup>沙紀<sup>さき</sup>さんですか？」

「はい」

間に入った鬼谷さんに答える。

鬼谷さんもなんだか余裕がなさそうな顔をしている。

そのやりとりを見ていた教室中の空気が凍る。

「異次元訪問者」

「……超越者」

「潜る者……」

あちこちからぼそぼそと、何だかアレな言葉が聞こえてくる。

姉は色々とトラブルをここで撒散らしているらしい。

これって、もしかしていじめフラグ？

やばい！ そんな事絶対にあってはならない！ 俺の生命<sup>いのち</sup>のために！

「えつとあの！ 姉が色々やってるらしく申し訳ない！ けど、あの、俺自体は本当何も能力も持たないので自分でも場違いだと思ってるんですが、既に入學させられちゃったんでがんばって勉強しようと思います。仲良くしてください。よろしくおねがいします。以

上です」

と、一方的にまくし立ててお辞儀をして、自分の席へ戻った。

「……驚いた」

「ご、ごめん最初に説明しなくて。普通な俺がこんな学園に入って良いのか、緊張してて……」

「……良い」

隣に座った俺に、見開いていた目を向けていた野谷さんだったが、俺の言葉にふるふる頭を振って許してくれた。

そして俺が席に着いたのと同時に、前に座っている女の子が振り向いて話しかけてきた。

「本当驚いたよー。まさか何の能力も持っていない奴が、こんなところに来るなんてさー」

「す、すいません」

「いーって、いーって。私は山城 やましろ みき ミキ。よろしくー」

「よ、よろしくおねがいします」

またもや美人さんだ。頭を動かすたびに綺麗なブラウンのツインテールが、ぴょんぴょんと揺れる。かわいらしく整った顔立ちで表情がころころと変わる。

しかし何だかそれが不自然にも思えてならない。魅了されるといふか、彼女以外が目に入らなくなるというか……。

そういえば山城 ミキといえばさっき聞いた名前のような。うんボクイヤナヨカンガスルヨー。

「野谷さん。もしかして山城さんって」

「……ん。……『特別』。……ミキは異能者で」

「うんそつか。ありがとうございます」

そっかー彼女もかー。ここで知り合った人今のところ皆『特別かー……、どんな確立だよーもーあーもーふふふー』。

俺が現実逃避をしている間にも、先生の説明は進む。

とりあえず今日は授業はないようだ。このまま今日は解散となり下校、委員とか諸々はまた後日決めるらしい。

なんかこの教師、しゃべり方同様すごいいい加減な気がしてきた。

「それではー、今日はこころへんで終わりですー」

「お疲れー」とか言いながら出て行く先生に続き、皆席を立ち上がってそれぞれのやりたい事をやり始める。

俺は今日一日の緊張感から解放されて、机にべたつと倒れ込んだ。うう。胃に穴が開きそうな気がしてきた……。

「上村ちよつといいか？」

「え？あ、志貴崎さん。はい……おおう」

顔を上げると、志貴崎さんが立っていた。

見下げてくる志貴崎さんの顔には蛍光灯の光が届かず、影になっていてなんとも威圧されているような印象を受けてしまう。

圧倒されている俺の様子に、志貴崎産は疑問符を浮かべる。

「もう下校だが、昼食を食べに食堂に行かないか？」

「え？」

「この学校の事、何も知らないだろう？ 担任はあの通り『使い物にならないからな。説明がてら、どうだ？』」

「あ、そうですね。ありがとうございます」

基本良い人なんだなと再確認。

「あ！私も行くー！」

「……私も」

「あら、良いですね。私も一緒にしても？」

野谷さん、山城さん、鬼谷さんも話を聞いていたようだ。

「ん？何だ。お前らも行くのか」

「何よー！ 悪い！？ そもそもあんまり学校に來ない椋に、この学校の説明なんてできるわけないでしょ！？」

「……ミキもあんまり……來ない」

「デヘ」

「あんまりじゃないな。ぜんぜんだな」

にかつと志貴崎さんが白い歯を見える。

「……自慢する事じゃ、……無い」

皆のやりとりを見ながら、鬼谷さんがクスクスと笑う。

そういうわけで俺の知り合った『特別』な人達と、皆で昼食を食べる事となった。

高学棟から出て食堂がある建物に向かっているのだが、何か凄い視線が俺、というより俺達に向けられている。

『注目』という言葉には縁の無かった俺には、正直もう耐えられません。



「……なんでこんなに注目されているんでしょうか」  
「そりゃー、私たちってあんまり学校に来ないしー。それぞれ結構有名人だしねー。それにー、あんたの噂ももう広まってるんじゃないのかなー」

沢山の目を向けられても、山城さんは一切気にする様子は無い。  
他の皆も同様だ。  
やはりこういった事には慣れているのだろうか。

「ええ！？ 能力がないってだけで噂に！？ そりゃ珍しいですよけれど、学園の外に出れば俺みたいない人なんてたくさんいますよねっ」

「いえ、上村さんの場合お姉さんが……」

「ああー……」

「『あ、あいつが沙紀様の弟か……気をつけろ、爆発するぞ』とか噂されてたりして」

「何ですか”様”って。それに爆発しません」

「まあ、事実上村の姉はこの学園で、能力者達の頂点に居るからなへ？」

間抜けな声を出す俺に、「何だ知らないのか？」と志貴崎さんが顔を向けてきた。

「だからこそ学園が折れたのだろう？」

「そ、そうなんですか？」

「そうですね。学園が拘束できない唯一の能力者」

誰の助けも要らず、誰にも縛られず、自由。  
俺の姉を一言で表すのなら、そう、『自由』。

「場所が気に入らないからって言って、木を勝手に移動したりとか」  
「あ！ そんなのあったね！！ どうやったんだろうねー」

「授業がつまらないからって教師を一瞬でパンチパーマにもしてましたよね」

「あれも驚いたな」

「……科学室が無くなったこともあった」

「ああ、扉を開けたらコンクリートの壁になってた奴だな」

「わ、わかった！ わかりました！！」

まだまだ飛び出てきそうなとんでもエピソードに、俺は待ったをかけた。

とりあえず俺の姉がどれだけ凄い人なのかは良く分かった！ 分ったからこれ以上俺の『常識』を壊すのは止めて貰おう。

「ふむ、そうか。しかしまあ、これだけ注目されるのは上村のせいだけでは無いな」

「そだねー」

「え？」

「私たちがそろって歩く事なんて、滅多に無いって事ですよ」

「……ん」

「な、なるほど」

どうやら俺の姉が誰であろうと、この四人と一緒に歩いている時点でもかなりの注目度になるようだ。

入学式以降あってないとか、教室までの道覚えてないとか、平気で言い出すような人達が集まったらそりゃそうか。

ちよっと待て、転校初っぱなからこれだけ目立つのってやばいんじゃないだろうか。

……やばいよね？

そんなやりとりをしている間に、俺達は食堂へと到着した。全校生徒が使うこのことで、建物一つがまるまる食堂らしい。

「ひろー」

「全校生徒が使うからな」

「大学生とかも？」

「うむ。メニューも豊富だぞ」

「お値段も国からの支援を受けているらしく、とても安いです」

税金か……。

すごく広い空間に、長テーブルがいくつも並んでいる。食券機から食券を購入し、カウンターで受け取るのは普通の食堂と変わらないようだ。

とりあえず食券を買う事にする。

何だか今日は疲れたしお腹もあまり空いていないので、無難な感じでサンドウィッチセットで。

皆もそれぞれ食券を買い、カウンターに提出。料理の乗ったお盆を受け取って席に着く。

ふむ。それそれなんとも特徴が出ているというか。

野谷さんはスパゲティ。

山城さんは俺と同じサンドウィッチセット。

鬼谷さんは和食セット。

そして志貴崎さんはなんとステーキだ。・・・まあ、その体だとそれくらい食べないと体が持たないのだろうが。

と、そのままスパゲティを食べようとする野谷さんに、ハンカチを差し出す。

「……？」

ハンカチの意味がわからないらしい。  
首を傾げて、俺を見つめてくる。

「えーっと必要ないかもしれないけれど、襟にかけてください。ソ  
ース飛んじやったりすると悲惨だ……ですから」  
「……あ、……ありがとう」

野谷さんは素直に俺のハンカチを受け取り、自分の制服の襟に引  
つけて小さくスパゲティを丸めて食べ始めた。  
黙々と食べてる姿が、なんとも小動物的だ。

「紳士じゃーん。見直しちゃうよー」  
「ふふふ」

「いやいや今日初対面ですから。見直す元ないですから」

軽く冷やかしてくる山城さんに突っ込む。

「……ふえふにおへたちおへたちにそんなふあふおとふかいおとふかいしふあふていい」  
「口の中の物を、食べきってからしゃべってください」

リスか、この人は。

ステーキを口いっぱい頬張りながら喋られても、恐怖感しか相手  
に与えないぞ。

「……んむ。別に、俺達にそんな口をきかなくても  
良い。さっき言い直したって事は、普段はそんな言葉遣いじゃな  
いんだろう？」

「そーねー」

「そうですね」

「……ん」

「はあ……そうで……そうか」

この人達変なオーラ出してるから、つい言葉が丁寧語になっちゃうんだよな。がんばって普段通りの言葉使いを心がけよう。

サンドウィッチを手に取り一口嚙る。

普通のサンドウィッチだと思ったが、挟まっている素材に気を使っているらしい。レタスとキャベツを両方使ったりして、歯ごたえや味に変化があって面白い。チキンも挽き立ての胡椒が使われているらしく、口の中に香る風味がとても良い。

「へえ。美味しいな」

「ふおおふあら<sup>もぎゅもむ</sup>」

「いけるよねー」

「……ん。……おいしい」

「そうですねー」

サンドウィッチセツトだと言っても、結構なボリュームがあったが飽きない味付けも手伝って、軽く完食できた。

志貴崎さんが食べながら喋るのは、聞かなかったことにした。

「それで上村。どうしてお前がここにくる事になったのか、詳しく聞きたいんだが」

ステーキを食べ終わった志貴崎さんが口を開いた。

食べるの早いなあんだ。

野谷さんなんてまだ食べ終わってないぞ。黙々と食べる姿が小動物的で以下略。

「もちろん喋りたくなければ、喋らないで良い」

と志貴崎さんは言うてくれたが、別に俺としても隠すような事は一切無い。

「別に詳しくも何も、6月くらいに姉が突然俺の部屋に来て、開口一番『圭、お前も私と同じ学校に行くのよー！』って叫んだと思ったら、外に飛び出していつて。まあ意味もよく分からなかったし、そのまま放つといたら夏休み中にこの学園の案内の郵便物が来てさ。元の学校から転校扱いになってるし仕方なくここに」

「相変わらず自由すぎるな。お前の姉は」

志貴崎さんは、口を大きく『へ』の字に曲げる

「それでー？その『圭』のお姉ちゃんはどこいったのさー」

デザートのア仁豆腐を幸せそうに食べながら、山城さんが聞いてきた。スプーンを動かすたびに、ツインテールがゆらゆらと揺れる。この人はいちいち仕草がかわいすぎて困る。もっと見ていたい気持ちになるのを必死に押さえ、山城さんから視線を外す。

「俺も良くわからない。というか『同じ学校に行くのよ宣言』から、すぐどこかに行っちゃって。家にも帰ってこない。てっきり学園で何かやってるのかかと思ったんだけど、そうではないんだよな。…『山城さん』達の話の話を聞くとさ」

どうしても『圭』と下の名前を言われた手前、俺も『ミキ』と返したかったが、恥ずかしくて出来なかった。

俺のばかばか。

ちなみに、山城さんにはバレてるみたいですごくニヤニヤしてる。

……くそつ。

「ふふーん。うんそーだよ。といっても、私はあんまり学校にこなかったから『圭』のお姉ちゃんは、私の居ない合間にきてたかもしれないけどー。皆はー？」

やっぱバレてやがる。

「6月以降だろう？ 見てないな」

「椛はどうせ一回もきてないでしょ」

「そうだったかな？」

「……ない」

「見てないですね」

「そうか。まあ置き手紙に『魔王を倒してくるからちよつと異世界いつてくるね ミ（右下に大きく猫の顔）』ってのはあつたんだがまあ、いつもの冗談だと思うし」

「……！？」

俺の言葉に、志貴崎さんが変な顔をさらに変にして、鬼谷さんがお茶を吹き出し、野谷さんが固まり、山城さんが杏仁豆腐が気管に入ったらしく咳き込んだ。

なんとも大惨事です。

「ちょー！ 何その反応ー！！ いや、きつと冗談だつて。地球の裏側とかで楽しくやってるだけだつて！」

「それもどうかと思うが……」

「……………そうだと良い」

「まー、あの人ならどこにでもいけちゃいそうな気がしてきて……」

「さ、流石にないですよね」

姉はどんな生活をここで繰り広げていたのだろうか。

胃に続き、頭も痛くなってきた。



一話 自己紹介をしよう？ （改訂）

「そういえば上村の話ばかり聞いていたな。俺たちの能力の話もしないとだめだろう」

肩をまくりながら、ステーキを食べて元気満タンといった感じで志貴崎さんが立ち上がる。

「そういえばそうでしたね」

「あー、そうねー」

「……ん」

「ちよちよちよ、ちよつと待って！ 気持ちの準備をする」

今すぐにでも何かやり出しそうな、志貴崎さんを慌てて止める。  
何なんだろうこの即行動しちゃう人。

「あのお姉さんを持ちながら気持ちの準備……？」

「そだねー。なんでなんでー？」

「いやー。あの一、俺はノーマルな一般ピープルなわけで、姉の行動をなんというか……奇行として認識してどうにか自分を守ってきたというか、目を背けてきたというか」

思えば、自分の『常識』を守るために日々必死だった。

姉の行動は、『奇行』以外の何物でも無かった。

今まで何も持っていなかったのに、次の瞬間何かを手にとってるなんてのはざらで、車に乗ってたら2時間の道のりを、一瞬で移動して目的地に到着してたり、朝家を出て行った姉が昼には地球の反対側から電話をかけてきたり。

それらを俺は必死に自分に『コレは夢だ幻覚だ幻だ』、と言い聞

かせて忘却の彼方に追いやってきた。

その苦勞もこの学園に入ったことにより全てが無駄。  
グッバイ俺の常識。俺の日常。

「はー、圭も大変だねえ。けどまあ、この学園に転入した以上もう  
目を反らす事もできなくなったわけだ」

「なるほどー」

「……うん……ぐす」

「よしよーし」

やばい泣けてきた。まあしかし、頭なでるのは止めてもらいたい。  
何とも気恥ずかしい物がある。

「もういいか？」

「あ、ごめん。うん。いいよ」

志貴崎さんは、構えの状態ですつと待ってたらしい。  
俺の言葉を聞くと、軽くとんと音を立ててジャンプした。

3mくらい。

「え！？ええ！？すげー！！」

「おー飛ぶ飛ぶー」

「あらー」

「……すごい」

やんや、やんやとはやし立てる俺たちの前に落ちて降りて来た志貴崎さ  
んは、ふふんつと鼻を鳴らし得意げだ。

しかしその図体でこのジャンプ力。まさに野生児ですね。  
アマゾン！とか叫びそうですね。

「俺は体のリミッターが無い異常者だ。通り名として【剛力】とか言われるが、それは俺の一端に過ぎない」

「へえー」

「りみったあ？」

「火事場の馬鹿力ってありますよね。大事なとき、いつも以上に力が出るっていう」

「あーあるねー。そっか桜はそれがいつでも出来るわけだ？」

「まあそいうわけだ。ついでに、骨とかも特別頑丈らしい」

元々無理な動きをしないようにリミッターがついてるはずなのに、それを外すことが出来てしかも骨まで頑丈とは。

人間か？

……深く考えるのはよそう。

「勿論、あまり無理をすると筋肉が破裂するがな」

「でえ……」

豪快に笑う志貴崎さんであるが、冗談に聞こえない辺り怖い。何だよ破裂って。

そして筋肉をうねうねさせるな。自由に操られるのは分かったから。

「……次は……私」

志貴崎さんに続いて、野谷さんも能力を見せてくれるらしい。立ち上がって俺に背を向ける。顔を横に回してる事から俺の位置は、野谷さんの見ている方向からして真横といった所か。

「……この位置から……普通は圭をちゃんと見れないと……思う」

「俺なら『誰か居るな』程度しかわからないだろうな」  
「……指を……立ててみて。……当てる」  
「なるほど」

とりあえず四本立ててみる。

「……四本」  
「すごいな!」  
「へー」  
「そんなことができるんですねー」  
「おお!」

野谷さんは志貴崎さんの時と同じくはやし立てられて、ちょっと下を向いて照れている。

「……私は脳のリミッターが外れてる……異常者」  
「脳?」

「……そう。……脳は、色々な処理を行っている」

見た物を記憶したり、判別したり、匂いを感じたり、体を動かしたりその他諸々、それらを取り切る脳。

しかしそれらを全て処理しようとする、脳の処理が追いつかない。だから受け取った信号を捨てる処理が間に入るそうなのだが、そのリミッターが彼女は外えていて全ての処理をしようとするらしい。そしてその『信号を捨てる機能に対してのリミッター』の対象が、視覚情報となっているわけだ。

「……ちなみに……椀も脳のリミッターが外れている」  
「なるほど、脳のリミッターが外れているから筋肉を自在に操れたり、凄い視力を持てたりするのか」

「……そう」

「なんだ、体のリミッターじゃないのか」

「何で自分の体の事なのにそんな曖昧なのさー」

「小難しい事は気にしない質でな」

「気にしなさすぎだと思います」

ちなみに彼女は通り名で【鷹の目】と言われているようだ。きっとそいつ軍事オタクだと思う。

「……私は何も見逃さない。……遠くの物も近くの物も、……私の標的」

そういつて、どこまでも深い瞳をキラリと光らせ、野谷さんが微笑む。

怖いです。

「けど……脳の処理が間に合わなくて、……あんまり早く動けない」  
「なるほどなー」

つまりそれがデメリットなのか。彼女の喋り方も、その能力によるものだと思えた。

「……リミッターを付ければ……早く動けるけど」

要はリミッターを付けたり外したり自在な訳か。チートか。

「それじゃあ次は私ですね」

野谷さんの能力披露が終わったのを確認して、鬼谷さんが立ち上がる。

その瞬間、なんともいえないプレッシャーが俺達の周囲を包む。パリッと静電気に毛が逆立つような感じがする。

「なんかパリパリするー」

山城さんが震えて両肩をさすった。

「むむ」

「おお!？」

「……ん」

皆も同様、体中を走るその感覚に違和感を覚えているようだ。そのまま二十秒ほどした所で、ふっとプレッシャーが霧散するのを感じた。

今のが彼女の能力なのだろうか。

何だか先の二人より、毛色の違う能力のように感じられた。

「これからこの食堂に女の子が二人きます。多分小学棟の生徒で一人は帽子をかぶっています」

そう言い終わらないうちに、食堂の入り口が開いて女の子が二人入ってくる。一人は帽子をかぶっている。

「おおっ」

「すごー!」

「へえ」

どうやって知ったのだろうか。彼女が動いていなかったのは、俺を含め皆で見ていたのに。

「一人が販売機で食券を買います。気分的にはおにぎりランチ」

その言葉に従うように、鬼谷さんの言葉の後に続いて、帽子をかぶった女の子が販売機の前へ。

「けれど、金銭的には好物のハンバーガーランチも買えます。今日の私はちょっとだけリッチ。さあどうしよう」

うーんうーんと悩む女の子。

「と、そこでもう一人の子がサイフを忘れてしまっています」

帽子の女の子の後ろで、鞆をさぐっていたもう一人の子が「あ！サイフない！」と大きな声を出す。

声は、人の少ない食堂で意外な程響く。

「それを見た彼女は、黙っておにぎりランチの食券を二枚買います」

帽子の女の子が食券を二枚買っているのが、手の動きでわかる。その食券を一枚もう一人の子に渡す。

受け取った子はびっくりして、「ごめんね」と謝っているようだ。

「二人そろってちょっと遅めの昼食です。よかったよかった」

「すげー……」

「ほー……」

「……すっい」

「……………」（無言で手を叩く）

皆あんぐり口を開けて感心しきりだ。

何だかすさまじい物を見せられてしまった。

志貴崎さんなんてもう言葉も出ないようで、口をあんぐりと開けて手を叩いていた。

「というわけで、私は電磁波を操る超能者です」

「電磁波？」

「ええ」

「人は電気で動きます。電気で考えて、電気で筋肉を動かして、電気で味や感触を知ります。そしてそれは、体のあちこちから漏れ出しているんです」

「ふむふむ」

「人じゃなくても、動物や、物からも色々な電磁波が出ています。色や堅さ、本当に色々な電磁波です」

「そんなに……」

「わたしはそれを感じる事が出来るんです」

「はあー……」

「……どこに居ても分るの？」

「そうですね。半径……50kmくらいは、大体わかります」

「ごじゅう!？」

「ふふ、はい」

「至近距離なら、考えている事もわかります」

何とも桁違いな能力だ。

「私の能力を研究している人は、私の事を【感じる者】と言います」

「感じるだなんてえっちー!」

「ふふふ、敏感すぎて困ります」

山城さんの茶々にも、軽く受けて返す鬼谷さん。

それを見た俺は多分この二人には、逆立ちしても敵わないんだろ  
うな、と思った。



「もちろんプライバシーですし、皆さんの頭の中をのぞいたりは絶対にしませんよ」

と鬼谷さんは首を少し傾げて言ってくれた。

まあ、俺が彼女の能力を知ったところで、防ぐ手立てはないのだし、信じるしかないとも思う。

それでも、そう言ってもらえる事が嬉しかった。

他の皆も同様の考えのようだ。

そして、「見たくないものもみえちゃいますしね」と彼女は寂しそうに笑った。

つまりはそれがデメリットなのだろう。

「じゃあ最後は私――！」

最後の太鼓と云ったところでツインテールを揺らしながら、元気いっぱいには山城さんが立ち上がった。

「柎立って――」

「む」

山城さんの指示により、志貴崎さんが立たされる。

「柎は私の目を見てて。皆は私の顔みちゃだめだからね」

「うむ」

「顔を見ちゃダメ？」

「いいからいつから――」

何が起こるのであろうか。

ここまで来ると次はどんなトシデモ能力が飛び出してくるのか、

ワクワクしてくる。

数分後、そこには信じられない光景が広がっていた。

両手を腰に添え、ふんぞり返りながら壮大に志貴崎さんを見下ろす山城さん。志貴崎さんはその前に跪いてる。

「まだまだ頭が高い！！ ひれ伏せ！！」

「はー！！！」

「お前の名前なんだ！」

「豚でございます！！ 貴方様の前に跪くこの私めは、言葉を喋る事すら身に余るただの豚でございますー！！」

「ああん？ じゃあ人様の言葉なんて喋るんじゃ無いよ！」

「ぶひー！！」

「お前の名前はなんだ！！」

「ぶーぶひぶひー！！」

「豚語はわからんわー！！」

「ぶひー！！（涙声）」

なんだろうこれ。すさまじい光景だ。

すでに志貴崎さんは、跪きを通り越して地面にへばっているし……。というかこれ、腕変な方向に曲がってない？

顔を見るなど言われた以上、地面にへばる志貴崎さんしか確認する事はできない。

「ちょ！ そこらへんでやめたほうがっ！」

「そ、そうですよ！」

「……だめ」

「ああ！？ 私に指図するんじゃないよー！！」

むちゃくちゃだー！！

「ご、ごめんねー！ 変なスイッチはいっちゃってさー」

「いや、問題ない。しかし凄いな。頭にもやがかかっているように体が言うことを聞かなかった。一体俺は何をしていた？」

「ちょ、ちよつとスクワットやらされただけだよ」

「ふむ。そうか」

どうにかなだめて我に返った山城さんは、『てへぺろ（・く）』  
といった感じであんまり反省しているようには見えない。

志貴崎さんは腕が凄く変な曲がり方をしていたが、軽いねんざで済むそうだ。

自分だったら……と想像して小便ちびりなくなった。

……チビツテナイヨ？

志貴崎さんの名誉のために、先ほどの光景は内緒にしておこうとアイコンタクトで了解し合った。

「ってーわけで私は幻術の異能者なのさ」

へへーんって胸を張る山城さん。うぐ、へそがちらつと見えた。

俺は今まで単純に彼らを『能力者』と呼んでいたが、『人でありながら人を超えた者』として、世界は彼らをいくつかジャンル分けした。

『異常者』、異常な視力、異常な筋力を持った志貴崎さんや野谷さんのような人。

『超能者』、超能力、テレパシーを持った鬼谷さんのような人。

『異能者』、上記二つでは括れない、まさに『人外』というべき何か』を持った人。

彼女、山城 ミキの能力は幻術。

「私が『演技』をすると、それを見たり聞いたりした人は、幻術にかかっちゃうのだ！」

「聞いても？」

「うん。さっきのは見ると幻術にかかるよ。ほら、よくあるじゃない？ 歌声を聞いたら眠るとかって神話とかそういうの。その『演技』をすれば、聞くだけで幻術にかかっちゃうよん」

「はあ……」

彼女には、種もシカケも必要ない。唯一必要なのはその体。そして相手にある程度の知能があること。

まさに異能。現代の科学が到達できない地点が彼女一人の中に。彼女の演技を見た者達は、涙を流しながら【愛されない恋人】と二つ名をつけた。

その演技を皆が愛した。

しかし、彼女自身は誰からも愛されない。

彼女の本質は誰にもわからない。

永遠に……。

だから彼女は『恋人』であるが『愛されない』。

「今も、『女子高生』を演じてるって訳だっ」

「『だっ』って……」

今も彼女は演じている。演じる事を止める事はできない。

今も一人の女子高生を……。だからこそ、俺は彼女に会った時から惹かれていた。目が離せなかった。

「風と同じで、私もむやみにこの能力使わないから安心していいよん。まあどうやっても今みたいに、微量に能力の影響は出るんだけどねー」

たはーっと、すまなそうに山城さんが謝る。わざわざ自分から使わないと宣言してくれる。その心遣いがたかった。

「皆すごいなあー」

「それで済ますお前もお前だな」

「すごすぎてもう頭パンクしてるだけだよ」

もう驚かされっぱなしで、何かなにやら頭がパニック状態。お手上げ。

完全に理解の範囲外だ。

そんな彼らが学園を相手取って、『楽しそうだから私の弟も学園に入れる』という理由で交渉した姉には劣るというのだから、姉は一体何者なのだろうか。15年一緒に暮らしてきて今更ながら、姉の自由さにあきれるばかりだ。

「けど皆それぞれの能力知らなかったのか？　いくら顔合わせなくとも、お互いを知る機会くらいありそうなものだけど」

「……色々あったから……」

「色々か……」

異口同音に同じ事言われた。

多分本当に色々あったんだろうな。常人には理解できない範疇で彼らは生きている。

「皆でこうやって、顔を合わせて落ち着いて話す機会は初めてだ」  
「そだねー」

「上村さんのおかげですね」

「……おかげ」

「いや、そういう事でもないだろ」

俺のおかげだといわれて、思わず頭をぼりぼりとかいた。

夏休み中ずっと不安だった。この学園で俺はどうなってしまうのか。

俺と彼ら『能力者』は、あまりにも違いすぎると思っていた。いや、実際違っていた。

しかしもう不安はない。やっていけそうだ、と思えた。

そしてそれと同時に、彼らが今までまともに顔を合わせていない事も思い出す。

彼らが明日からはまた、学園にこない事も十分にあり得る。せつかく知り合えたんだ。この縁は絶対に切りたくない。と、彼らにあって数時間の短い間で、思えるようになっていた。

「な、なあ。皆はなんで始業式に参加したんだ？ 本当は来なくてもよかったんだろ。明日から学園来なくなるのか？」

若干不安もあつたが、明日から会えなくなるのは正直さみしい。たまには会えるんだろうけれど。

「ふむ。その事なんだが、ちょっと皆に相談がある」

志貴崎さんが俺の言葉に反応して、少し考えた後、ずいっと顔を寄せてそんなことを言ってきた。

なんだか、天性の巻き込まれ癖のある俺の予感がびんびんですよ。

二話 友好を深めよう？ (改訂) (前書き)

完全書き直しに W

## 二話 友好を深めよう？（改訂）

「思い出作りをしたい」

「思い出づくりー？」

「そうだー！」

そして志貴崎さんは喋り出す。

今まで彼はやりたいことをやってきた。色んな所へ行き、様々な場所を登った。

先月はヒマラヤ山脈にも行ってみた。

しかし、その胸が満たされる事が無かった。

ヒマラヤから望む広大な景色、その光景を見たとき彼は突然気が付いた。

自分には仲間がない。

仲間どころじゃない。親友、友達、恋人。そのどれもが彼には無かった。

能力者としてどこまでも一人で行ける自分に、誰も追いついて来る事は無い。肩を並べる事ができない。

もちろんそういった場所に行くには、様々な人の協力が必要だ。

しかし彼らは所詮スタッフ。その関係にあるのは『金』だけ。その場を離れると、もう連絡すらも取らない。

志貴崎さんを取り巻く人々の目は、どこまで言っても『人ならざる者』へ向けられる物だった。

そんな中でどんなに広大な景色を見ても、どんなに素晴らしい風景を眺めても、ビデオカメラに映るたった一人の自分と並べると、なんともくすんで見えた。

「俺の何と薄っぺらい事か！」



彼は山に吠えた。

今までしてきた行為が、自分が、全てがなんとも薄っぺらく感じた。

隣でこの景色を見る相手が欲しかった。

「やったな！俺達！！」

と笑える、漫画みたいなやりとりをする相手が。

それは友でもいいし、仲間でもいいし、恋人でもいい。

彼にはそれらの関係の違いが良く分からなかったが、それでも隣で笑ってくれる『誰か』が欲しかった。

それが、志貴崎さんが始業式に参加した理由だった。

高校デビューじゃなくて、始業式デビューというわけだ。

同じ能力者同士なら、そうだった『関係』になれると思った。そして、相手が自分に追いつけないのならば、自分は歩みを緩めようと、そう思った。

「というわけだ！」

「え、俺ヒマラヤなんてのぼりたくねー」

「私も遠慮します」

「私もー」

「……私も」

「なっ……」

それぞれが似たような反応をして、それを見た志貴崎さんは、がくつと崩れた。

絶対嫌だよ。こんな筋肉と山とか登るの。ありえない。というか途中で死ぬ。

「いや、別に一緒に山を登ろうといってる訳じゃ無い。一緒になに

「かやる友が欲しいんだ」

実際今日一日の俺達とのやりとりは、彼にとってとても楽しかったらしく、こういう事を色々とやっていきたいらしい。

「といつても、お互いに身の上や能力を晒したりしただけだよな。俺達。」

「それで楽しいって、どんな人生歩んできたんだこの人……。」

「……私も」

「実は私も……」

「私も……」

「皆そうだったようだ。」

志貴崎さんと一緒に山に登りたくは無いが、皆それぞれ思うところがあつて、始業式に挑んだらしい。

野谷さんも志貴崎さんと同じく、今まで色々やって来たようだ。

彼女はVRFPSが好きで、プレイしている内に色々な知り合いは増えたが、そこは所詮ゲームの世界。

すぐに勝敗にこだわるようになり、お互いのミスを責め合ったりとだんだんギスギスした関係に。

昨日は大会の途中だというのに、口げんかを始めたチームメイト達に嫌気がさし、今日が始業式という事もあり一念発起。

「ゲームの大会を放棄して参加してきたらしい。」

「大会を放棄して……。」

鬼谷さんは普段からその能力で、警察関係の人達に協力して日本中を飛び回っているらしいのだが、そこは常に鬱々としていて血の臭いが後を引いた。

嫌な物も沢山見てきた。その分お金も動いたが、その現状に遂に

耐えられなくなった。

気持ちを打ち明ける同年代の友達が、彼女にはいなかった。  
そして、今日からの生活に全てを賭けた。

山城さんに至っては世界各地で芝居をやるうとしたものの、共演者達が漏れなく彼女の幻術にかかって、芝居そのものが成り立たない物に。仕方が無いので、小さな劇場を回って一人芝居をしてきたらしい。

スポットライト一つを自分に当てて、その場から一步も動かずに理由は「照明係が幻術で使い物にならないから」だそうだ。

幻術など無くても、一流の演技が出来ると彼女は自負していた。  
それでやっていけると。

彼女は常に能力を制御しようと努めた。

自分の物であるはずのこの能力は、制御可能な物であると信じた。  
だが、そんな思いとは裏腹に、彼女は幻術と切り離される事は無く世界を渡った。しかも【愛されない恋人】などと、不名誉極まり無い二つ名まで頂く結果に。

そして、彼女のプライドは粉々に砕かれて傷心。  
あとは皆と同じだ。

それぞれの話を聞くと、なるほど確かに異能者達は『色々』とあるようだ。

特に山城さんは、何だか踏んだり蹴ったりだ。その背中に哀愁すら背負っているように感じられた。

「頭なでなでもいいよ？」

「遠慮しておきます」

「にしても皆、色々と大変なようだな」

「……ん」

「そうですね」

何となく皆、落ち込んだ空気をかもしだしている。  
なるほど。皆友達が欲しい、そして俺も転入したてでこの学園で  
友達がいない。

ならば答えは一つしかない。

「よし！ 話はわかった。それで？ 何するの？」

「む。乗ってくれるか！」

「登山は無しな。俺体力ないし」

「もちろんだ！」

子供のようにはしゃぐ志貴崎さん。  
分っているのだろうかこの人は。

「とはいっても、これといって計画は無いな」

無いのか。

「ようは遊べばいいんでしょ？ 海いこーよー海ー」

いきなり海か。

皆で何かをやると決まった瞬間それはどうかと思うぞ山城さん。

「あら、良いですね」

鬼谷さんも同意した！？

いや、二人の水着姿は是非とも見てみたいですが！！

「……指定の水着しかない」

スク水……だと！？  
と、とりあえずそれは置いておいて。

「ま、待て待て。まずは目標を立てようぜ？ そうしないと、方向定まなくてふらふらするだろ？ 立てなくても良いのかもしれないけどさ」

「……思いで作り？」

「何か漠然としてるな」

「そうですね」

「何だか部活みたいだね」

「この学園には部活ありませんからね」

「え！！ 無いの！？」

部活が無い学校なんて聞いたことが無いぞ！？

「皆やりたいことバラバラですし、一クラスあたりの人数が少ないですからね」

「なるほど」

確かにこの人達を見ると、能力者というのが大体どういった人達なのか、なんとなく想像できる気がした。

皆でうんうん唸りながら考えていると、突然志貴崎さんが顔を上げて叫んだ。

「青春だー！！」

「『ええええー……………』」

どん引きだよ。

何でこうもこの人は男臭いのか。いや男だが、なんとも漢すぎる。

「俺達は、今まで何をしてきた？ 小、中と進んできて高校まで年を重ねた。その歳月で何を得た？ 何を努力した？ 何を楽しんだ？ 少なくとも俺は無い。何も。自分の能力を掲げて『自分ができること』を、ただシナリオ通りに選んで来ただけだ。俺達は今まで取りこぼしてきた青春を取り戻さないといけない！」

「……ええええー！……」

どん引きだ。

力説して雄々しく拳を固める志貴崎さんには悪いが、どん引きだよ。

「まー、青春は置いてさー。確かになんとなく自分の能力中心に、過ごしてきたなー私もー」

「私もそうです」

「……私も」

どうやら志貴崎さんを含めて、あまりにも強力な能力を持っていると、似たような人生を歩むことになるようだ。

「じゃあまあ、目標は『青春（仮）』って事で」

「なんだ（仮）って」

志貴崎さんは、不満そうに口を『へ』の字に曲げた。

「思い出作りとあんまり変わらない気がするねー」

「話が進まない気がするし良いんじゃないか？」

「そうですね」

「……うん」

「じゃあ次は何をするかだよねー！」

「そうだなー」

「キャンプ！」

「準備大変じゃないか」

「サイクリング」

「どこから自転車持って来るの？」

「……カフェでお茶会？」

「お上品だな」

「山登」

「やだ」

皆でうーん考える。

目標は立てた物の『青春』って何さ。なんて哲学的な思考に頭が偏ってる気がする。

現在の時刻は二時。大体の生徒は既に学園を出て、都市に繰り出しているようだ。

食堂で昼食を食べる者はほとんど認められなかった。

「というか何で俺らは真面目にこんな事考えてるんだ？」

「えー？」

「どうせ遊ぶんだろ？ とりあえず街に出て適当に遊ぼうぜ」

「おーなるほど、圭ナイス」

「……それでいい」

「そうですね」

「ふむ、山登りならすぐ」

「やだ」

お茶会もすぐに出来るわこの筋肉が。

と言うわけで俺達一同は『青春』を求めて、街に繰り出す事にした。……なんのこっちゃだ。

食堂を出て皆でそろそろ広い学園の敷地を渡り、正門へと向かう。

「そういえば皆の能力見せて貰ったけれど、実際他の人達と比べてどれくらい差があるんだ？」  
「というと？」

志貴崎さんが首をかしげる。

「ランクの事ー？」

「まあ、そういうこと。皆はその最高ランクなんでしょ？」  
「うんそーだねーランク5」

つまり全部で五段階のランクがあるわけだ。

「そうですね。この学園にはランク3の能力者から登校しています」  
「え？ 1とか2は？」

「ランク1は、『動物の言ってる事がなんとなく分る』とか、お寺の和尚さんとかだねー」

「能力を持ってるかどうか微妙って事？」

例えば運の流れが何となく分るギャンブラーとか、そういう人達だろうか。

鬼谷さんは銀色の髪をゆらゆらと揺らし、人差し指をあごに当てながら解説をしてくれる。

「そうですね。科学的な根拠が無かったり、あつたとしても国にとって価値があまり無い人達ですね」

「国にとっての価値……」

「……私たちのランクは、……『国にとってどれだけの価値があるか』で決まる」

「ふうん？」

「そだねー。ランク1も2も、『科学で応用できたり、そもそも必



要無い』ってレベルな訳。何故か引きつけられる魅力を持っていたり、すごく小さい者を瞬間移動させたりとか」

それはそれで十分凄いと思うのだが、なるほど。理解出来た。

『何故か引きつけられる魅力』というのは、多分今演技している山城さんレベルの人の事を指すんだろうな。

「じゃあランク3からは、『国としての価値』が出てくるわけだ」

「そうだな。そういう事になる」

「まあ簡単に言えばーランク3は『普通の人から明らかに違う人』、異常な記憶力を持った人だとか、催眠術が使えるとかとか！」

なるほど、そういう人が『国にとって価値のある』人達なのか。

「そうですね。そしてランク4はさらに力が強くて『複数の人に能力を使える人』です。国にとっても大事な存在です。現在研究によって半分以上がその能力の解析が済んでいます」

「へえ、今の科学力ってそんな所まで行ってるんだ」

現在日本の技術力・科学力は事、PC関連に限ると、世界でも頭抜けて一位の座を守り続けている。

世界で一番と評されるAI『Alice』も日本で開発されたし、VR技術を最初に確立、一般家庭に広めたのも日本だ。

そしてそれらの新しい技術達は、能力者の解析・研究によってもたらされた。

能力者の謎を解明すること、それはそのまま国の発展に繋がる。

「そしてそしてー！ 私たちランク5ー！」

山城さんが腕を振り上げ人差し指をぴんと立てて、天を指す。

「私たちは何と！ 現在の科学力じゃわけわかめ！ 完全に解析不可能なのです！！」

腕を降ろして山城さんは自分を指さした。

「なるほど、そういう括りなのか」

単純な『能力の強さ』という訳では無く、国にとって優先度の高さがランクに反映されているという事。

鬼谷さんや山城さんの能力なんて、実際どうやって研究すればいいのか皆目検討がつかない。科学者達の悲鳴が聞こえてきそうだ。

「……そういう事」

「ふふん。ちなみに、ランク4からは体のどこかにチップが埋め込まれ、国外への移動を著しく制限されている」

ニヤつと志貴崎さんが笑う。

「チップ……」

その話だけを聞くと、まるで能力者達が、国の『モルモット』という印象を受けてしまう。

少し沈んだ俺を見て、志貴崎さんが俺の肩を叩いた。

「ふふん。まあ悪いことでは無い。俺達は能力者だが、別にその『能力』を使いこなせるわけではない」

「え？ というത്？」

「……ミキは幻術を完全にオフにできないし………柊は油断すると体がボロボロになる」

「そういう事だ。俺は常にチップにより身体データを監視されているが、それによって完全に体を健康な状態に保つ事ができる。この『監視』が無ければすぐに俺の体はボロボロ。使い物にならなくなる」

ニカッと笑う志貴崎さん。

「持ちっ持たれっって奴か」

能力者はそのチップから身体データを提出して、国はそれで發展する。同時に、国は能力者達を全力でバックアップする。

「そういう事だな」

そして、俺の姉も彼らと同じランク5。あの人が帰ってきたら、改めてあの人の非常識ぶりを見直す必要があった。

そうこうしているうちに、校門を抜けた。この学園は都市のほぼ中心に位置している。10分ほど歩けば、中心街へと着くことだろう。

## 二話 友好を深めよう？（改訂）

「さて、街に繰り出してきたわけだがっ」

ここまで来るのに軽く二時間程かった。いやもったか？

本当は10分程度の距離にこの時間だ。この人達は気が多すぎる。

その二時間、何があったのかを軽く振り返ろうと思う。

志貴崎さんは道ばたにあるテイクアウトできる店を見つけると、必ず顔を出して一つは購入して食べる。

「俺はすぐ腹が減るからな。」

「一日5回くらい歯磨かないと、すぐ虫歯になっちゃいそうだねー」

「……ガム」

「お、すまん」

淡々と答えられても困ります。次は餃子ですか。

キシリトールガムと餃子はさすがに『無い』と思います。

「いつもガム持ってるの？」

「さっき配ってた」

野谷さんの手に持つてるガムを見るとなるほど、パッケージにカラフルな柄に店か商品の名前らしき物が踊っている。

「右で餃子を食べながら、左でガムを食べる。次は逆だ。俺の必殺

技だ」

「……ええええー……」

誰をどう必殺するんだよ。どん引きだよ。

「ちなみに、虫歯は一つもないぞ。見る。この白い歯を」

「……うわぁ……」

ぎらりと光る志貴崎さんの歯に皆軽く後ずさった。

なんかもう、彼の立ち位置が決まりつつあるなあ。と思う一幕だった。

鬼谷さんと山城さんは、ゴスロリ系のファッションブランド店を見つけたと思ったら、野谷さんをずるずる引っ張り込んでファッションショー始めちゃうし。

「……ごわごわする」

「こつという服あるんだねー」

「ちよっと恥ずかしいですね」

そう言いつつも抵抗せずに着ちゃう野谷さんも、やはりかわいい服には興味があると言っているのか。

野谷さんの服は赤と黒を基調にして、全体的にシックにまとめている。ゴスロリ、と聞いてももっとフワフワしたものだと思っていたが、動きやすそうなシャツにショートパンツ、左右で丈の違うハイソックスと、中性的な彼女にピッタリだ。ショートパンツから伸びた白い足にガーターベルトが這い、何とも扇状的。

しかしそこはやはりゴスロリブランド。所々にレースが踊り、鎖

が付いている。

「ゴシックパンクというスタイルです。このスタイルはストライプ柄が人気で、ギターなどの楽器を持つと映えるんですよ。お客様は短い髪がかわいらしいので、小さな暗色のシルクハットも良いかもしれません」

「……こんなもあるんだ」

そう言いながら店員さんが、小さな黒のシルクハットをもって来て野谷さんの頭に被せる。

「……でも、頭が絶対に入らないぞってくらい小ささだ。手の平サイズ。どうするんだ？」と思ったら、クリップで止めるようになるほど。

「……どう？」

「うんうん。かわいいー！」

「うん、かわいいよ」

褒められた野谷さんは頬を染めて俯き、腕を動かしたりして服の感触を確かめているようだ。

動きが基本ゆっくりとしている野谷さんが、攻撃的とも言える服装をしているというギャップがなんとも面白く、かわいらしい。

山城さんはこれまたポピュラーな、不思議の国のアリスに登場するアリス風。針金で補強していないスカートはすんと落ちてしまいうが、体の動きに合わせて踊る水色のスカートは、健康的で元気なアリスのイメージにぴったりだ。

ツインテールを下ろして流したストレートの髪が綺麗なアクセントになっている。

長いスカートからは控えめに覗く白い靴下と、その先にちょこん

とかわいらしい革靴。

ただ、そこはゴシックブランド。エプロンには血糊がつき、山城さんの手には首の無い白いぬいぐるみが抱かれている。

「やはりこういった童話をモチーフにしたファッションは、昔からとても人気です。コスプレとしても勿論人気ですが、私たちのブランドでは独自のこだわりを持ってこういった服装も提供しています。例えばこのドレスはエプロンの端、レース部分が全て手縫い加工されていて生地も一級品です。着やすさを重視しつつも、工場生産では出せない『オリジナル』を全面に押しだし、どこに歩いても恥ずかしくない物に仕上がっています」

「うんかわいー！」

「山城さんにピッタリですね」

そういつて店員さんは、山城さんの服、エプロンの端を裏返して見せた。

なるほど、確かにレースの一つ一つ、細かい職人の技が光っている……気がする。

そしてある意味、一番似合っているのが鬼谷さんだ。漆黒を基本にした俺でも知って、典型的なゴスロリだ。フワフワのスカートに、濃淡を変えたフリルが踊る。

そしてそれを纏う鬼谷さんの鮮やかな銀髪は、凄い存在感を放ちながらも美しさを破綻させない。

「ゴスロリファッションにも動きやすさを重視した物、見た目の華やかさを重視した物があります。このいわゆる『ゴシックロリータファッション』はその典型で、作りも『ロリータファッション』というよりも『ゴシックファッション』に傾いた服です。しかし、コルセットや着る順番に針金など、お手入れ、体型に左右されすぎる『

『ゴシックファッション』とは違い、着やすさを追求されたこの服はまさに、このブランドの『顔』とも言うべき物に仕上がっています」  
「そうですね、確かに。ですけど凄い量のフリルですね。ふふふ、お姫様みたいです」

鬼谷さんは楽しそうにゆっくりと一回転。黒いフリルの中で、さらさらと流れる銀色の髪が美しく揺れる。

「ふむ。動きづらそうだな。それに暑そうだ」

「だから冷房ガンガンなのか」

「二人も着てみたら？ 圭は化粧すればギリギリいけそー」

山城さんが、意地の悪い笑みを浮かべている。

「確かに、圭さんなら似合いそうですね」

鬼谷さんまで！？

「男性用にリサイズした物もありますよ」

店員さんも反応しないでくれ。

「い、いやぁ遠慮しておきます」

「ほほう。これを着る男もいるのか。面白いな」

「ちょちょちょ！？」

フリルがたくさんついた、大きめなカチューシャに手を伸ばした志貴崎さんを必死に止めた。

この人、もしかしたら面白そうな事に基本惹かれるのかもしれない。



その後も女の子達が二着ほど洋服を着て遊ぶのをのんびり眺めて、ようやく店を出た。

野谷さんと山城さんは数着買ったようでご機嫌になっていた。荷物になるのでとりあえず店に置いてもらって、帰りに受け取るようだ。

二人が服を買う時レジのディスプレイに、目玉が飛び出るような金額が表示されてた気がするが、俺は何も見なかった事にした。

その後も買い食いする志貴崎さん、かわいい物を見ると飛びつく山城さんと鬼谷さん、ふらふらと突然いなくなる野谷さんと、一向に俺達は目的地にたどり着けない状態が続いた。

「子供かつ！ いや子供だけれど！ 何か見つけて行きたいときは俺に教えること！」

「はい。お母さん」

「わかった、お母さん」

「わかりました」

「……わかった」

「誰がお母さんだ！」

基本的に自由に今まで生きてきたのだろう。集団行動が苦手なのかもしれない。

と、服をちよいちよい引っ張られた。

「ん？」

野谷さんが俺を見上げていた。

「……ちよつと、……あそこで見たい物が」

彼女が指差す先にあるのは、一件のPCショップだった。

「卯月ってばPC好きだよー。自分で組んでるんでしょ？」

「……ん」

「へえー自作って奴か」

「……そう」

そういえばVRFPSが好きとか言っていたな。結構『PCオタク』だったりするのかな？

どうやらそういった自作する人達が利用する場所のようだ。俺のPCは5年前くらいのメーカー品だから、こういう店には入った事はない。

野谷さんに続き未体験な種類の店にワクワクしながら入ると、そこはまさに『カオス』な空間が広がっていた。

人が通るのもやつとの通路に所狭しとパーツが飾られている。ファンだけでこんなに種類あるのかよ。何か光ってるのあるし。

「この光るファンとか、どう使うんだ？」

「……透明な外見……だと……中も見えるから」

「なるほどな。しかしこれだけ光つてると目につるさそうだな」

「……私はあまり……好きじゃない」

「えー！ 良いじゃんこーいうのー！」

「ええー……」

「何よ！」

山城さん、派手なの好きなのか？

「……じゃあ、……私ちよつと見てくる」

「はいよ」

野谷さんは勝手知ったるという感じで、すすい奥に入っていく。俺も圧倒的物量に気後れしながらも適当に物色する。他の皆も色々見て回っているようだ。

とは言ってもここらへんの知識がまったく無いので、自然と足はゲームソフトコーナーへ。

昔からPCソフトやメディアはダウンロード販売が主流になっているが、未だにこういった現物での販売は一定の支持があるようだ。最近はどうもその市場も、縮小してきているみたいだが。

「スターダストオンラインって懐かしいな。もう10年以上になるんじゃないか？」

小学生のころにやっていた、VRMMORPGのパッケージを手取る。あの頃で既に5年目とかいつてた気がする。

大型パッチを定期的に適応する事により物語性を持たせたタイトルで、太陽が異常に近い惑星を舞台に剣と魔法を使って冒険する、SF色がちよつとあるファンタジーだった。

「太陽による惑星の死が先か、それを止める手立てを発見するのが先か、その未来を決めるのは君だ!!」

とかってチープなうたい文句だったような。

しかも『止める手立てを発見するのが先か』とか言ってるくせに、結局は最後に巨大なダンジョンが出現。ラストボスモンスターを倒せばOKという物だった。

「懐かしいなあ。これまだやってるのか」

中学受験をするためにこのゲームは引退した。

まあ大型アップデートのたびに細かいパッケージを買い直す必要

があり、俺のお小遣いだとしても続ける事ができなかった。  
ゲーム内で友達と小さな送別会をした記憶がある。

- - - - -  
- - - - -

スターダストオンライン - スターターパック -

あの世界中1000万人がプレイしているSDOの超お得パックが  
登場!!

永遠に無料宣言! 基本料金無料!!

今までのアップデートタイトルが全て込み込みですぐ遊べる!!

低スペックPCでも快適プレイ!

今からでも遅くない! 経験値ブーストなんと三倍!!

最初の旅を協力サポート! 太陽神の剣、太陽神の盾、女神のくじ  
引きをプレゼント!!

超かわいい!! アバター装飾バランゴの花をプレゼント!

マグポイント300P付!

ゲーム内職のプリーストプリフィギュ付!

- - - - -  
- - - - -

「うわぁ」

『!』多すぎだとか、プレゼント沢山ありすぎだとか、まずマグ  
ポイントって何だよとか、ゲームパックなのにフィギュアが付いて  
くる意味不明さだとか色々あるが、顧客獲得のための必死さが伝わ  
ってくる物凄いパッケージデザインになっている。

情報量多すぎだ。

「なにになに?なにみてるの?」

「ん。いや、このゲーム小学校の頃やってたんだが、まだやってるんだなあって思ってた」

「何か、凄い色々ついてるねえ。1980円って値段が安いのか高いのかよくわからないけどー。あ、この人形かわいい」

「必死さが透けて見えるだろ？」

山城さんも食いついてきた。背表紙を見たり裏返してみたり、パッケージ所狭しと踊る文言を見て「バランゴの花ってなにさ」なんてぶつぶつ呟いている。

「……そのゲームは先月終了した」

「お、野谷さん。もういいのか？」

「……ん。……値段確認だけだったから」

野谷さんの説明によると、数多くの大型アップデートによるイベント等で人気はあったものの、ゲームについていけない人が続出。

また、度重なるアップデートによって増えたスキル、種族、アイテム類の調整が甘く、方向修正が出来ない状態になりゲーム内バランスが崩壊。他のゲームへの流出を防ぐ事が結局できずに、先月ひとつそりとその13年という長いゲームの歴史の幕を閉じたらしい。

良く見るとこのパッケージ埃を被っている。いつの物なんだこれ。

「卯月ー。卯月はどのゲームやってるのー？」

「……これ」

「『ハローポイント』、FPSか？」

「……ん」

パッケージには、『HALLO POINT』とだけ書かれた文字に兵士が一人。現代の装備じゃなく、200年前くらいの古い装備のようだ。

裏に書かれた説明を読むと21世紀頃当時の軍事装備を基準にした、5対5に分かれて銃撃戦を繰り広げる少人数市街地戦闘物らしい。リアル志向で難易度が高いタイプのジャンルか。

軍部隊とテロリスト部隊に分かれて対戦し、テロリストは爆発物をしかけ、軍はそれを解除して遊ぶゲームだと教えてくれた。

「俺はこの手の硬派なのはやったことないな」

「……面白い」

「へええ……」

「俺もFPSはプレイした事あるぞ。飛行機乗ったり車のったりする奴だ。適当に撃つても結構相手に当たるんだ」

「……そういうのも楽しい。……『お祭り系』って言う」

「そういう言い方をするのか」

「……このゲームはもつと難しい」

「そうか。じゃあこれ、今度教えてくれ」

「……ん」

自分の好きなゲームに興味をもたれて嬉しいらしい。野谷さんが嬉しそうに頭を軽く上下に振った。

値段は6900円か。ちょっと高いけれど何かのゲームと一緒にプレイするのも楽しそうだし、買う事にするか。

「どうせなら皆でやればいいじゃん。けーちゃん携帯だしてー」

「『けーちゃん』で何だ」

隣からパッケージを覗き込んだ山城さんは、ポケットから携帯を取り出して何か操作をしている。

慌てて俺も携帯を取り出すと、山城さんに携帯を奪われた。

「おお!？」

「へへーん」

そのまま俺の携帯と、自分の携帯を操作する山城さん。

「はい」

渡された俺の携帯ディスプレイに表示されたタスクには、「H A L L O P O I N T P C P A C K A G E 0 . 2 %」の文字が。詳細情報を見ると山城さんからのプレゼントとなっている。これでダウンロードが完了してP Cへデータ転送すると、ゲームが遊べる事になる。

「わ、悪いってこんなの」

「いいっていいってー」

「いや、女の子におごってもらって普通ちがくね？」

「この位おごった内に入らないよー」

のほほんと返してくる山城さんだが、どう考えても奢った内に入る値段だと思う。やっぱりお金は俺が出したい所だ。

とっさに財布を出そうとすると、山城さんの機嫌が悪くなる。

「もー。女の子が奢ったんだから女の子立てなさい！」

「いや、逆だと思っんだが」

お互い譲らず平行線にしかならないので、山城さんがしびれを切らし「じゃあ今度私の用意する洋服着てくれればそれでいいよ！」と譲歩策を提示してきた。

俺はありがたくそれに乗る事となった。どんな服が用意されるのか想像するだけで恐ろしいので、考えないようにしよう。

とりあえず野谷さんの用事も終わったことだし外に出る。

と、入り口で志貴崎さんと鬼谷さんが待っていた。

志貴崎さんは店舗前で広げられている商品を物色しているようだ。

「もういいのですか？」

「……ん」

「おお、終わったか。見る。このメガネ凄いぞ。相手の戦闘力が見れるのだ！」

「……なんだそれ？」

「かつこいいだろう？」

「格好良くは無いかない」

「何だと！？ このかつこよさがわからんとは……」

いや、かつこよくはねえよ。

興奮気味の志貴崎さんは、赤みがかったメガネをつけていた。

商品棚のポップを見ると『戦闘力測量機。これで相手の強さをチェックナウ！』と書かれており、隅にえらく髪のとがった男がメガネをつけてどや顔してるイラストが添えられている。

どうやらパーティーグッズのようだ。

「戦闘力5か……」

ハン、と言った感じで志貴崎さんにどや顔された。ちょっとムカつく。

「！？ 戦闘力4000だと……！！ な、……まだ上がっているだ……！！」

向かいのハンバーガーファースト店の軒先に置かれた人形に向かって、志貴崎さんが狼狽している。



「……チーズバーガーを買ってきていいか？」  
「そのメガネを戻してからならな」

いそいそとメガネを棚に戻し、小走りで志貴崎さんは店の中に入  
っていった。

少し経って、店から出てきた志貴崎さんの両手にはそれぞれ、チ  
ーズバーガーとダブルチーズバーガーが握られていた。

「両方ダブルチーズバーガーでいいじゃん」  
ダブルチーズ

呆れ顔の山城さんを見て、何を勘違いしたのか「何だ？食いた  
いのか？」と志貴崎さんは食べかけのハンバーガーを彼女に差し出  
した。

数分後女王様モード<sup>役</sup>になった山城さんによって志貴崎さんが、地  
面にへばったのは言うまでもない。

……というわけで、たった10分の道のりがあるだけで、この人  
達は色々と自由奔放さを発揮した。

まあ、楽しかったから良いんだけどね。なんだかんだでさ。

## 二話 友好を深めよう？（改訂）

そんなこんなで、ようやく中心街へと出てきた俺達。

この『都市』は円形の形をしている。学園とこの場所を『都市』中心として、東、西、南、北、の四つのエリアに分けられている計画都市だ。その詳細を説明するのは、また今度でいいだろう。

「ここまでで、二時間くらいかったな。まあ、道中で色々寄るつても楽しいけれど」

「皆で一緒にお洋服を見たり、買い物したりするのは楽しかったですネ」

「かわいい洋服買えたしね！ 卯月とおそろなんだよー」

「……ん」

「皆で買い食いた物を食べながら歩くのはまた、格別な物があるなっ」

「食べ歩きしてたのは志貴崎さんだけだからね」

「む」

まあ皆楽しそうなのでよかった。

とりあえず連れだつてここまで来たのはいいが、どこで遊ぶかが問題となってくる。

「おかーさん何かプランあるー？」

「お母さんは止めて」

「違和感無いですね」

「止めてよね！……まあ、いくつか思いついたのはある」

「……何？」

「まあ、色々思いついたんだけどさ」

・ボーリング

志貴崎さんがハッスルして何か物壊しそう

「「「あー」「」」」

「自分の力の制御くらいできる！」

「信用できないから却下」

「何だと」

筋肉をうねうねさせるな！

・中央街のターミナル駅に隣接された、『ruin』にて、ワイン  
ドーシヨップینگ

道中で色々買い物したので、今日は却下

「意義なーし」

「そうですね」

・カラオケ

志貴崎さんが以下略

「信用ないな」

だから筋肉をうねうねさせるな。

まあ皆がカラオケ好きかどうかも良く分からないので、今日の所  
は却下の方が良いだろう。という判断もあっただけだな。

・映画

皆の好みも分からないし、そもそも出会って初日でいきなり映画ってどうよ

「皆で何かした方が楽しいよねー」

「……ん」

「そうですね」

「そんなわけで色々と考えた結果、俺の頭の中にある遊ぶ場所として一番今日にふさわしいというか、無難な所があそこなわけだが」

俺の指さす先にはゲームセンター。100年から200年前のレトロゲームから、最近のプライズ系のゲームまで。色々そろえた大型店舗だ。

「ゲームセンターかー」

「……入ったことない」

「私も無いです」

「UFOキャッチャーくらいしかしたことないなー」

「ふむふむ」

やはりVRゲームが主流の昨今では、皆こういったゲームセンターでは遊ばないようだ。俺も『都市』以外の街を知らないので何とも言えないが、こういった大型店舗以外は生き残ることができなくて、もうほとんど数が無くなっているらしい。

それでも俺達のように外で遊ぶ人達が居る以上、一定の需要という物はやっぱりあるようだ。

反対意見もなさそうなので、そのままゲームセンターへと入る。中に入る俺達を様々な音の洪水が包み、等間隔で並べられたゲーム画面の光が目飛び込んでくる。奥の方にはメダルゲームもあるようだ。ピロピロ、ピカピカ。何ともいえない雰囲気をもっている。

「なあ、あれは何だ？」

志貴崎さんの指さす先には、ホッケーゲームの大型筐体があった。

「ホッケーゲームでしょ？」

「ホッケー？」

志貴崎さんの頭に疑問符が浮かんでいる。

まじか、流石に知っているだろうこれくらい。

「両端に一人か二人ずつ立ち、丸い板……コインですかね？ を、コレで弾いて相手のゴールに入れば点が入るという対戦ゲームです」

「なるほど」

鬼谷さんがゲーム筐体に近寄り、ホッケーゲームに使うカップを持ちながら志貴崎さんに説明する。

説明を受けた志貴崎さんは、目をきらきらと輝かせて早速コインを投入。

「さあ、俺の相手は誰だ！！」

武士の笑みを浮かべて、志貴崎さんが左右に揺れている。なんだか全身からオーラが出ている。……気がする。

「ええー……」

「志貴崎さんの相手はちょっと……」

女性陣がどん引きなので、仕方なく俺が対面に立つ事になった。

「普通に遊べよ！」  
「ああ！」

絶対わかってない。目をキラキラさせやがって。

ピーツと言うゲーム筐体からの音と同時に、コインが俺の手元に  
でてきた。ゲーム開始だ。

とりあえずジャブのつもりで、”思いっきり”打ってみた。「俺  
の全力はこれくらいですよ。だから志貴崎さんも、これくらいにし  
てくださいね」という俺の意思表示だ。

カッンという軽い音と衝撃を手元に残して、まあまあな速度で弾  
き出されるコイン。

「ふんっ！」

志貴崎さんの腕がブレたように見えた瞬間、手元を『何か』がす  
ごいスピードで通り過ぎていき、俺のゴールにガンツと衝撃と共に  
入る音。

110！

電子音声によって今の『何か』が、志貴崎さんのコインだと認識。  
マジか。

「見えなかった……」

「私も……」

「凄いですね……」

「ふはははー！」

目が点になって呆然としているところに、後ろから俺の制服を引

っ張る感触。

野谷さんだ。

「変わって」

「あ、ああ」

彼女と場所を交換する。若干眉が上がっていた。ゲームでの勝負事、好きなのだろうか？

というか喋りがスムーズになっていたな。

野谷さんは手元に出てきたコインを、コンッと軽く弾いて志貴崎さんに打ち出した。女の子なのでどうしても早さは無い。

それを迎え撃つ志貴崎さんは強者の笑み。

手加減する気まったくねえ！！

志貴崎さんがコインを放つ瞬間、野谷さんはカップを少しだけ持ち上げた。

静かに見据えて、小さく微笑み一撃必中の構え。

そして志貴崎さんの手が高速で動き、コインが放たれた。

彼が打ったであろうシャツというコインが滑る音と、激しくそれのぶつかるすさまじい音が二人の間で鳴り響く。

俺には何が起きたのか、まったくわからなかった。

「流石！俺の一撃を止めるとは！！」

「遅い。ナメクジよりもまだまだ遅い」

「ふふん。それでは次はせめて、ネズミくらいの早さで打たせてもらおう」

ナメクジと言われ、志貴崎さんの笑みがますます深くなる。

野谷さんも挑発するような視線を彼に注ぐ。

彼女がカップを持ち上げる。その下にはコインが。

どうやら彼の放ったコインを、カップで上から押さえつける事によって止めたらしかった。

俺にはまったく見えなかったが、彼女には余裕で見えていたようだ。

これが能力者……。

まさに『常識の範囲外』、『人成らざる者』。

そして彼女の力でも止められるということは、志貴崎さんはちゃんと『手加減』しているらしい。

こうして二人の間で、すさまじいホッケー合戦が繰り広げられる事となった。

さらさらと煌めく野谷さんの髪が優雅に舞って、攻撃を丁寧に弾く。

それを志貴崎さんは、強引に拾ってさらに強くはじき返す。

ほのぼのしたほんわか対戦ゲームが、この二人がプレイするだけでここまで恐ろしい物になるのか。二人の間を行き来するコインはまさに電光石火。すさまじい音を聞くことでようやくその存在を知る事ができるというレベル。

お互いに一步も譲らない攻防を見て、周りにギャラリーが出来はじめていた。

「リミッターを付けた野谷さんって、あんな感じなんだなあ」

「そうですね」

「はー……」

多分今の野谷さんはリミッターを『付けて』、脳の負荷を減らした体の反射に重点を置いているんだろう。

「ちなみに、あんな状態の人はどんな事を考えてるんだ？」

「何も」



「え？」

「多分ですけど、何も考えていないでしょう。いえ、考えているとは思いますが。例えば『勝ちたい』とか『負けたくない』とか、そういった事だけを考えていると思います。二人の世界というか、体が考えるというか。良く言いますよね『あの時は何も考えていなかった。相手と自分以外の全てが見えなくなって、体がかつてに動いていた。気がついたら終わっていた』とか」

「へえー」

結局二人の攻防（どっちが攻めで、どっちが守りかよくわからないが）は、タイムアップまで続けられ、最初に俺が奪われた一点が決め手となって、志貴崎さんの勝ちとなった。

周りに居たギャラリーが湧き、ようやく人が集まっていた事に気づいた野谷さんがびくりして、俺達の所まで小走りやってきた。

「……楽しかった」

動いたせいだろう。顔が上気して、頬が赤くなっている。

「いやあ楽しいな！ 本気でやれば勝てるだろうが、あのゲームも野谷も壊してしまうからな！ また勝負しよう」

「……ん」

二人ともご満悦のようだ。

志貴崎さんは何か物騒な事を言っているが、実際そうする事ができると思えるのが恐ろしい。

「それにしても二人ともすごいねー」

「そうですね」

「流石能力者って感じが」

「ふふん。五分五分の勝負というのは楽しいものだ」

志貴崎さんはすごく上機嫌だ。そうか、『五分五分』の勝負、したことなかったんだな。この人は。

その後も皆でできるゲームを中心に、楽しい時間を過ごした。

皆ゲーム自体はしたことあるが、ここにあるような実際に体を動かすゲームはまったくやったことが無いらしく、ダンスゲームで志貴崎さんが変な動きになるのを皆で笑ったり、バスケットボールをコートに放り込むゲームで、野谷さんが入れられず「正確に見えても、ボールを正確に投げられるわけじゃない」と少しすねたり、クイズゲームを皆で考えながら答えたりと、皆のいろいろな面が見れて面白かった。

さて次は何をしようかという所で、野谷さんがUFOキャッチャーを見ている事に気がついた。

「欲しいのか？」

「……っ！」

「あ、ごめん、驚かしてしまったか？」

俺の声にびっくりしたのか、野谷さんが慌てた様子であたふたしている。

見ると、毛糸で編まれた犬のぬいぐるみの取れるUFOキャッチャーだ。

ポケットから500円玉を取り出しゲームに入れる。100円で一回、500円で7回だ。

一回で取れる程腕の自信は無いからな、俺は。（だからといって7回で取れるかは微妙だが）

まずは横軸の移動、……ちよつと右にずれたか。

次に縦軸、横はなんとなく分かるが縦方向はなんとも分かりづら

い。

アームが移動し、なんとなくのタイミングでボタンを押した。その瞬間下に降り始めるアーム。ぬいぐるみの腹を抱えられるようにすぽっと入った。俺の狙った位置とは違うが、中々良い位置に思えた。

ゆっくりと弱々しくぬいぐるみを抱えてアームが上がり始める。アームの動きに合わせて、ゆっくりと身を起こし始める。

「……あ」

が、そこでずるっと滑り落ちて転がってしまった。何も持っていないアームが所定位置に戻り、7というカウントが一つ減った。

「難しいなあ」

横軸は何とかなるが、縦はなんともな。とりあえずリトライだ。横軸での移動………おっけー。そして縦。

アクチュエーターの微かな駆動音が、ガラス越しにやけに大きく聞こえてくる気がする。

ここだ、と思った瞬間俺の手の上に、野谷さんの手が被さってきた。

アームが止まる。

びっくりして野谷さんを振り返るが、野谷さんはぬいぐるみに集中しているようだ。

持ち上がるアーム。

今度はびったり犬の狙ったポイントを掴んでいる。重心も綺麗に合っそうだ。

俺の手の平の上、野谷さんの手に力がこもる。

彼女の体温が伝わってきて、俺の体温と静かに混ざる。

のんびり動くアームを見ながら、時間が何倍にも引き延ばされたような、そんな錯覚。

ゆっくりと、空中へと持ち上がるぬいぐるみ。

そのまま所定の位置へ。

アームが開いて落下、ごろごろ転がって取り出し口から出てきた。

「取れた」

「あ、ああそうだな」

内心の戸惑いを隠して、野谷さんに向き合う。

どうやら脳のリミッターを付けているようだ。そんなにぬいぐるみが欲しかったのか。

彼女の『目』があれば、距離感を計るのも朝飯前なのかも知れない。

「あげるよ」

「……あ……ありがとう」

まあ、俺が取ったのとは違うのかも知れないが……。

照れてうつむき、胸にぬいぐるみを抱く野谷さん。

正直、すごくかわいい。

「あらー『青春』ですねえ」

びっくりして振り返ると、三人がニヤニヤとみていた。

気が動転して、「そ、そんなんじゃないんだからね!!」と意味不明な返しをしてしまった。

「あー楽しかったー！」

ゲームセンターから出た山城さんが、大きく背伸びをする。  
日は既に沈んで、辺りはすでに結構な暗さになってきていた。  
時間くらいは何だかんだで遊んでいたのだろうか。 4

「今日はここらで解散かな」

「そうですね」

「……ん」

「また明日だな！」

ここでお互いの連絡先を交換する事にした。

「ほいほい。メールアドレスげっちよ」

「げっちよって何だよ」

「俺の携帯、どう使った？」

志貴崎さん……。

「志貴崎さん、携帯の使い方くらい、常識だと思っんですけど……」

……。あ、これですよ」

「おお！ありがとうございます」

「そういえばさー。『部屋』立ち上げちゃおうかー？」

「部屋？ ああ、『heyachata』か」

「そそー」

「何だ？ それは」

「あら、椋知らないのー？」

「パソコンや携帯電話でチャットが出来るサービスですね。VR環境下でもお話ができます」

「なるほど。それは面白そうだな」

「……じゃあ、私が作る」

「お、野谷さんそういう事も出来るのか」

確か自分で作るのは、かなりのPCの知識が必要だったはずだ。  
流石、と言った所なのだろうか。

そういうわけで野谷さんが常設型の『部屋』を組む事になり、後  
ほどメールでアドレスとパスを送ってくれる事になった。

そのままこの日は解散となりお互いに別れの挨拶をして、それぞ  
れの帰路へと付いた。

## 二話の青春度は何点ですか？（改訂）

「ただいまー」

家に帰着した俺は、玄関の明かりを付けつつも一応帰ってきたことを告げた。

返事は返ってこない。やはり姉はまだ帰ってきていないようだ。嘆息し自分の部屋へ向かう。

と、ポケットに入れていた携帯が、振動と共に軽い電子音を鳴らせた。メールが届いたようだ。

取りだして、着信したメールを開く。

「アドレス、パス。部屋作りました」

簡潔な文章のそれは、野谷さんからの物だった。

「早いな」

早速スリープ待機させていたPCを起動。

すぐに表示されたデスクトップからブラウザを起動、アドレスを打ち込み『部屋』へアクセスする。

基本的に『部屋』は掲示板の体をしていて、リアルタイムでチャットも可能だが、お互いが全く同じ時間に居合わせることもほとんどないので、VR接続はしないのが普通だ。

名前の入力欄が出てくるが、ここは素直に『k e i』とだけ入れて入室。

k e i       ：テスト

i r i s     ：お帰りなさい。圭。

速攻で返事が返ってきた。だけど『iris』って誰だろう。  
場所間違えたのかな？　とも思ったが『圭』と返してくる事から、  
ここで間違いないと思うんだけど……。山城さんあたりだろうか？

NOYA　：早いね

しばらく経って、野谷さんが反応してきた。

kei　：「iris」って誰？山城さん？

iris　：私は「野谷　卯月」のコンピュータ操作をサポートしますAIの「iris」です。よろしくお願いします。

NOYA　：この部屋に常駐して貰って、色々皆のサポートも頼む事にした

kei　：何かメイドさんみたいだな

iris　：そう考えてもらって構わないです

かなり柔軟に言葉のやりとりができるAIみたいだ。こんなに素早く言葉を返してくるAIは、今まで見た事が無かった。

どこかで研究中だったり、開発中だったりする技術でも使われているのかもしれない。

Miki　：やほやほー

iris　：お帰りなさい。ミキ。

nagi　：お邪魔します。

iris　：お帰りなさい。凧。

Miki　：おー、そんなの居るんだね卯月。このソフトそんなのも組み込めるんだー

このソフトは『部屋』に入る前の会話も全て記録されているので、



時間をさかのぼってログを見る事が可能だ。だからirisさんの説明をわざわざする必要は無い。

nagi : よろしくお願いしますね。

iris : こちらこそ、よろしくどうぞ

NOYA : 基本的に色々と改造できるから、いじっていくつもり

うーん。何だか凄いハイテクな『部屋』になっていきそうな予感が。

Sikisaki Momiji : これで入れたか？

iris : お帰りなさい。桜。

Sikisaki Momiji : ほーAIか。VR接続すれば会えるか？

iris : 現在私にアバターは設定されていませんので、光る球体として描写されると思います。

Sikisaki Momiji : ふむ、残念だな

NOYA : 名前が長い。変えて

SM : どうか？

NOYA : うん

kei : いいのかよ

どん引きだよ。

Miki : いやいやー、けど今日は楽しかったよー。

nagi : そうですね

iris : 卯月は今日とても喜んでいたようです。特に、犬のぬいぐるみは大切に本棚に飾られています。

NOYA : /log delete iris (-1)

system : error

i r i s   ：基本的にログのデリートコマンドは、このソフトにはありません。

M i k i   ：別に照れなくて良いじゃん

k e i    ：？

k e i    ：まあ大切にしてるなら嬉しいよ。

      ログを削除しようとしているらしいが、犬のぬいぐるみは本人が欲しかったから取ってあげた（というのはちょっと違う）ので、まあ大切に飾ってくれるのならば嬉しい。

N O Y A   ：大事にする。

n a g i   ：ほこりが付くとお掃除が大変なので、ケースに入れた方が良くかもしれませんね

i r i s   ：商品検索「人形用ガラスケース」アドレス   サイズの  
にはぴったりのようです。こちらを購入しますか？卯月

N O Y A   ：うん

S M       ：便利だな！   i r i sさん、種類の沢山入ったチョコ  
レートとか無いか？

i r i s    ：商品検索「ワケあり、型落ちチョコレート6種類ラン  
ダム入り！   5 k g」アドレス   こちらなどがでしょうか？椀。

S M       ：ありがとうございます！

      早速、i r i sさんを有効活用するS Mさん……じゃない志貴崎  
さん。しかし5 K gって。

      それにしても、欲しい物を的確に判断して検索してくれるみたい  
だ。もしかして、とんでもない存在だったりするんじゃないの？  
うか。このA I

S M       ：今日は50点だな！

k e i       ：何がだ

S M                   : 青春度だ！  
k e i               : だ！ って言われても……  
M i k i             : 今日の楽しさって事？  
S M                 : というより思い出に残るかどうかって事だな  
M i k i             : じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんね！！  
n a g i             : 私も70点で。  
N O Y A            : 同じく70点で。  
k e i               : そうだなーじゃあ俺は間の60点で  
M i k i             : 圭は普通だねえ  
k e i               : 俺のアイデンティティだな（キリッ  
M i k i             : アイデンティティ（笑）  
i r i s             : アイデンティティを何個も並べると、何だか不思議な  
気分になりますね

A Iが気分とか不思議とか分かるのかよ。というのはスルーして  
おいて、その後も俺達は他愛ない会話を繰り返した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

k e i               : 何がだ  
S M                 : 青春度だ！  
k e i               : だ！ って言われても……  
M i k i             : 今日の楽しさって事？  
S M                 : というより思い出に残るかどうかって事だな  
M i k i             : じゃあ私は70点で。お友達記念日だもんね！！  
n a g i             : 私も70点で。

私は1  
|

野谷はチャットログを見て、文章の途中で手を止めた。

PCの前から立ち上がり、本棚に置かれた犬のぬいぐるみを手に取って胸に抱く。

思い出に残るかどうかの点数。

ミキや凧と洋服を着て見せ合うのは、とても楽しかった。

椀とのホッケーゲームはとても白熱したし、また再度勝負したい。そして圭は、そんな彼女たちを気づかい導いてくれる。

彼女にとって今日の一連の出来事は、今までに無いくらい楽しかった。

この犬のぬいぐるみを得ようとして、上村の手に触れた時は集中していたため、その時点ではまったく気がつかなかったが、後になって自分がした事に頭が真っ白になった。

まだ、この手にその感触と温度が……。

野谷は自分の手の平を擦りながら考える。

この気持ちは何なのか。まだ彼女には良く分からなかったが、とても大切な物に思えた。

初めての友人。初めての仲間。とても嬉しいと、幸せだと感じられた。

「これからも、彼らと過ごすのでしょうか。ならば、もっと楽しい時間がやってくるはずです」

irisがそう言ってくれたから、きつともっと楽しい時間がやってくるから。

NOYA : 同じく70点で。

そう、チャットログに残した。  
もう消せない確定した事。

今日の出来事は70点。だから明日はそれ以上の未来がきつと、  
やってくるようにと願いを込めた。

「ところで、私の事は友人じゃないのでしょうか？」

irisが気持ち少し落ち込んだ声を出した。

野谷の様子を見て、irisなりの考えを出したのだろう。

「……何言ってるの。……貴方は……私じゃない」

「そうでした。これからもよろしくおねがいします」

kei : ところでな、ちよつと山城さんから貰ったゲームやっ  
てみたんだが。凄い難しいんだ

Miki : 私もうすぐしんじやーう

SM : 何をやってるんだ？

nagi : ゲームですか

kei : hallp point っていうVRFPSだよ。

野谷さんがやってるから一緒にやろうって。

Miki : そー。あとお母さん「hallp」じゃなくて「hal  
llo」だよ

kei : それでやってみたんだが、凄い難しくてさ

nagi : FPS？

SM : ほほう面白そうだ。irisさん。アドレス下さい。

Miki : スルーされた！

iris : 商品検索「HALLO POINT DL pack  
アドレス でしょうか？ 椀。

kei : うーん拳銃もって相手を倒すゲームだよ。五人対五人  
で分かれて戦うんだ。

SM : ありがとうございます。

nagi : なるほど。どうでしょう？明日はこのゲームを皆でや

るというのは。野谷さんに教えて貰いながら。

k e i     : 俺もそう思ってた。どうだろう。野谷さん

M i k i     : うんうんー

どうやら野谷の好きだと言ったゲームソフトを、皆でやるうという話になっているようだ。

「……私に……できるかな。……教えるのなんて」

「問題ないでしょう。彼らならきっと」

貴方がそんな顔をするのなら、きっと大丈夫でしょう。そうi r i sは思った。

そしてそれを聞いた野谷は思う。

i r i sが肯定してくれた。ならば私は受けなければならない。

明日を今日より楽しくするために。

明日を忘れない日にするために。

自分を中心になることを、彼女はこの時選んだ。

N O Y A     : わかった。けど私は厳しいよ

k e i         : ほ、ほどほどに頼む

慌てる上村の顔が頭に浮かんで、つい野谷は口元が緩んでしまった。

N O Y A     : 冗談。たかがゲーム。ゲームで勝っても負けても楽しめたらそれで勝ち

S M         : その通りだな！　だが俺は勝つのが好きだな！　死んでも勝つ！

k e i         : 死ぬならおれは負けるのを選ぶよ

そう。楽しめたならそれで。

彼女は思った。何でだろうと。友達になれるはずだった、もしくは友達だった彼らに思いを馳せた。

なんでだろうか。楽しめたならそれで、いいはずなのに。

たかが10万\$で、関係は崩れるのだろうか。

そんな場所に、上村達を導いた。

私の選択は間違っているのかもしれない。

だけど、彼らなら大丈夫だと、彼らなら私の好きな世界を好いてくれると、自分勝手ながら、彼女はそう思った。

## 問話 学校生活はどうですか（改訂）

「異常者、異能者、超能者を囲むこの『学園』ですが、特別な『ナニカ』があるわけではありません。普通に勉強して、普通に体を動かして……」

志貴崎さん達との何とも濃い一日を終えて、次の日登校してきた俺は一時限目の授業が始まる前にここ、教員室へと連れてこられた。もうチャイムは鳴った。授業も始まっている頃だろう。

ちよつと遅いけど、この学園についての概要を説明してくれるそう。……ちよつとどころじゃなく、手遅れなくらい遅いと思う。

「貴方は『上山 沙紀』さんのわがままで転入して来たわけだけけど、本当に何の能力もないのね」

「はい。一般人の中でも、さらに普通の一般人のテンプレートです。姉があれなので耐性だけはあるんですが」

「みたいね」

ちなみに俺の対応をしてくれているのは、金髪に淡い碧眼が美しい（あとおっぱいの大きい）白人教師さんだ。

物腰に隙が無いのできつとただ者じゃ無い。この学園に来てから出会うのは、何だか変な人ばかりな気がする。

「既にランク5の能力者と交流があるようなので、ある程度この学園の事は知ってますね？」

「そうですね。ランクがあるとか、彼らが『特別』だとか」

「そう。『特別』。正直この国には能力者はあまり居ないわ。そんな中で彼ら4人は頭抜けてすさまじい能力を持っている。ちなみに彼らと同じランクの人は、この学園に何人かいるわね」



正確な数字を言わないのは、極秘事項が何かなのだろう。

「そもそも、何故、学園があるのでしょー!」

ビシィ!と指を指された。

教師に指さされると、何でもこう気持ちが落ち着かなくなるのだろう。

「ええと……管理しやすくするため?」

これだけの施設を作り、一手に能力者を引き受けるこの学園。思い浮かぶ理由と言えばこれくらいしかない。

「そうデース! 答えは『管理と監視と保護』のためです!」

『デース』って、何でそこだけカタコトなの?

「監視と保護?」

「能力者達は確かに強力かもしれませんが。貴方は見ませんでしたか? 彼らの能力。彼らの『力』を」

『幻術』『目』『力』『思考感知』

そのどれもが俺を驚かせ、ありえない物だと思わせるには十分な物だった。

「はい。とてもすごい『力』だと思います」

「……どれだけ理解してるのか分らない反応ね」

「へ?」

「まあ良いです」

教師は頭を軽く指で押さえた。

「さてさて、じゃあ例えば志貴崎さん。彼が一万人いたとして、しかも軍隊を作ったとします。どうですか？ 想像してみてください」

……銃を持っていなくても恐ろしいです。

「すごく怖いです」

「そう。凄く怖い。震え上がる程に。しかし実際問題、『志貴崎さん』は一万人も居るはずが無い」

「はあ、そうですね」

「それに志貴崎さんのレベルで筋肉を操れて、しかも筋肉や骨も頑丈の特別製。そんな人は多分……世界でも十人から二十人程度しか居ないでしょう」

「それだけ……」

「そう、つまりそういう事。彼らは確かに恐ろしい。しかし同時にとても弱い存在なのです。だから守らなくてはいけない。国のために、そして彼ら自身のために」

だから『管理』と『監視』と『保護』……。

もしも志貴崎さんの様な能力者が喧嘩を売ってきたとしても、それはとても少人数に過ぎない。それこそ戦車の主砲一発で吹き飛ばすレベル。

「この学園に居る全ての生徒は、幼い頃からここで生活してきました。この意味、わかりますか？」

「い、いいえ」

「それは、幼い、本当に幼い頃から国にその身を捧げるといふ誓いを、強制された事に他なりません」

「……………」

国外への移動の制限、体にチップ、研究・会社への協力。

『モルモット』

「あまりにも惨い。そう思いますか？」

「……はい。でも、そうしないと生きていけない」

「そうです。皆それを理解し、受け入れ、今。ここ、学園に通っています。国のバックアップなしでは体を満足に維持できない人、意思疎通が出来ない人、程度の違いはあるけれど皆、何らかの支援を受けています」

「……」

「そんな中、この学園の生徒達は穏やかに過ごしていました、がっ

！」

「が？」

「そこで入学してきたのが貴方！」

ビシィ！！ と指を指された。

「え？ はあ」

「今までランク5の人達はばらばらに行動して、特に接点はありませんでした。あっても知り合い程度。強いて言えば山城さんと野谷さんくらいでしょうか」

「はあ」

「それがなんと！ 一同に会して能力を見せ合い、さらに！ 街に出て行って仲良く遊んだそうじゃないですか！！」

「……はあ」

「しかもその中心人物はなんと、一般人の貴方だと言うのです！！」  
「……………はあ」

そんなに興奮してまくし立てられても、それが一体なんだと言うのか良く分からない。皆で遊んだだけじゃないか。

それに『中心』というより、引率する保母さんの気持ちだったのだが。

「はあ。いいですか？ ランク5とはこの国の『宝』です。宝ですよたから！」

「は、はあ」

そう言われましても。

「はあ……。具体例を出しましょう。昨日実際に動いた『部隊』の内容です」

『二台のドクターヘリ』

『覆面警察官が20人』

『衛星三機が緊急監視態勢へと移行』

『バイオテロ対策部隊一個』

他にも色々

「そんなばかな」

俺達が遊んでいた裏側で、それだけの人達が動いていたというのが。冗談のオンパレードにも程がある。

引きつった笑みを見せる俺に教師はにっこりと笑って、素早く右手を振りかざして黒い固まりを俺へと突きつけた。

拳銃。

「……本物？」

「本物ですよ。今現在、貴方を国は判断しかねています。彼らにと

って有益なのか、害なのか」

あまりの非現実な光景に、目の前が真っ白になる。

『非現実』。

そう。『非現実』。

それならば、俺は巻き込まれたのだ。『非現実に』。

そう『思い込ませる事にしよう』

「……あいつらをそんな物みたいに言うのは、どうかと思いますよ」  
「仕方ないでしょう。国はそういう物の見方しかできない。もちろん私は彼らを、大切な一人一人の人間として見てるわ。それでも貴方の答えを聞かないといけない」

青い瞳が俺を探る。

俺の本心を奥の奥まで。そんな必死さが青い瞳の揺れから感じられる気がした。

これは、俺の『常識』じゃない。『現実』じゃない。『本当』じゃない……。

必死に自分に言い聞かせて、俺は、自分の本心を言葉にした。

「あいつらは友達が欲しかっただけだ。タイミングがよかったんだ。単純に。俺は何もしていないし、これから何もする気はない。あいつらを引っ張るような事もきつと、ない。約束する。俺はあいつらに何かを強いたりはしない。お願いはするかもしれないけれど」

震える体を必死に押さえつけ、汗ばむ手を握り、必死にこの『常識』から逃げる。

「わかりました」

教師が拳銃を服の中へとしまった。プレッシャーが霧散する。

「実は国としても、彼らの能力と心のバランスをどう取るのか、頭を悩ませていたところでした。そこで貴方がやってきて仲良しグループを作ってくれそうだと、言うことでテストしました」

「テスト？」

「そう、テスト」

そう言うてにつこりと笑う。

恐らく銃を突きつけられる以外にも、何かで精神状態でも見られていたのか。冷や汗が背中を伝う。

「ちなみに、変な事言ってたら？」

「内緒」

「ちょっと漏らして良いですか？」

「ダメ」

ため息をしつつ思う。

俺はもう『常識』に戻れないんだろうなあ、と。

正直もうこの学園から、『彼ら』から逃げ出したいという気持ちでいっぱいだが、それでも何故か『彼ら』との絆が大切な物のように思えた。

予感かもしれないし、運命かもしれない。そういう不思議な気持ちを彼らに感じた。

「ちなみに私は虚実の異能者。ランクは3。本名は秘密。キャシーと呼んでね」

教師改め、キャシーさんと軽く握手をする。彼女も能力者だったらしい。

「虚実？」

「そ、嘘か本当かわかる能力」

むちゃくちゃだ！

だからこそ『虚実』の異能者。

彼女にとって、相手の精神構造や理念を知る必要は無い。ただ面と向かって、喋れば良い。それだけで、嘘か、誠か、彼女に筒抜け。科学的根拠は無し。だからこそその異能。

「そろそろ一時限目が終わるわ。もう戻って良いわよ」

「……失礼します」

椅子から立ち上がり、教員室を出る。

体中に冷汗をかいたせいで、立ち上がった拍子に少し身震いをしてしまう。

とりあえず俺の疑念は晴れたらしい。特に注意も受けなかったの  
で、俺の本心を知りたかったただけなのだろう。

「どうしようかなあ」

廊下を歩きながら、そう呟いた。

頭痛の種がまた増えた。

とりあえず忘れた方が身のためだと思い、俺はこの出来事を無かった事にした。

一限目終わりのチャイムと同時に教室へと戻ると、皆ちゃんと登校していたようで席に着いていた。

……志貴崎さんは寝ている。

「どったのー？ 転入初日から遅刻なんて不良児ねっ」

「いやちよつと、教員室に呼ばれて話聞いてた」

「ふーん」

席に戻ると同時に聞いてきた山城さんだったが、特に興味はなかったようで次の授業の準備を始めた。

俺も授業の準備をする。といっても、タブレットPCを取り出して教科書データを読み込ませるだけだが。

ちなみに俺と山城さんはノートに自分で書き取る派で、野谷さんはタブレットの教科書データに直接書き込む派のようだ。鬼谷さんはこっちからは見えないな。志貴崎さんは……教科書すら広げない派か。

そういえば、今日はどうするのだろうか。

「今日は外で遊ばず、すぐ帰ってゲームするのか？」

「あーそれでもいいかもね。外で遊んじゃうと、疲れちゃうし。私、結構寝落ちするんだよね」

山城さんが、ツインテール揺らしながら振り向いてきて答えた。

「……それでもいい」

「とりあえず昼食の時にでも皆に聞けば良いか」

「そだねー」

「……ん」



授業は滞り無く進んだ。俺の転校前の学校と特に進度は変わらないようだ。とりあえず安心だ。

そして授業を受けながら考える。彼らの事。

志貴崎さん、野谷さん、山城さん、鬼谷さん。

まだ一日しか付き合いは無い。正直、どうしようと思う。

親友だろうか？

まだそうじゃないと思う。

尊い存在だろうか？

絶対に違う。

下手をすれば命を賭ける事もあるかもしれない。命を賭けられるか？

否。

だからといって、別に彼らから離れていく理由がどこにある？

ただの友人として彼らと楽しく遊んでいけば、それで何も問題ないはずだ。

今はとりあえずそう答えを出しておいて、最終結論は未来に棚上げだ。それで良いと、俺はこの時思った。

自分でも後ろ向きな考えだと、そう思った。

三話 VRFPSをしよう初級編？ (改訂) (前書き)

ユニークアクセス100ありがとうございます。

### 三話 VRFPSをしよう初級編？（改訂）

「じゃあ、始める」

「「「はい」」」

「もつとお前らは屑だ！ 腐ったみかんだ！！ みたいな感じにしないとだめだよ卯月いー」

何故か山城さんのテンションがマックスだ。

「何の真似だよそれ」

「思いついただけー」

腐ったミカン置いておいて、俺達はVRFPS『HALLO POINT』の中にいた。

ゲームの中のアバター外装設定そのままに、防弾チョッキに灰色の迷彩服に身を包んで、並び立つ高校生達というのは何とも滑稽だ。

……志貴崎さんだけあまり違和感が無い。この筋肉め。

あたりを見回すと、この『フィールド』は港のようだ。色々なコンテナがひしめき合い、遠くには倉庫が見える。海の臭いが鼻をくすぐる霧の濃い場所だ。

今日は授業が終わった時点で解散、帰宅してこのゲームを皆で遊ぼうという事になった。

山城さんはいつものポニーテールの位置を少し下げてヘルメットから出していて、鬼谷さんはエディットで編集したのか、長い髪を肩につかない位にまで変更していた。俺と志貴崎さん、野谷さんは元の現実と同じアバター無編集のままだ。

「一列に並んで」

「いえすまむ！」

野谷さんに言われたとおりにならに並ぶ。山城さんノリノリすぎ。彼女のの手にはいつの間にか銃が握られていた。昔の映画とかで良く見るハンドガンだ。

……今日の朝あつた事が一瞬頭を過ぎる。『コレはゲーム』『コレはゲーム』『コレはゲーム』……。  
VR環境下だと彼女は迅速に動けるようでその口調も、昨日のゲームセンターで志貴崎さんと同戦してた時と同じように軽やかにまわる。

「このゲームは難しい。まず、体を撃たれると色々な障害が出る」

そう言いつつ野谷さんの腕が横なぎに振るわれ、同時にハンドガンの銃口から何発も弾が発射される。

乾いた発砲音が湿気た港に響き渡る。

「うお」

「にやつ」

「きゃあ」

「……むっ」

それと同時に俺の腕に衝撃が走った。腕を撃たれたらしい。

目の前に広がるゲーム情報画面には人のシルエットがあつて、右手の部分が白から赤に変わっていた。HPも20%ほど減少して現在80%。

他の皆も同様のようだが、志貴崎さんだけが飛び退いてちょっと離れた位置にいた。

「避けたと思つたんだがなあ」

「一発外した」

「へ？避けたの！？」

「VRゲームでは野谷には敵わないらしいな。はっはっは」

「だがその他では負けん」と呟きながら不敵な笑みを浮かべる志貴崎さん。

どうやら野谷さんの一撃目を彼は避けたが、その先で二発目の弾に撃ち抜かれたらしい。どちらも人間じゃ無いな。

「なんだか、金槌で殴られた感じがしましたね」

鬼谷さんは眉をひそめて、違和感を覚える腕を軽く揉む。

「銃を構えてみて」

「はい」

「わかった」

「ほーい……おろ？」

言われた通りに銃を構えてみる。……が、標準が合わずぐらぐら揺れる。

「腕が撃たれると、構えづらくなって狙いが付けられなくなる。

体を撃たれると、呼吸がしにくくなり走れなくなる。

足を撃たれると、歩いたり走ったりがむずかしくなる。

頭を撃たれると、視界が真っ赤になり見えづらくなる」

「なるほどー。現実と同じというか、ある程度再現って感じなんだねー」

「そう」

「へえーここまで硬派なんだなあ」

そういえば昨日プレイした時も、突然体が動かなくなったりしていた。なるほど、ゲーム内の特殊アイテムか何かだと思っていたが、こういう事だったのか。

野谷さんは俺達が理解したタイミングを見計らって、右手を跳ね上げてハンドガンを再度発砲する。一発だけ。

次は右足への軽い衝撃。

「うお！」

「歩いてみて」

いきなり発砲するのは止めて貰いたい、言われた通りに歩いてみる。

左足を前へ。次は右足

「あら？」

右足を動かそうとしたが上手く動かず、引きずるような形になってしまう。

「実際に足を攻撃されるとこうなって、戦闘し難くなる。どれだけ無傷で相手を倒せるかが鍵」

「なるほどー」

「ふむふむ」

「あとその状況では体が大きく動くから、色々な音が出て相手に見つかってしまう」

確かに。ちょっと歩くとずりずりと地面を引きずる音が出るし、ピッコを引くため体中の色々な物がぶつかってガチャガチャとうるさい。

「上手なプレイヤーは移動中にあまり音を出さない」

野谷さんがその場で軽く、くるとランニングする。チャツチャツチャツチャと軽い音がするだけだ。俺とは大違いだ。

「へえー！」

「ほとんど聞こえませんか」

山城さんと鬼谷さんはそれを見て、同じようにくるくる回った。ガツチャツガツチャガツチャガツチャと、野谷さんよりも大体三倍くらい大きな音が出てしまっている。

「それくらい音がすると、相手に場所がばれてしまって待ち伏せされる」

「それがかー。見つけた！ と思ったら相手が銃かまえてるんだよねー」

「……難しいですね」

しばらくその場で山城さんがくるくる回る。音が出ない走り方を探しているようだ。

が、一向に音が小さくならない。

「ねね、卯月。もっかいやってみて」

「わかった」

山城さんは野谷さんがくるくる回っているのをじっと見ている。

「おっけー！ こうでしょ！」

彼女が軽く走り出すが、今度はチャツチャツチャツチャツと、野

谷さんとほとんど同じ音になっている。

軽やかに跳ねるツインテール。

「すげえ！」

「へっへーん！ 伊達に役者やって無いぜ」

ぶいぶい！ とピースサインを飛ばしながら、につこり山城さんが笑う。

見ただけで、同じ動きをできるというのもすさまじい……。

「すごいですね、どうやるんですか？」

「えっとねえ、腰をあんまり動かさないようにするの」

「むむ……」

「うん、そんな感じー」

皆のダメージをリセットして、しばらく走り方の練習をする。

走りながら山城さんが言っていたコツを掴んでからは、かなり音がしなくなってきた。

……志貴崎さんは速攻で飽きて、コンテナを登ったりしている。  
何であんな所に登れるんだ？

「次は武器」

```
system : god mode  
system : ammo max  
system : map | test | fire load
```

野谷さんが手元にウィンドウを表示して何かの操作をすると、システムメッセージが表示され、同時に辺りの情景が一瞬で変わる。  
港のテクスチャが一瞬で消え、裸のポリゴンがバラバラに崩れ去



る。

それと同時に地面から別のポリゴンが組み上がり、どんどん新たなテクスチャーが張り合わされていく。

マップ変更が終わった俺達の前には、長テーブルが一つ。机の上には多種多様の銃器や装備が。その向こうには10個程度の的が設置されているだけの薄暗い部屋だ。

「色々試して、自分に合う物を選んだ方が早い」  
「なるほど」

「確かに私たちはあまり銃に詳しくありませんからね」  
「そだねー。撃ってみるのがてつとりばやいよねー」

俺は良くテレビとかで見る、木製の肩当てがあるライフル銃を手にとった。装飾の一切無い単純な構造をしているのが知識の無い俺でも分る。

使い古しのように傷だらけの肩当て、鈍色で光角の取れた銃身。肩にしっかり抱き照準器で狙いを定める。……こんなもんで良いのだろうか？

トリガーを引いた瞬間、銃口の中から激しい火花を放ちながら銃が吠えた。

ゲームのため衝撃はあまりないが、銃自体が暴れるというのか。フルオートで吐き出される弾の雨。火花と振動と音によって視界が振れて前が見えなくなり、二、三発目くらいから弾がどこへ行ってしまったのか、分らなくなって完全に対象である的を見失ってしまった。

残弾表示を確認すると『16/31』となっている事から、15発ほど撃った事になる。

と、次の瞬間俺の见ている前で『31/31』と表示が切り替わった。どうやら弾が無くならないような設定になっているらしい。

「撃ち過ぎ。的に近づいて弾痕を見てみて」  
「ん？ そうなのか。わかった」

野谷さんに言われた通りに的に近づいて、何発当たったのか確認してみる。一発だけの中心部に当たり、後は全てばらに的外れていた。傾向としては、どんどん上の方にずれて行っているようだ。

最初の一発目は標準器で狙いを定めていたため真ん中に当たったが、それ以降の銃の制御がめちゃくちゃだったのが良く分る。

「見てて」

元の位置に戻った俺の横に立つて、彼女が銃を構える。プラスチックのような白い外観が特徴的な、おもちゃのような印象の銃を構えている。

銃を構えながら、野谷さんの瞳がきらりと光る。

彼女の手元で爆ぜる銃。俺の持っていた銃よりも軽い連続した破裂音と共に、弾が吐き出されていく。

銃口は弾が出るたびに跳ね上がり、どんどん上にずれていくのが分かる。

そして撃ち尽くされる弾。唸り声を止める銃。まとも無く弾痕を空けた的。

「フルオートで撃ち尽くすと、上にずれていったあまり当たらない。撃つたびに位置調整が必要」

そう言いながら再度発砲。吐き出される弾。

また同じように撃っているように見えたが、銃が暴れるたびに位置調整しているのだろうか、あまり上にぶれない。

が、それでもだんだん銃口が上に跳ねて狙いがずれていつている

の  
が  
わ  
か  
る  
。

弾を全て撃ち尽くすと、野谷さんは銃を下ろして俺を見上げた。

「こつやつて調整しても、銃口から出る光で的が見えなくなる。この光を『マズルフラッシュ』という」

「なるほどー」

「これを回避するには」

また構えて発砲。が、今度は軽快に、こまめにトリガーを引く。パパン、パパパンと、数発ずつ弾が発射されるのが分る。

「二発から三発ずつ撃つ。『バーストショット』っていう撃ち方」

的に近づいて見ると確かに、全ての弾痕が的中心付近に集まっていた。

「なるほどなー」

元の位置に戻って、もう一度銃を構える。

野谷さんのお手本を思い出しながら、トリガーを引く。

発砲。

爆ぜる銃。軽い振動。飛び散る火花。

しかし、すぐトリガーから手を離す。

的が見える。

また発砲。

振動。火花。

……よし。今度は的を見失わなかった。弾痕もちゃんと全体的に当たっている。

「ちなみにフルオートで全部撃ちたい時はこつする」

彼女は銃を肩に抱くのではなく、腰に銃を抱えてトリガーを引いた。

乾いた連続音。

みるみる的が弾痕にまみれていく。

「こうすると『マズルフラッシュ』からの影響を受けないし、体全体で支えるから安定する。あまり狙いは良くないけれど『制圧射撃』っていつて、相手をビビらせる撃ち方」

「なるほどなあ」

銃の撃ち方一つとっても、色々と奥が深いようだ。

野谷さんからの講義を終えた俺は、色々な銃を試し打ちしていく。どうやら野谷さんは、皆それぞれに俺にやったのと同じような、個人授業をしているらしい。なんと細やかな『先生』だ。……いや、この場合は『教官』か？

触っていると銃というのは色々あって、何ともそれぞれ個性的だと言っのが分る。

『マズルフラッシュ』を上方に噴射して跳ね上がるのを抑える銃、発砲間隔が短くなりすぎて暴れ回る銃、元からフルオートではなくバーストショットだけしかできない銃、その他いろいろ。

「ねーねー。この短いマシンガンはなんなのー？」

「忘れていた。銃器は基本的に五種類ある。ハンドガン、アサルトライフル、サブマシンガン、スナイパーライフル、ショットガン」

「何となく違いが分るな」

「うん」

「そうですね」

ハンドガン：手に収まる単発式補助火器。

基本的にハンドガンともう一つ銃器を持って戦闘をするのが、このゲームの基本。

アサルトライフ：主要武器。

長い銃身は、遠距離の敵も安定して狙撃する事ができる。短距離  
く中距離の幅広いレンジに対応。

発砲間隔が短いのも特徴で、基本的にはこれを選んだ方が良い。

サブマシンガン：近接戦闘特化型の銃器。

その小ささから市街戦での、基本的な装備となる。が、発砲間隔  
がちよつと長い、中距離以降へはいまいちな安定度。動き回る人向  
け。

スナイパーライフル：言わずもがな、遠距離専用武器。

基本的に超長距離での暗殺用火器のため、市街地戦闘をテーマに  
したこのゲームには不向き。

発砲時の巨大な音は周囲に気づかれ、一気に敵が群がってくる。

弾も少ないがその分ダメージもでかい。野谷さん曰く『ロマン武器』  
だそうだ。

ショットガン：その名の通り近距離戦闘専用火器。

発砲間隔がかなり長い、リロードも長時間。隙が大きくなる。

「変わり種でこういうのもある」

「わあなにそれ！ かっこいい！」

「うへえ……」

そうやって野谷さんはショットガンを一つ手に取った。何か丸い  
缶のような物が付いている。

山城さんは興味津々のようだ。

野谷さんは手をひねってその銃を俺達に見せた後、構えて発砲。バスバスバスバスという、空気の連続で抜けるような発砲音。信じられない位に早い間隔でショットガンから弾がはき出される。的が速攻で弾痕まみれになった。

「ドラム式。デメリットはこのドラムの大きさ。振り回す事が難しく、携帯に不便」

「ああ、確かに。これじゃあすぐ取りませんね」

「そういう事。基本手に持つことになってしまいうから隙がとて大きくなる。」

どんなものにも、メリットとデメリットはやっぱりあるようだ。そんなわけで皆思い思いの武器を選ぶ。

俺と鬼谷さんがアサルトライフル。

山城さんがサブマシンガンと決まった。

「へへーん！ これで皆やつつけちゃうんだからね！」

山城さんはいけいけごーごーの精神でプレイするらしい。

「私はこれ」

「うわ」

わ

「凄いですね」

そう言う野谷さんが装備しているのは、彼女の身丈と並びそうな程に長大なスナイパーライフルだ。

『ロマン武器』じゃなかったのか？

心なしか胸を張って満足げ。なんだか子供が自慢の物を見せて、えばっているように見えて大変かわいらしい。

「思ったんだが、それで凄く遠くから狙うってのはどうなんだ？」  
「ああ、そだねー。奥に引っ込んでさ、それでバーンってやつちゃうのは？」

「なるほど、いけそうですね」

当然の考え。後ろの方に引っ込んで、敵が来るのを待ってそれを仕留める。ゲームの大半を隠れて待つことになりそうだが確実に勝てそうだ。

「構えてみて」

野谷さんから銃を手渡された。

言われた通りに構えてみる。かなり大きなスコープが視界の半分以上を埋める。

片目を強く閉じてスコープをのぞき込む。

的が目の前にあるように感じる。これなら遠くから狙ってても敵を倒せそうに思えた。

と、野谷さんの的の近くまで歩いてきたと思ったら、的の前に立ちほだった。

「私を撃ってみて。ダメージは無いから大丈夫」

「そうなのか？ それじゃあ」

狙いを定め、遠慮無くトリガーを引く。

轟音としか表現できないような音が耳元で鳴り響き、今までの銃とは明らかに違う強い振動。

なるほど、これはかなり強力だ。野谷さんはどうなった？

銃を下ろして的看着る。

彼女は一步右にずれていて的には弾痕。どうやら避けられたらし

い。

「これから歩いてそっちに向かうから、当ててみて」  
「わかった」

気を取り直して狙いをさだめる。今度こそあててやる！  
が、野谷さんがスコープの中から消えた。

あ、いた。  
消えた。

彼女を探す。

あれ？ 俺今どこ見てるんだ？ 的どこだ？

……完全に彼女を見失った。

「はい」

「うお！」

野谷さんに肩を叩かれた。

どうやら俺が慌てている間に横まで歩いてきたようだ。

「遠くの物は確かに撃ちやすい。けど、ちょっと対象が動いただけですぐ外れる。ちよつとのズレが命取りになる。そして外すと間違はなく敵にばれる。敵はすぐに隠れてもうその場所から敵は顔を出さない」

「なるほど」

「ふむふむ」

「難しいんだね」

「そう」

スナイパーライフルが『ロマン武器』だという事が良く分かった。後方からの狙撃がダメなら、その超火力で中距離の戦闘を強いられ



てしまうわけか。

そのスナイパーライフルを自分の銃だと、胸を張る彼女の力量ってば一体……。

### 三話 VRFPSをしよう初級編？（改訂）

「できた！」

「？」

何だかえらく静かだった志貴崎さんが突然声を上げた。隅で何かやっているなとは思っていたが、どうやら自分の装備を色々試していたらしい。

見ると、半袖の黒Tシャツの上に一番軽量の防弾ベスト。左手にサイレンサー付きハンドガン。右手にナイフが握られている。手榴弾はフラググレネード二発にフラッシュ一発。それが志貴崎さんの装備の全てらしかった。

「……マシンガンとかは？」

「ないっ！」

ニカッと良い笑顔をされても困る。

「見る見る。こんなグローブがあつてだな」

「は、はあ」

そう言いつつ志貴崎さんが右手を広げる。志貴崎さん腕を振つてもそのナイフは手から離れない。どうやらグローブにナイフが縫い付けられている物のようだ。

「いや、それどうするんだよ」

まったく持つて意味不明だ。

「少年兵とかがな、良くこうやって居るんだ。多分握力を補うためだろう。それにだな」

志貴崎さんがその場でジャンプした。音が全然しない。

「これで、ほぼ完全に無音で移動できるぞ！」

何で『少年兵とかが』とか知ってんのか、音がしないぞとか言う以前に何その紙装甲とか、色々突っ込みどころ満載なんだが。

「まあ、志貴崎さんがそれで良いなら良いんじゃないか？」

「ふふん、まあ見ている。さっき色々動いてこのゲームでできる事も大体分かったからな」

「自分で考えた組み合わせがあるなら、それが正解。間違っていたらすぐ変えれば良い」

野谷さんは、俺たちのやりとりを微笑みながら眺めていた。

「じゃあ、簡単にルールを説明してBOTと勝負してみる」  
「「「「はい」」」」

場所を元の港に戻し、野谷さんの話に耳を傾ける。

ちなみにBOTはロボットの略称で、AI操作のアバターの事だ。人間に近い動きをしてレベルを設定する事で、烏合の集から軍隊レベルまで幅広い難易度を設定する事ができる。

「私たちは今テロリスト。マップには爆発対象が二カ所ある。あそこあそこ。AポイントとBポイント」

野谷さんが「Aポイント」と言いながらコンテナが密集した場所を指さし、「Bポイント」と言いながら建物……倉庫だろうか？を指さした。

それぞれ『A』と『B』とミニマップに表示されているので、大体どこにあるのかマップを歩いて回らなくても分かる。

「テロリストはこの爆弾を『A』か『B』のポイントに持って行って、設置して爆発させるのが目的。もしくは、相手のカウンターテロリスト……軍隊みたいなものを全部倒せばいい」

「二種類あるわけだな」

「そう」

「どちらも大変そうだねー」

「それが楽しい」

「なるほど」

「そしてこれが爆弾」

野谷さんがくるつと後ろを向く。ランドセルのようにしてコケ色のバックを背負っている。つまりこれが爆弾なのだろう。

「ふふふ、小学生みたいでかわいいですね」

「あーかもかもー」

そう言われて少し野谷さんは顔が赤くなった。

気を取り直した彼女が、スタスタと『Bポイント』の方に歩き出すので、俺たちもついて行く。

倉庫の中に入り爆弾から手を引き抜き、地面に降ろす野谷さん。

「設置は、こうやって爆弾にあるボタンに数秒手を当てているだけで良い。この間、武器は使えない」

「なるほどなるほど」

彼女が爆弾に手を当てる。数秒そうしていると、突然あたりに警報が鳴り響く。ミニマップを見ると『Bポイント』が真っ赤に光っている

「これで爆弾が設置された。40秒で爆発するから私たちはこれを死守する。この時私たちが全滅しても、私たちの負けにはならない。私たちが全滅しても爆弾を『カウンターテロリスト』側が解除できなければ、私たちの勝ちになる」

爆弾を設置する前に全滅すると負け。設置した後全滅しても負けにならない。

設置した後の勝ち負けの条件は、爆弾が解除されるか否か。

「ふむふむ。なんとなくわかった」

「うん」

「爆弾を設置した後どういった対応をするのか。それはその時によって色々あるから、やって覚えるしかない」

「そのようですね」

何事も経験という事か。

「ん？」

「？」

のんびりと爆弾の前で会話していると、どこからともなくガツチャガツチャと音が聞こえてきた。

音の方向を見ていると、ハンドガンを構えた人が倉庫の中に入ってきた。

「わわ、この人なに？」

「軍のBOT。AIのレベルは最低だから攻撃してこない」

「へー」

そのまま俺たちを押しつけて爆弾に近寄り、爆弾に手の平を置いてそのまま数秒じっとしている。

「こんな感じで、解除されるとテロリストが残っていたとしても私たちの負けとなる」

「なるほどー」

山城さんがBOTのヘルメットをべしべし叩いている。やめてあげて。

カウンターテロリスト ウイン

しばらくBOTがそうしていると、爆弾が解除されたようだ。相手が勝利した事を告げるアナウンスが流れ、GUIに表示されたスコア表に『0 - 1』という表示が。

しばらく経つと目の前がブラックアウト。

次の瞬間には一番最初に居た位置へと戻されていた。

「爆発物は一度しか仕掛けられないわけだな」

「そう」

「りようかいー」

「野谷さんの説明は、わかりやすいですね」

「そんなこと、ない」

野谷さんは照れてうつむいた。

大きなスナイパーライフルとの対比のせいだろうか。顔を下げる彼女が昨日よりさらに小柄に感じられる。

「うむ。敵を全て殺せばいいわけだ！」

「違うわっ」

この筋肉が。

まあそれは良いとして、依然として俯いて照れる野谷さんがとてもかわいらしく思えて、何も考えずに手が出て頭をなでてしまう。ヘルメットごしではあるが。

「!?!」

びくつと肩をふるわせて固まってしまった。

「わ、悪い。つい」

「何が『つい』なのー。私はなでてくれなかったのに」

野谷さんは、小さく首を振ってさらに頭を下げてしまった。

山城さんがブーっとふくれていたが、次の瞬間にやにやつと、意地の悪い笑みを浮かべる。

「今日の成績よかったら、私もなでてもらおうっ」と

「あ、それはいいですね」

とんでもないことを言い出した山城さんに、それに追順しちゃう鬼谷さん。

「何だ、なでて欲しいのか。どれ」

志貴崎さんが、ぬうつと手を出してきて、鬼谷さんと山城さんをぐりぐり撫で回した。

「ちょ、わ、わー！」

「きゃあ！ や、やあ」

結構な勢いでぐりぐりされているので、二人とも頭がぐりんぐりん回っている。これだけ余裕の無い鬼谷さんは、今後あまり見れない気がする。

「はっはっはー！ いやあ。どうだ。撫でられた気分は！」

「……………ありがとう。これは、お礼、ね！！」  
「……………」

鬼谷さんは目を回しているようであつむいて何も喋らない。

ゆっくりと肩で息をする山城さんが、背中に手を当てて自分の得物を回す。肩を主軸にしてサブマシンガンがくるっと回転、一瞬で彼女の腕の中に銃が。射撃体勢が整う。

野谷さんのお手本通りの綺麗な腰だめ、『制圧射撃』の構えだ。

『制圧射撃』は銃身がぶれて精密射撃ができないため、基本的に体を撃つと野谷さんは教えてくれた。が、山城さんはもっと下、志貴崎さんの足下へと銃口を向けた。

「踊れ！ 弾に酔って溺れろ！」

弾ける銃口。ばらまかれる鉄の雨。軽快な破裂音。

「ぬお！？ 何故だ！」

いや、分かれよ。



彼女の容赦無い銃撃に志貴崎さんがたまらず回転。転がりながら物陰へと向かう。

山城さんもそれを追いかける。

野谷さん伝授のお手本通りの走りは、昨日今日でこのゲームを始めたとは思えないほど様になっていた。

走りながらも銃口は志貴崎さんへと向けられている。

いつまでも続くと思われた発砲音は、しかしついにその咆吼を止めた。弾切れだ。

それでも彼女は何度もトリガーを引く。口元を歪めてから「チィッ」と舌打ち。

こええ。

その瞬間、山城さんの横に飛び出る影。

鬼谷さんだ。

アサルトライフルを腕に持ってこちらにも『制圧射撃』の構え。：

…というか足音が完全に消えていた。

彼女が無表情でトリガーを引く。

吐き出される弾。完璧な入れ替わり。<sup>スイッチ</sup>リロード支援。

彼女の動きによる意図に気がついた山城さんは、すぐに弾倉を排除。リロード開始。

システムアシストにより最適化された動きが体を駆動させる。自動的に次の弾倉をつかみ取り銃に装填。よどみの無い流れるような完璧な動作。

銃撃音に紛れて志貴崎さんの声がかすかに聞こえる。しかし、鬼谷さんの鳴止まない弾の音によって、彼が何を言っているのかこちらからは全く聞こえない。

まだまだ続きそうな射撃音に、猶予が少しあると判断した山城さんは、腰からフラッシュバンを取り出してピンを抜いて放り投げる。

少しの空白。

そして閃光。乾いた破裂音。

とっさに二人とも背中を向けて、鬼谷さんがリロードを開始。

山城さんが光が止んだタイミングで元の方向に向き直り、『制圧射撃』をしながらゆっくりと対象物へと近づいていく。

彼女の銃口の先で壁に穴が開き、砂利が爆ぜ、金属音が響き渡る。そしてついにそれへと辿り着く。フラッシュバンによって視覚と聴覚を失い、うずくまった志貴崎さんだ。

静かに、それでいて的確な動作でフラググレネードを取り出してピンを抜いた。そのまま志貴崎さんの頭の上に乗せる。

その姿に満足して、山城さんは鬼谷さんにアイコンタクト。うなずき合ってこちらに戻ってきた。

約二秒後爆発。轟音。砂利が飛び跳ねる。

……恐ろしい連携プレイだ。

ちなみにこのゲームはフレンドリーファイヤ無し。志貴崎さんに実際のダメージは無い。それでも少し、やり過ぎだと思う。

「すごいな……いや、ひどいな……」

あまりの光景に呆然としている俺の服を引っ張る感触があった。見ると、野谷さんが顔を真っ赤にして俺を見上げていた。

「あ、頭なでも大丈夫だから……」

どうやら先ほど、俺が頭を撫でて謝った事を気にしているらしかった。かわいすぎて、どういった反応が正解なのかが良く分からなかった。

「う、うん」

とりあえず、それだけ返すのが精一杯だった。どの反応がベストな対応になるのでしょうか。

「もー！ あんなにぐりぐりやるもんじゃないでしょー！！」  
「そうです。女の子は大切に扱うべきです」

数分後、志貴崎さんを正座させて山城さんと鬼谷さんは、『女の子はいかに大切に扱うべきか』というお題で説教をしていた。  
志貴崎さんは始終頭の上に疑問符を出している様子だ。

「これはあれだね！ 全然だめだね！ 理解してないとみたね！！」  
「そうですね」

「圭！！」  
「はい！？」

いきなり話を振られた俺は、先ほどの彼女達による連携プレイを見ていただけに、震え上がった。

「卯月をなでなでしなさい！」  
「はい！」  
「っ！？」

言われるままに野谷さんを撫でてしまっていた。

静観モードだった俺と野谷さんはヘルメットを外して、彼女達の説教を見ていたため手に野谷さんの髪の毛の感触が伝わってくる。VR環境下であるためあまりリアルな感触では無いが。

野谷さんはいきなりの事にビクツと体が震わせたが、そのまま目を細めて気持ちよさそうにしていた。嫌ではないようなのでよかった。

「わかった？ あれがなでなでだよ！！」

「ふむ」

志貴崎さんは俺達の様子を数秒じいつと観察していたと思うと、いきなり立ち上がって山城さんに手を置いた。

「こうだな？」

そのまま、ゆっくりと山城さんをヘルメットの上から撫でた。  
なでなで。

「ち！ お、おう……」

「あら、ふふふ」

一瞬再度激昂しそうになった山城さんだったが沈静化。「なんか違う……」と困惑顔だ。

鬼谷さんは、それを見てくすくす笑っている。

何だか最初と話が違う形になっている気がするが、まあいいか。

テロテローン

志貴崎 桜は、技能『女の子の扱い：レベル1』を習得した

そついう話じゃないし、何かエロチックだし。

三話 VRFPSをしよう初級編? (改訂)(前書き)

マップの絵を描いてみました。え?へたくそ?志貴崎さんの力作ですよ。ぶんぶん

<http://4511.mitemin.net/i36049/>

### 三話 V R F P Sをしよう初級編？（改訂）

3

2

1

0

眼前に広がるカウントダウンが0となる瞬間、志貴崎は全速力で駆け出した。足元の砂利がガシャガシャと爆ぜる。

「はええ！！」

後ろから、上村の驚愕を含んだ声が聞こえた。

装備の違いにより重さに差があり、既に結構な距離ができていた。

場所は港。皆で確認したところ、敵のカウンターテロリストのスタート地点が『Aポイント』、『Bポイント』に近い位置にあって、速攻で陣地展開、スタンバイできる位置にあるようだ。ゲームの趣旨からすると当たり前のことだが。

マップ構成として志貴崎達テロリストは、スタート地点からまずコンテナ置き場を経由して、二階建の建物へとぶつかる。中を進んで向こう側へ出れば、小さな広場をはさんでもう一つ似たような二階建の建物があり、その向こうが『Aポイント』のある倉庫だ。

話し合ってこれらのシチュエーションを『テロ側コンテナ』『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』と共有しあっている。

そして、『テロ側建物』に入らず左に折れると、『Bポイント』があるコンテナ密集地点へと続く路地となっている。

ここは名前を『Bコンテナ』とした。

そこからは『テロ側建物』『挟み広場』『軍側建物』が一望できるような配置となっている。

志貴崎は一瞬考えたが今回は、そのまま真っすぐ『テロ側建物』へ特攻。

走り止めないままに腰にあるスモークを手取る。

今回彼のフラグ装備はスモーク二発にフラッシュ一発だ。

ピンを抜いて『挟み広場』に放り投げ、勢いを止めないままに躍り出る。それと同時にワンテンポずれて煙幕が吐き出された。

視界を煙が覆う。

しかし志貴崎は感覚で直進。『軍側建物』の側面に打ち付けられた、配管類につかまってスピードと力任せに上へと昇る。手と足を同時に動かし、一気に屋根上へと躍り出た。

少し休憩し、スタミナゲージが回復するのをしばし待つ。

その間にもやる事はある。

志貴崎は屋根へ耳を押し付けて中の様子を探った。

彼の耳に屋根越しからガチャガチャとした誰かの気配が伝わった。敵が室内に居るのは間違いないと判断する。

スタミナゲージが満タンになったのを目の端で確認、屋根をそろそろと進んで縁まで到着した。

そこからだと『Aポイント』のある倉庫が丸見えだった。が、まずはこの建物の掃除が先。

フラッシュバンを手にとり、縁から顔を出して窓の位置を確認。既に物音はしなくなっているが、彼は構わず窓を経由して屋内へとフラッシュバンを投げ入れた。

数瞬後、破裂音。

その音を聞く前には既に、志貴崎は空中に身を投げていた。彼を浮遊感が包む。

ゆっくりと重力の力によって地面へと引き寄せられる。

……このままだと地上に激突してしまうが、突如彼の右腕が太陽光に反射しながら屋根の縁に突きつけられた。

屋根の縁には排水用の溝。見た目的にはプラスチック製だ。そこに志貴崎のナイフに突き立てられてゴリゴリという音を立てた。

……それだけで溝は破壊されず歪みもしない。

予想通り。

志貴崎は猛禽類の笑みを見せながら思った。これはゲームだ、と。

現実でできてゲームでできない事は沢山ある。が、逆もある。

『VRでできてリアルでできない事』

まさに今、志貴崎がしているアクションがそれだ。おそらく上空に張り巡らされた電線も、バランスを崩さなければ踏破できるだろう。

志貴崎は以前、VR環境下で結構な日数『住んだ』事がある。

彼がそこで最初に行った事は、『現実』と『VR』の違いを知ることだった。それが今回は大いに役に立つ形となった。

特殊なナイフ付きの手袋はしっかりと志貴崎の全体重を支え、悲鳴一つ上げる事無く彼の体をナイフを軸にしてぐるっと回転させた。つまりは窓へと向かって。

そのまま建物の中へと、窓を経由して豪快に進入。

盛大な音が出るがフラッシュバンにより視覚と聴覚を失った敵は、地面にうずくまっていた。

とりあえず今眼前にいるのは二人。

そつ脳が認識した時には既に志貴崎の手は動いていた。

一人へハンドガンを向けて発砲。何発頭に弾を撃てば死ぬのか良



くわからないので、とりあえず4発ほど撃ちこんだ。  
キunksンというサプレッサー独特の音が手元で響く。その間に半端無意識に右手が煌き、もう一人の首を撫でた。

SM 「Glock」 Been BOT  
SM 「Knife」 Jones BOT

眼前のGUIに表示されるログ。どうやら二人ともきっちり『死んで』くれたらしい。

ハンドガンの弾はあと13発。十分だと判断。

辺りを見回して屋内の確認をしようとしたところで、彼の耳に下で誰かがうごめく音が聞こえた。

どうやら下で待ち伏せしていたらしい。

フラッシュと彼の突入してきた音に気がついて、上へと向かってきている。

相手が戦闘態勢を取る前にこちらから突撃する事にした志貴崎は、ささっと耐性を整えた。

できるだけ音立てないように階段へと向かう。同時に敵の歩幅に合わせることで、完全に敵の足音と彼の足音が混ざる。

ほっぷ

すてっぷ

じゃんぷ！

この『体』最大の力で階段を飛び降りる。敵はちょうど階段を上ってる途中で、あわてたように銃を構えようとするが。

「遅い！」

彼は限界前で口を引き上げ、笑った。

彼はジャンプの時には既に、大体の位置を予想していた。銃口が、ぴたりと敵の頭へと向けられていた。

あとは軽く微調整するだけ。簡単な最終調整だ。

しかし志貴崎は考えた。

今は跳躍の途中、狙いが甘いのは承知している。なら、頭じゃ無くて腹だ。

下へと銃口を調整した。

腹は確か頭より死にくいはずだ。ならば全部撃とう。

トリガーを引く。

引く。

引く。

引く。

出来うる限りの連射速度で。

手元のサプレッサーからまぬけな音。

ハンドガンから弾が吐き出されながら、敵と彼の距離が縮まった。

こいつはもう死んでるか？ ふむ。わからんな。

そう思ったので、志貴崎は右手を煌めかせた。

すれ違いざま、光の軌跡が敵の首を軽やかに撫でた。

階段を飛び越え、一階床へと着地。

手早くハンドガンのリロードをしながら、ログを確認。

SM 「Glock」 Elie BOT

ハンドガンのみでイケていたようだ。とりあえずこれで三人。：

…あと二人か。

建物の中をささつと確認、安全なようなので声を出してもよさそうだと判断。

「軍側建物、敵を掃除した」

今倒した敵から武器を奪う。

照準器付アサルトライフルに、志貴崎の物と同じハンドガンを持っていた。ありがたくハンドガンの弾倉だけ頂戴する。

油断なくアサルトライフルを構えて二階へと引き返し、辺りを注意深く探る。とりあえず『Aポイント』はここからだと思えない。

『Bポイント』に敵はいないようだがさて、どうするか。

とりあえず彼は指示を待つことにした。

\*\*\*\*\*

「はええ!!」

志貴崎さんはゲーム開始と同時にすさまじい勢いで走っていくと、そのまま『テロ側建物』へと消えていった。

装備を極限まで削るとあそこまで早くなるのか!!

「俺らも続くか？」

「離れすぎてる。ここは左へ折れてBポイントを攻める」

「なるほど。志貴崎さんを囷にする訳か」

志貴崎さんが暴れて敵の注意を引いて、こちらは『Bポイント』へと着実に攻撃を加えるわけだ。

「それなら私が前へ出る！」

俺達の中で二番目に軽量装備の山城さんが全力疾走へと移る。

足が地面につくたびに、ジャカジャカと砂利をはじき飛ばして結構な音が鳴るが、志貴崎さんが向かった方から、スモークや爆発の音が聞こえてくるから、気付かれていないかも知れない。

「スモーク」

「はい！」

「おう！」

野谷さんの一言に応じて腰からスモークを取り出し、がむしゃらに『Bポイント』の方向へと投げる。

合計三本の煙幕が上空で作動した。尾を引いて落ちていく。

煙幕が広がり山城さんの道を作る。

彼女が煙幕の中に突っ込んだのを確認しつつ、自分達も煙幕の中へ。

おお、なんもみえねえ。

ミニマップを頼りに進む。仲間の位置も同時にマップには表示されるので、はぐれるような事も無い。

そのまま俺たち四人は一匹の蛇のように、煙幕の中を進んで『Bポイント』まで到達した。スモークグレネードがいい形で落ちたようだ。継ぎ目の一切無い完璧な形の煙幕による道となっていた。

今回は俺が爆弾を持っていたので、そのまま設置に移る。煙幕を完璧に張ったので敵はまだ、俺たちを発見できていないようだ。

爆弾を設置する目の端でスモークで視界が悪い中、山城さんのツインテールがかるうじてコンテナの向こうへと走っていくのが見えた。

どうやら周囲に敵が居ないか確認しに行ったようだ。  
少し経って銃声。

「りゃあああああああ！！！！！」

同時に山城さんの叫び声。

GUIには、

M i k i「UMP」 N i k e B O T

と表示されていた。

勇ましすぎです。山城さん。

「軍側建物、敵を掃除した」

そこで志貴崎さんの声がインカム越しに聞こえてきた。

ログを見ると彼が三人倒したという表示が出ている。

どういう動きしてたんだ？ あの人。

そして俺の爆弾も設置完了。警告音が鳴り響く。

これで敵はあと一人。だが、油断できない。

「花はそのまま、その建物から『Aポイント』へと向かって。隠れなくても良い。敵がいたらそのまま対峙。敵がいなければ『Aポイント』経由で『Bポイント』までダッシュ」

「了解」

野谷さんが、的確な指示を飛ばす。

「『Bコンテナ』周辺にはもう敵いなかったよー」

軽い音だけを鳴らして山城さんが返ってきた。

「そう。散開して警戒。爆弾が爆発するまで待機」

「ほいほい」

「おー」

「わかりました」

野谷さんに言われたとおり警戒。俺は『Bポイント』から『はさみ広場』の方を警戒していた。

その時『テロ側建物』から敵が出てくるのが見えた。どうやら志貴崎さんとすれ違いをしていたらしい。

爆弾は仕掛けたので、時間稼ぎに徹する事にする。  
狙って発砲。

二発。

一発。

一発。

軽くトリガーに触れるようなイメージ。

単発で吐き出される弾。軽い衝撃、乾いた音。

一秒くらいの間隔を空けて発砲する事で、弾を切らさないようにするイメージ。

敵は慌てて『テロ側建物』へと引き返した。

これで爆弾が爆発するまでの時間稼ぎが出来るはずだ。

「『テロ側建物』に敵が入ってる。裏から出てくるかも」

「圭、変わって。テロ建物裏から回ってこないか見てて」

「お、了解」

野谷さんと持ち場を入れ替わる。

裏から敵がやってこないか警戒しつつ、彼女がどういうプレイをするのか参考にしようとかちらちらと観察する。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

野谷は息を軽く吸って、瞬時に集中した。

コンテナから体を半分だけ露出させて、脱力。自然体へ。  
どんな動きへも速攻で対応できるように……。  
自分しか居ない。

そういう感覚。

右手にぶら下がる『こいつ』の重さも気にならなくなる。  
周り全ての動きが遅くなる『イメージ』。

『相手は、どうするつもりなんだろう』

『私なら、どうするだろう』

考えても無駄。

だったら、見えてから動けば良い。誰よりも早く。速く。疾く！

壁から敵のヘルメットのアゴヒモが見えた。  
次はヘルメットの唾。

じゃあ次は？

……………目

そう脳が認識していた時には腕は跳ね上がっていて、スコープが目の前に。

照準は既に完璧。

もう目を閉じたってわかる。

だけど念のために、念のために。

さあ……、両目を見開いて。

全てを見るために、見逃さないために。

足を引いてしっかりと地面に『釘付け』する。

ずれないように、ぶれないように。

若干遅れて左手がしっかりと銃を支える。

ずれないように、ぶれないように。

相手の目を撃ち抜くために。

それだけを考える。

まだ敵は『まつげ』すら壁から出していない。

だけどそれでいい。

きつと出す。きつと出すから。

脳が『動け』と信号を出すと、何秒後に体は動くのだろうか。

いつも不思議に思う。どうして私の体はこうも遅いのかと。

いつも不思議に思う。私の口はどうしてこんなに遅く動くのかと。

じゃあきつとこのままでいれば、脳に合わせて体が速く動かせる日があるだろう。そう思っているがその日は未だ来ない。

現実の私は、いつまで経っても脳に追いつけない。



そして今、私は『この体』すらも置き去りにして、脳を動かす。

さあ。

『・・・動け』

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

轟音。爆発。

NOYA「M98B」Deeney BOT

テロリスト ウイン

俺と立ち位置を変えた野谷さんは、数秒コンテナから体を半身出して棒立ちしていたと思ったら、いきなり腕を跳ね上げて発砲した。あまりの早さに、全身がぶれているような錯覚まで見えるようだった。

昨日見た志貴崎さんの動きよりも速い。まさに瞬時。

「すげー」

「はー……」

もうこの人達に向かって何回『すげー』って言ったか分からない。  
これからも多分言い続けるのだろう。

感嘆のボキヤブラリ増やして方がいいですかね？ 俺。

鬼谷さんも目を見開いて驚いている。

「さあ、次行ってみよう」

ちょっと照れながら頬を染めてピースサインをする野谷さんは、  
鈍色の黒い銃がとても似合って綺麗だな、と思った。

三話の青春度は何点ですか？（改訂）

kei : 俺全然だめだった

iris : お帰りなさい、圭。

kei : こんばんわ。irisさん。

その後もBOTと対戦を続け、山城さんは雄叫びを上げながら特攻、志貴崎さんは安定して暗殺しまくり、野谷さんは百発百中、鬼谷さんは基本に忠実といった感じで、スコアを伸ばしていた。

だがまあ、俺は普通といえば普通にパツとせず、やられるときはやられて、倒せる時は倒せた、というような感じだった。  
場数が必要なのだろうか。

特に志貴崎さんはすいすい壁面を登っていた。

俺もやってみたがシステムアシストを駆使しても無理だった。

彼が言うにはむしろシステムアシストは邪魔で、『HALLO POINTの体』を把握して正確な場所を掴まないと登ることは無理らしい。

野谷さんの話によると、実際に軍に所属している人がプレイしていると、ああいったことができる人がたまにいるらしい。

志貴崎さん恐るべし。

Miki : 圭はあれだね。早さが足りない（キリッ

iris : お帰りなさい、ミキ。

kei : 早さが（笑）

iris : 足りない（笑）

irisさんが乗ってくるとは思わなかった。

NOYA : 大丈夫。練習すればすぐ敵を沢山殺せるようになる。  
iris : お帰りなさい、卯月。  
kei : 何か俺が沢山人殺したいみたいな言い方やめて？  
iris : 大丈夫です。ウヅキニタイナンテアリマセンカラ  
kei : 何でカタコトなんだよ！  
NOYA : /kick iris  
system : error

何か一日に一回野谷さんがシステムコマンドで弾かれるのが、定番になりそうだな。

nagi : お疲れ様でした  
iris : お帰りなさい、凧。  
nagi : ただいま  
kei : あれ？ 志貴崎さんは？  
iris : メッセージがあります『しばらくデスマッチルールで遊んでくる。』

Miki : デスマッチって何？  
kei : あれ以上まだやるのか。俺はもうへとへとだよ。  
NOYA : 何回死んでも生き返るルール。敵を倒した数を競う。  
Miki : へー

極度の緊張状態から体が解放されて、節々がギシギシ言っている気がする。

少しストレッチでもしようかな？  
そして志貴崎さんはどんどんirisさんの扱いが上手になっていく気が。伝言なんてどうやってるんだ？

nagi : 楽しいですね。VRFPS。  
Miki : ねー！ ちょこちょこみんなであそぼー

k e i           : そうだな。練習して次はもつと良い成績を残すぜ。  
N O Y A       : 期待してる。

M i k i       : タノシミニシテルネ  
k e i           : 畜生！

くそう。今に見ておれ……。

M i k i       : 今日は何点？

n a g i       : ？

k e i           : ？

M i k i       : 青春点だよー

k e i           : ああ、あれか。恒例にするのか？ これ

M i k i       : いいじゃないじゃないー

i r i s       : メッセージがあります『俺は60点だ！』

どんだけ使いこなしてるんだよ。どん引きだよ

k e i           : うーん皆の凄い動き見たからなあ。70点

M i k i       : 私は普通だったかな。楽しかったけれどね！ 50点！

N O Y A       : 皆とゲームできて楽しかった。80点

n a g i       : 昨日と同じくらい楽しめました。70点です

それぞれ点数を決める基準があるようだ。

まあちゃんと自分を持っていてるって事なんだろうな！。

M i k i       : 明日何しようかー

n a g i       : カラオケでも行きましょうか？

ふむ。明日何をするのかという話になっているようだ。  
何をするにしてもどたばた騒ぎになりそうな予感がするな。

kei :じゃあ皆でやりたい事を考えて明日話し合っつてことで  
nagi :それは楽しそうですね！  
Miki :いいじゃーん！  
NOYA :わかった

その後もまあだらだらと会話してしたあと、自然と解散となった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

二時間後。

SM :なるほど、明日は何か希望を皆で考えて持ち寄るのか  
iris :お帰りなさい、椋。  
SM :お、irisさんチョコ届いた。中々おいしかったです。

iris :そうですか、何よりです  
SM :うーん。何がいいかなあ。

SM :happy  
iris :なんですか？ それは

SM :テレビでやってた。意味はよくわからん。

iris :検索。「happy」

iris :結果。「あうあうあー」

SM :あうあうあー？

iris :あうあうあー

SM :happy / あうあうあー

iris :happy

kei :何やってんだよ

どん引きだよ。

風呂に入ってる間に、何かログがひどい事になってるし。  
何か今日のirisさんは全体的に酷いな。なんか。

SM : まあ、あうあうあーは置いておいてだな。

もう出さなくていいからな。「あうあうあー」は

SM : 口の中にチョコ入れながらVRに入れば、ずっとチョコ  
食べれてお腹減らないんじゃないのかって思ったんだが

kei : 嫌な予感しかない

SM : 洋服が……

kei : ……………

何でこの人は、こつも面白い事ばかりやってのけるんだろうか。

SM : お母さんどうしよう

kei : さつさと洗濯しなさい。確かぬるま湯に漬け込めば大  
丈夫だったような？ irisさん何かある？

iris : 検索。「チョコレート 汚れ 洗濯方法」

iris : 結果。「試せば合点、第5674回、チョコレート汚  
れなんか真っ白ぴかぴか！」「アドレス

SM : ありがとうございます！！

まあ、明日も退屈せずにすみそうだ。ちなみに、これって青春な  
んだろうか？

聞話 ケーキはとってもおいしいんですよ？（改訂）

皆が『部屋』への接続を切った後、irisは一人、『部屋』の整理をしていた。

『部屋』は、『HALLO POINT』へのポータルを無理やり開いていたので、キャッシュファイルでこちゃこちゃしていた。それらの中には卯月の新しい友達がどういう人たちか、知るヒントも沢山あった。

その時『部屋』へ追加されようとする、新たなプラグインをirisは感知した。

強制退出

どうやら野谷がkickコマンドとlog deleteコマンドを導入しようとしているようだ。ひどく四苦八苦しているようではあるが。

永久追放

banコマンドを入れないあたり野谷の優しさが覗える気がした。そもそも、irisが煩わしかったら、その時点で彼女を『部屋』から強制的に切断すれば良いだけの話だ。わざわざそんなプラグインを追加する必要はどこにも無い。

まあ、導入されても面倒なので、それらの処理を片手間で弾いていく。

「……何で」

野谷の狼狽が面白い。

irisはirisで、ここを『自分の空間』にしようと考えていた。

皆でくつろぐ一日の最後に訪れる場所。帰ってくる場所になればいいな、と思った。

だから、誰かがログを残すと返事を返す。「お帰りなさい」と。



最初は特に何も考えておらず自然とこの言葉が出たが、きっと最初からそうだった感情がどこかにあったのだと思う。

ケーキが無いのが、少し残念。

と、誰かが部屋へとアクセスしてきた。IPを確認。  
これは鬼谷だろうか。

「irisさんいませんか？」

VR環境下での接続により鬼谷のアバターが表示される。

この時irisは初めて彼女の外観を認識した。

長い銀髪、すらりと伸びた背、大きめな胸は高校1年にしてはなかなかに発育した体と言って良いだろう。恐らく『現実』での彼女も今と同じ外見をしていると思えた。

「どうかしましたか？風。私はここに常駐していますので、いつでも居ます」

礼儀としてirisも体を表示する。

といつても現在特にアバターを設定しているわけではないので、光る発光体としての姿しかないが。

「すみませんごちゃごちゃしていて。現在皆がゲームで遊んでいた時の、キャッシュを整理中でした。それにまだ、部屋にはテクスチャーを張っていなかったなので簡素ですね。ケーキもありません」

VR接続でこの『部屋』に誰かが来るのは、もっと先の事だとirisは思っていたので、部屋は現在白一色のテクスチャーだ。それにキャッシュファイルを整理するために掘り返していたので、辺りにファイルが散乱している。

「ふふ、構いません。ケーキは今度ごちそうになります。にしてもファイルを実体化させて整理してるんですね？」

鬼谷はirisがわざわざファイルを部屋へと実体化させている事に、驚いているようだった。

まあ無理も無いのは頷ける。普通だとシステムの裏側で半自動的に行うような処理のはずだからだ。

「そうですね。とても非効率です。ですがまあ、様式美という物ですよ」

「なるほど。様式美ですか」

鬼谷は楽しそうにうなずいている。

本当はキャッシュファイルの中の皆の動きや会話ログを覗き見て楽しんでいたから、という理由もあるのだが。irisは言わない事にした。

「ところで、ちょっといいですか？」

「？」

鬼谷の唇が音を出さずに動いて「ないしょの」と形を作った。

irisは一瞬思索するが、鬼谷のIPを逆探、接続ラインを検証。

その中に彼女が管轄しているプロキシを見つけたので、そこから経路を一時切断。

すぐに繋げてirisと直結させた。

これで鬼谷は『部屋』から強制切断された形となり、irisへと再接続されたことになる。

「これで内緒の話ができます。私の中なので、私は姿を出せませんが」

「こんな事もできるんですね!」

「裏技です。卯月も知りません。……内緒ですよ?」

「ええ」

鬼谷は、楽しそうにくすくすと笑った。

「昨日から、少し思うところがあつて。貴方と野谷さんについて」

「何でしょうか」

「貴方から『人』を感じます。それも野谷さんと同じ」

鬼谷は探るような目で一点を見ていた。irisが体を表示できない以上、その目の先には何も無いが。

また、irisから『人』を感じるといふのは、つまり彼女の中身について大体の見当がついていると言ふ事でもある。

「卯月から、少しだけお話を聞いております。電磁波の超能者だと」

「ええ、そうです。そして『人』の考えがわかってしまいます」

「なるほど」

鬼谷は沈黙して、目を閉じた。

言葉を選んでいようだった。irisはそれで彼女が何を言いたいのかがわかった気がした。

「私は卯月に育てられた『命を持った』AIです。私はAIであり、プログラムであり、ネットワークであり、1であつて、0でもあり、そしてその間を選択できる者です。……そして卯月から生まれ、卯月に育てられ、卯月となり、自分を得ました。私は『iris』。

人に作られ、人に縛られない。人造知的生命体。そのプロトタイプ」

「……………」  
「それで、私に何を聞きたいのでしょうか。風」

貴方が聞きたい事は、こんな下らない事ではないのでしょうか？

「私はこの能力がVR環境下でも使えます。……少し特殊な形ですが。私は警察に協力していくつかの事件を追っています。その中にVR環境下でネットワーク上のファイルを開くと、利用者とリンクし寝たきりになる事件がありました。強制的に回線を切断したり、10時間以上経過すると皆目を覚ますため、まだ死者は出ていません。彼らは何か巨大なサーバーへと接続されています」

irisはそれを効いて疑問符を浮かべる。まだ情報が足りない。  
鬼谷は依然厳しい目を緩める事は無い。  
その目で、何を見ている？

「アクセスは？」

「試みては見たようですが、無理だったようです。サーバー本体の発見にも至っていません。サーバーは約13時間ごとに移動して足取りもまったく」

「元となるファイルは？」

「ファイルサーバーからダウンロードする形ですが、10回の限定ダウンロード。ファイルを開かなければ2時間で効果が無くなり、利用者は記憶に混濁が見られ結局どういった物なのか分からずじまい」

「悪影響は？」

「ありません……。いまのところ、ですが」

「その『事件』は、今までに何回起きましたか？」

「……………」 私たちが発見できている件数で言えば、9回です」

「間隔は？」

「ほぼ毎日」

「なるほど」

奇妙な事件である。が、ありえなくはないとirisは考える。

恐らくVR接続による強制的な接続のロックだろう。PC機器にはもともとあまりに長時間のログインをさせないために、いくつかの安全装置が施されている。また睡眠による思考パルスの低下によっても、PCが接続を解除する。

ざっと検索したところ、その安全装置すらはずしてVR環境下に入り続け死亡するという事件が何件があるが、それは特殊な例だと思えた。

意図としては人の脳の反応を調べたり、VR環境下での特殊な人体実験と言った所だろうか。記憶を消してくれる辺りまだ『優しい』部類だと思われ、丁寧さが感じられる。どこかの国の研究機関が関与してる可能性がある。

そしてそういった事件の話をirisにわざわざしてくると言うことは。

「……私、いえ、『私達』を疑っているわけですね」

「……………」

鬼谷の瞳は揺れない。

命を持ったAI。その存在は現在の科学力・技術力を完全に十歩も二十歩も先に行く物だ。

そして恐らく野谷の事についても、ある程度がついているのだろう。

彼女はVR環境下にて『脳の異常』だけでは済まされないほどの動きを見せる。

irisと野谷。この二人が鬼谷に疑念を持たせた。

そして彼女の疑念通りであるとも言える。……正解ではないが。

「……技術的に言えばそれは可能です。ちなみに。今、回線切断はできますか？」

「え！ 嘘……できない……」

鬼谷が狼狽する。

まさか自分もそのような状況になるとは、思ってもみなかったのだろう。

「いささか無用心すぎますね。ちょっとでも疑いがあるのならば、ここに来る前に何枚か壁を通すなり、擬似アバターやPCを通すなりしなければ。まあ、それでも無意味ですが」

そう、私ならできる。人をVR内に閉じ込めることが。

しかし、

「ですが安心してください。私は、国に混乱をもたらしたりしないし、私のログを献上すると宣言もしている」

「……それは建前ですよね」

取り乱しながらも真実を得ようとするその姿勢は、純粹に好ましいとiris思った。

そして彼女は考える。

irisはもとより野谷もそのような大それた事をしてはいない。元より二人とも国からのバックアップが無ければ、生活にすら困るような身分でもある。

わざわざ自分達から国との間に荒波を立てるようなマネはしない。まあ国に献上したデータを使って、どこぞの研究機関が暴走して

いる可能性はくないが。

「それに、まだ『国に混乱をもたらしている』わけでもないでしょう?」

キツと、鬼谷は空中をにらみつけた。

緊張と焦り、そして少しの恐怖から、彼女の瞳は少しだけ、ほんの少しだけ揺れていた。

「痛いところを衝かれました。しかしそこは信じてもらうしかない。私、そして卯月は誓ってそんな事はしていない」

「何に誓って?」

「もちろん、国に」

「……………」

まだ疑いの目をやめない鬼谷に、irisは内心ため息をついた。さて、どうしようか。

次の言葉を考えているところで、鬼谷が大きく息を吐いて、微笑んだ。

「貴方達を信じます」

「潔いですね」

「言っただけでしょう? 私はVR環境下でも能力を使えるんです」

鬼谷がわざわざVR環境下で部屋へ入ってきて、irisとだけ話したいという時点で大体の予想がついていたが。

「試されていたわけですね」

「ええ。貴方が『人』で良かった」

つまりはirisの言動と、思考の差異を読み取っていたわけだ。

「流石風ですね。私の思考ルーチンは通常の『人』とは全く違います。それを読み取るとは」

「苦労しました」

そう言つて鬼谷は小さく舌を出した。

もしかしたら、irisの思考を完全に読み取っている訳では無いのかも知れない。それともirisの思考は完全に読めていたとして、あの揺れる瞳は何を恐れ、何に揺れていたのだろうか。

「しかし、私のあずかり知らない所でそのような事が起きて、私はもとより卯月まで疑われるのは面白くありません」

「すいません」

「いえ、風のせいではありません。私のほうでもその巨大なサーバーというのを調べてみます」

「え！いいんですか」

鬼谷が疑ってきたということは、ある程度irisと野谷を知る者が巨大サーバーを知った場合、まず二人を疑うのは自然の流れだろう。

そしてある程度権力があり、なおかつ単細胞で短絡的な『クズ』だった場合は、irisと野谷に好ましくない状況になる可能性が高い。

「はい。私と卯月のためです」

「ありがとうございます」

まあ、その分の報酬はもらつても問題は無いだろう。



「代わりといったては何ですが」

「はい？」

「今度、私の作ったケーキの味見をしていただけませんか？」

「ふふ、もちろん」

鬼谷はおかしそうに笑った。

「じゃあ私は紅茶を持ってきますね」

「コーヒーが合うと聞きましたが」

「ふふふ、人の種類だけ趣味と嗜好があります。例えば志貴崎さんは、きつとコーヒーや紅茶よりも、ケーキを付け合せた方が喜びます」

「なるほど。確かに」

まさか冗談で出したチョコレート5キロを、速攻で購入されて（しかも4セット）感謝されるとは思わなかった。世の中色々な人がある。『部屋』にいと、irisはつついその事を忘れてしまふようだ。

「それにしても、卯月は貴方達を完全に信頼しているようです。『とっておき』を見せるなんて」

「ああ、あれですか？」

鬼谷はすぐにピンときたようで、うんうんとうなずいている。

「あれは、『現実』の野谷さんとはまた違うように感じられました。あれは」

「呟。それ以上の詮索は無用です」

「あ、そうでした。すいません」

鬼谷は素直に頭を下げる。

『能力者』、彼らは人の範囲を超えた領域を歩む。  
だからこそ他人が踏み込んでいけない領域という物がある。  
彼女が踏み込もうとした領域。そこは野谷の秘密の部分。  
野谷が自ら打ち明けないといけけない領域。

「卯月は、人を疑う事を知りませんね」

まったく、困った『母』だ。

「irisさんがすっかりしてあげないと、いけないですね？」  
「その通りです」

面白そうに笑う鬼谷だが、その目は少し寂しげだ。

「私は、人を疑う事しかしりません」

そうつぶやく鬼谷に、irisはかける言葉を持たなかった。  
irisは持たないが。

「貴方がそうであっても、支えてくれる人がいるはずですよ」

それは昨日知り合った『彼ら』かもしれないし、未来に知り合う  
『誰か』かもしれない。

「そうでしょうか」

「そうですとも。色々な人がいますから」

「……………そうですね」

「そうだいいですね」と鬼谷は小さく微笑んだ。

## 間話 鬼との遭遇（改訂）

爽快な青空の下細い細い橋の上、器用にバランスを取りながら志貴崎は走っていた。VR環境下ではいまいち風を感じられないのでちよつと不満ではあったが、この満点の青空はどうだ。

やはり空は良い。

彼は以前、スカイダイビングゲームにハマっていた事がある。

建築物一つの無い大自然を眼下に見ながら高高度降下。重力に弄ばれ、「お前は一人の人間だ」と大声で言われた気がして全身が震えた。

その時眼下に見えた草や花、木、鳥、川、海、魚、山。どれ一つをとって見ても彼はその名前を知らなかったし、これからも知る事はないが、彼は『自然』が好きだった。

このゲームの青空は良い。マップ自体に自然物が無いが、その對比が何とも乙なものだなど、志貴崎は思った。

が、その時彼の眼下、『地上』から連続する乾いた破裂音。逆さに降る鉄の雨。

志貴崎は内心舌打ちをした。もう少し走っていたかったのに残念だ。

彼はそれをひらりと身をかわし、空中へと身を投げた。ちょうど下には『テロ側建物』が。

現在志貴崎は、『HALLO POINT』のチームデスマッチを遊んでいる最中だ。二つのチームに分かれて打ち合い、倒した数で勝敗を競うなんともわかりやすいルール。

屋根へと降り立った彼は手早く現在の装備を確認。ハンドガン、

フラッシュバン×2。

他のプレイヤーと比べると何とも貧弱な装備だが、彼は元々この装備を選んで戦いに挑んでいた。

現在の成績は『32/5』。32人倒して5回倒されたとなっている。もつともその内の三回は弾切れになったので、足下にフラググレネードを転がして自殺したただけなのだが。

ぬるいな。

彼は嘆息しつつ思った。

対人戦闘になればBOTとの対戦よりも熱い対戦ができると思っ  
たが、実際そうでは無かったらしい。

こちらの陽動にまんまと引っかかり、背中を向ける奴。

対峙して打ち合った時に思いつきで伏せて『死んだ振り』をすれ  
ば、簡単に騙されて撃つのを止める奴。

マップ隅の端に寝転んで、じっとスナイパーライフルを覗いてる  
だけの奴。

他にもまだまだあるが野谷の用意したBOTの方が、数倍訓練さ  
れた軍隊のような動きをしていた。

そんな彼らを暇つぶしに屠った結果の数字が『32/5』だ。自  
慢にもならない。

そんなわけで段々と飽き始めていた彼は、先ほど上村達と遊んで  
いた時に思いついた『電線走り』を実行に移していた。

彼の予想通りポリゴンとテクスチャで構成された電線は、揺れず  
にしっかりと志貴崎の体を支えた。後はバランスの問題だけ。つま  
りは簡単。

単純な思いつきにしては、中々楽しめた。

「まあ、ぬるいとは言っても、骨のある奴が一人いるようだが」

志貴崎は笑った。

彼を二回殺した相手。二回とも不意を打つ形ではあったが、それでも殺されたことには違いない。

このゲームの『立ち回り』を知るもの。中級者かそれ以上。

さて、志貴崎<sup>初心者</sup>の腕が通用するのかどうか。試してみようでは無いか。

しかし、その前にやるべき事がある。

肝心の相手がどこに居るのか、彼は全く分らなかった。

志貴崎はしゃがんで屋根に耳を当てた。ガチャガチャと音が聞こえる。

なんともまとまりの無い音だ。恐らく数人が複数ある窓から節操も無く顔を出して、敵を探してうろつろ歩き回っているのだろう。

一人では無いことと、お互いに死角が無いと『思い込んでる』事から、気が緩んで大きな音を立ててしまっているのだと彼は考えた。こんな奴らにわざわざフラッシュバンを使う必要も無い。

そう思った志貴崎は屋根から飛び出し、重力に身を任せた。

浮遊する体。ゆっくりと重力を受け入れて下へと落ち始める。

その瞬間に彼の右手が煌めく。

ゴリつと音を経てナイフが屋根の縁に引っかかり、志貴崎の体がナイフを軸に回転。それと同時にハンドガンを取り出して、窓から突き出た敵の頭に狙いを定めた。

トリガーを引く。サプレッサーを付けたハンドガンが情けなく鳴いた。

さらに数発、きゅんきゅんと頼りない声を響かせる。

GUIに出た表示により、その敵が死んだ事を目の端で確認。

空中に投げ出されたそのアサルトライフルを腕に引っかけて引き寄せる。

重力とナイフを軸にした回転により、勢いそのまま窓の中へ飛び込んだ。

と、部屋の中に入る瞬間窓際にまだ敵が居たようだ。右手が半ば無意識に動いて首を撫で切り裂く。

転がりながら部屋の中の敵の位置を確認。

まだ三人もいる。皆一生懸命自分で抱えた銃口の先しか見ていない。

志貴崎が入ってきた音でようやく気付いたように、のたくたとようやく振り返り始める始末。

「お前らじゃ無いな」

果たしてその呟きは彼らには聞こえたのだろうか。

志貴崎は一時的にハンドガンから手を離し、腕に抱えていたアサルトライフルをろくに構えもせず発砲。横ないだ銃口に合わせて踊り狂う弾丸の Rond。

連続した破裂音。火花。火薬の匂い。

彼の発砲により、完全に不意打ちを受けた敵は二人が死亡。残り一人、ギリギリ死は免れはしたようだ。

が、銃弾の洪水に無傷で居られる筈は無い。大きくのけぞってまともに動けそうに無かった。

その隙を彼が見逃す筈が無い。体勢を一瞬で整えて跳躍、右手のナイフを敵の首へと突き立てる。

これで五人。ちなみにこのルール、五人対五人ではなく十人対十人だ。

「……次へ向かうか」

次の獲物を探すために、志貴崎は勢いよく階段を飛び降りた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

テルは、呆然と眼前に広がるログを眺めていた。

```
SM 「G l o c k」      E l i t e   J o e
SM 「K n i f e」      「C T E」   t a k o y a k i   j p
SM 「M 1 6」        x x x   E V I L   x x x
SM 「M 1 6」        「S L G」    J
SM 「k n i f e」     - - - M R M R - - - R o b e r t   R
o b e r t   R o b e r t
```

このログは約10秒の間に一気に表示された『キルログ』だ。

一度だけだったら「ふむふむ、まぐれ連続キルおめでとー」位の軽口を言っただけだが、この『SM』が入ってきてからこのような三、四人一気に倒す事が数度ある。しかも成績表を見ると現在こいつのスコアは『38/5』だ。

そして今、彼の見ている前で二人分スコアが増えた。

あまりに圧倒的すぎる。

チートだとしてテルには思えなかったが、彼は『SM』を二度殺している。いずれも遠くからスナイパーライフルによる『クイックショット』で。

その時見た顔が忘れられない。自分を殺した相手を見定める、肉食獣のような獰猛な笑み。

チートなんかやってる『テトリス野郎』が、あんな顔なんか絶対しねえ。

テルは身震いしながら自分の銃を軽く構え直した。

この『H A L L O P O I N T』でスナイパーライフルを使う奴は上級者中の上級者か、作戦上配置される役割としてのスナイパーか、もしくは奥の方で縮こまって一つでも自分の死亡回数よりも、殺した数を優先する初心者にも満たないおこちゃまnobしいない。

そしてテルは、『上級者中の上級者』という自負があつた。

重量装備となるため足の遅いスナイパー。

わざわざ相棒抱えてえっちらおっちら前線へ。

周りが彼にあざけるような視線を向けた。

ある程度の所まで来たら、胸に相棒を抱えて敵をさがす。

そして敵を発見すると同時に彼の腕が跳ね上がり一瞬で照準。敵の頭に綺麗な花が咲く。

その時の周りの目が忘れられなかった。

全身に電気が走るように興奮した。

そもそも『クイックショット』とはその名の通り、銃を構えてスコープを覗くか覗かないかの段階で発砲するという、V Rが浸透する前にモニター越しでプレイする旧世代のFPSでスナイパーが用いていた今はもう廃れた技術だ。

昔は銃を構えなくなつて画面の真ん中に大体弾がとんでいったし、銃を構えればかならずその場所に穴が空いた。その特性を利用して構えた瞬間に発砲する。それが『クイックショット』。

「そんな『前時代の技術』が、進化したV R F P Sに通用するわけがない」

そう言つてほとんどの人が『クイックショット』から離れていった。

昔は『クイックショット』ができる事こそ、上級者の最低条件とまで言われていたのに。F P Sの常識は一気に根本から崩れた。



それでもスナイパーライフルに取憑かれたプレイヤーは数多く居た。中距離戦闘メインのこのゲームでも例外では無かった。

テルはこのゲームのプレイを始めてから、スナイパーライフル以外を触った事はほとんどない。まさにジャンキーだった。

自分の生まれる以前よりある技術を、伝説を、彼はVRでも再現しようとした。

テルはこのゲームをプレイし始めてからまず、銃をいじり倒した。発砲時の反動から、銃口の上がり、肩の角度、支える手の力加減。それら全てを体に覚え込ませた。

これはゲームだ。

その事実是不変わらない。なら全ての動きが単純な計算式でなければおかしい。

『風の動き』

『太陽熱による銃身の歪み』

『発砲ことによる銃の消耗』

それら『現実』にある現象が、このVRゲームで詳細にシミュレートされているはずが無い。そんな基本理念に捕らわれて、『絶対に同じ動きをする』姿勢を自分に覚え込ませた。

そしてそれは完成した。

『クイックショット』がまた現代によみがえった。

もちろん彼と同じようにクイックショットを扱える人は、少なからず居る。しかしそのほとんどの者は自らの感性や経験で行っている。

彼の怨念とも言えるべき努力と執念が、その異質とも言える『クイックショット』を生み出した。

そしてテルは上級者の仲間入りをした。  
敵を殺しに殺した。

目に見える全ての物に対応できる自信があった。舞い上がっていた。

そんな中で、テルは彼と出会った。

「その撃ち方、教えて欲しい」

彼の名前はケットと言った。

特に特徴の無い、どこにでもいるような普通の少年。あまり感情を顔に出すような事は無かったが、ゲームをプレイしているとその瞳がキラキラ輝いてとても印象的だった。

あの時テルは有頂天だった。自分の技術、経験、知識。そのどれもがケットには理解できないとふんで全てを教え込ませた。

手取り足取り、詳しい解説を混ぜて。

「どうだ、俺はすごいだろう？」

「こういう時はこうするんだ」

「『クイツクシヨット』はな」

そう『全て』を。彼の持っていた一切合財、一ミリも残さず全部結果、悪魔が誕生した。

とは言っても、ケットは純粋にゲームを楽しんでいたただだった。銃自体には興味が無く、敵との勝負を純粋に楽しむただのガキ。だが、ケットの腕が跳ね上げれば必ず赤い花が咲き、彼が安全だと判断した場所には敵が居た事なんて一度もなかった。

結局彼を悪魔だと思っていたのはテルだけだった。

彼はケットを恐れた。自分以上の技術、自分以上の力量、自分以

上の知識。同じスナイパー、同じクイックショットの使い手。

それでもケットから離れられなかった。

『ゲーマー』としてのテルが強い奴に惹かれてつるみたくなるのは、当然の事でもあったのだから。

思えば、そこでケットと離れておけば良かった。強い奴は強い奴を誘う。類が友を、と言う奴だ。

どんどん強い奴らが彼らに加わり、抜け、また加わった。気がついたらテル達は、ケットを中心にしてクランを作っていた。

ゲーマーって言うのは、結局どこまで言っても自己中心的な奴がほとんどなんだ、とテルは考えていた。

自分が最強なんだ。自分が一番強いと心のどこかで思っていた。そこに突如として現れたケットという男。

その圧倒的な強さ、ゲームに対する純粹さに、誰も彼もが従った。正直、クランは無茶苦茶強かった。

そして勢いのまま世界大会へ。

皆でアホみたいに夢中で練習した。

ケットは本当に楽しそうだった。

その時の彼はまさに純真無垢な、跳ね回るただの子犬。少し、皆よりちよつとだけ、最強だっただけの。

しかし大会が進むにつれて、彼らの心はバラバラになった。

だって10万\$だぞ！？10万\$!!!

見たことも無い額の金が眼前にぶら下がった。

彼らは言い争った。バカみたいに。餓鬼みたいに。

振り返って思えば、そんな彼らをケットはずっと不思議そうに見ていた。

その目が「ねえ、ゲームしないの？」と言っているようだった。

散歩をせがむ犬ところに、テルは思えた。

大会はどんどん彼らを押し上げた。

テル達は興奮した。

そしてその分だけ言い争った。

そしてそして、それはゲーム中にまで及んでしまった。そう。ゲーム中にまで。

きつとそうに違いない。ケットはそんなテル達を見て「遊ばないんだ」思ったに違いない。

そしてテル達は集中力を欠いたままにゲームをして、ケットただ一人を残して全滅。

残った一人で彼がその試合を勝ちで終わらせた。

世界二位と一位の首輪を天使達がテル達の頭上へ運んで来たような幻覚を見た。大会はその日一旦区切りとなり、次の日大々的なイベントとして行われる予定だった。

「おめでとうケット！！ すっげーな、マジかよ！！ 信じられねー！ これで世界三位だ！！ それで明日なんだけ」

テルは死亡による音信不通が解除されて、真っ先にケットを褒めた。

だが帰ってきた声は、なんの感情もこもってはいなかった。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え……」

まるで、今日はもうおしまい。また今度。そんな軽さ。結局それからケットはオンラインにならなかった。

全ての作戦をケツトありきで立てていた彼らに、世界一位や二位なんて争えるはずも無く無様に玉砕。

それに追い打ちをかけるようにクラン面子、全員に昨日メッセージが届いた。

「抜ける。さよなら」

あまりにも簡素。

そのメッセージを受け取った時、テルは目の前が真っ白になるのを感じた。

皆自分にはもつと特別な内容のメッセージが他に来るだろうと身構えたが、結局誰にも来なかった。もちろん、彼にも。

最後までケツトは結局ゲームをしていただけなんだと、10万\$などゲームで笑う楽しさ以下の価値しか彼には無かったんだと、この時テルは理解した。

言い表せぬ喪失感を感じながら、テルはいつもの情性でゲームを起動。むしゃくしゃした気分を少しでも晴らそうと野良サーバーに入った。

『野良』とはその言葉の通り、誰も彼もが初対面でその場限りのチームワーク、その場限りの協力関係を繋いで戦う『パブリックサーバー』での戦闘の通称だ。

大抵初心者、中級者、上級者が入り乱れてチームワークもゲームの進行も、何もかもが関係なくカオスな戦場となる。

クラン同士の『クラン戦』が技術と知力の高度の戦闘だとして、この『野良戦闘』はグレネード片手にただ突っ込むだけの、特攻爆撃上等の泥沼混戦シェイクだ。

たいした強さの奴がいるはずもなく、無感動に敵を殺しに殺した。そして気づく。その異質な存在に。

ふざけた名前でログインしてきたと思ったら、ものの見事に積み上がるキル数。尋常な速度では無かった。一度に殺す数が半端ないので、恐らくわざわざ敵の密集地に突っ込んでるのだろう。しかも大半がグロックとナイフ。

ふざけてやがる。こいつ『テトリス野郎』だ！！ チートしてグロックとナイフだけで、暇つぶしに敵を殺してるだけにちがいない！！

チーターへの対抗心がふつつつとわき上がるのを感じた。

キルログと成績表、マップ上に表示される味方の死亡マークを見比べて、『テトリス野郎』の足取りを追う。

どうやら屋根や電線の上へ自在に上って走るクライミングチートか、空を飛び回るフライングチートでも使ってるようだ。まったくもってふざけている。これで無敵でも使われてたらしようが無いが、その時はその時だ。

ちなみに『テトリス野郎』とは、チートをする者につく俗称でその昔、まだV R F P Sの概念すら無い時代に流行ったチートツールの機能に、何故か『テトリスがプレイできる』という意味不明極まり無い機能が付いていた事によってついた。

そしてテルはついに『テトリス野郎』を発見した。今まさに屋根の上から窓へと入る瞬間だった。

考える前に腕が跳ね上がって完璧な姿勢となる。

そしてトリガーを引く。

爆発。反動。

『テトリス野郎』は背中を打たれて、まっ逆さまに落ちた。その瞬間、そいつと目が合う。

鬼だ

テルはそう思った。

何処までも戦闘を楽しむ瞳。あの目はそう。ケットと同じ

あいつはチートなんかしていない。完全に力量のみで今までの無軌道をやつてのけやがった！！

全身が鳥肌たったのを感じた。

そして彼は、今またGUI上に表示されたあらゆる情報を検証しながら、『鬼』の居場所を探っていた。

どうやら今『鬼』は公式戦ルールであるところの『Bポイント』の位置にいるらしい。

ここからだとして少し遠いな。

そう思った彼は後ろへと方向転換。待ち伏せ キャンプに最適な位置へと陣取るべく、路地を後退することにした。

その時、進路の向こう、曲がり角から一瞬横顔がのぞいた。無意識に腕が跳ね上がり臨戦態勢を取る。

が、既にその顔は隠れて認めることができない。

一瞬でミニマップを確認。味方はいの方向に居ない。敵だ。

しばらくその状態を維持するも、敵は顔を出さない。

顔を引っ込めたと言うことは、テルの姿を見ているという事だ。牽制射撃すらしてこ無い。

疑問に思いながらもゆっくりと腰をかがめ、すり足で後退する。できるだけ音を出さないように。

全身がセンサーの塊になったように集中する。

その時、テルの耳に微かに届いた風きり音。

上を取られた！

この態勢からスナイパーライフルを持ち上げる事はできない。一瞬でそう判断した彼はスナイパーライフルを放棄。路地の向こうへとぶん投げた。

そして手を後ろへ、ナイフを抜刀。

そのままの勢いを持って上へと振り上げた。

そして手ごたえ。

でたらめな体勢になっているのを認識しながらも無理やり飛びのき、転がりながら敵との距離を取る。

敵の確認は未だできていない。

残る装備はハンドガンとフラグ数個。

心もとない相棒を引き抜き、ようやくテルはそいつの姿を確認した。

「ふふん。中々に良い反応だな」

ハンドガンに向けた先には『鬼』が立っていた。右手に損傷。そしてその手にはナイフ。

どうやら利き手を潰せたようだ。これで満足にナイフは振るえない。

驚いたことに、こいつは主要武器メインアームを持っていなかった。

それらを高速認識、頭の中で必死に策を練りながら『鬼』の言葉には耳を傾けず速攻で発砲。

スナイパーライフルとは比べ物にならないくらい軽い反動。軽い音。

それが連続で鳴り響いて奴に叩きつけられる。

『鬼』は身近にあった木箱に身を隠して弾を避けた。



そのテルは腰からフラググレネードを取り出しピンを抜く。  
そのまま少し待ってから投擲。

緩やかな曲線を描いてグレネードは空を泳いだ。

そして地面へと落ちる前に破裂。

木箱を完全に包み込む『ノーバウンドボム』。砂利を跳ね上げ狭い路地の中、一瞬で轟音と煙を上げる。

ピンを抜いてから爆発までの時間を完璧に読んで放り投げ、地面へ接触する前にピンポイントで爆発させるFPSの基礎技術。

「ほほう。こういうこともできるのか」

粉塵の向こうから声が聞こえる。

テルは勿論それを予想していた。ハンドガンを構えて、後ろへと一歩、一歩ゆつくりと後退。

地面に落ちているスナイパーライフルを油断無く拾い上げる。

いつでも来やがれ

自分の反応速度に対応できる奴が、『野良』なんかにいるわけがない。この状況になっても、彼はそんな『常識』にとらわれていた。マップを見ると周りに味方が包囲網を敷いていた。しかし動く気配は無いので、テル達の攻防には気がついていないようだ。

味方が応援に来る事も無ければ、敵が増える分けでも無い。  
完全に一対一。

「こうか？」

その声と共に、木箱からフラッシュバンが出たと思った瞬間に破裂。

白。

あまりにも発動までの時間が無かったので、テルはまともにその光に目を潰してしまう。

しかし百戦錬磨の彼は慌てない。冷静に状況を分析する。

あの近さである距離なら『鬼』も直に食らっているはずだ。どうやらまったく信じられないが、『鬼』はFPSというジャンル自体初心者らしい。

世の中ケツトみたいな奴はいくらでもいるらしいな！！

恐らく目をくらませたのは『鬼』も同じはず。そう考えてテルは行動を開始した。

彼はこの港を含め、『HALLO POINT』のマップは全て何千回と繰り返し走り抜いてきた。脳に全てのオブジェクトを覚えこませてある。

頭の中で地面が、壁が、路地が、そして木箱が。詳細に描写され、テルはその中を走る。

そして構える。彼の『相棒』を。

トリガーに指をかける。

想像上に描かれた木箱の裏、『鬼』へと向かって。

そして発砲。

手に、肩に、腹に爆音と振動を感じた。

そしてだんだんと視界がはれてくる。

そこには『鬼』の死体がころがって……。

「ふむ。上級者もこんなものか。いや、中級者か？　ともあれ、お疲れ。楽しかったぞ！」

「は？」

咄嗟に振り向いた彼の脳天に軽い衝撃。

一気にGUIのHP表示が0%へ。

死。

ナイフ？

そう認識した彼の眼前にはお疲れさん。といった感じで『鬼』が二カつと笑っていた。

嗚呼、こんな奴が『野良』に出没するのなら、ケツトも楽しく遊んでるに違いない。そしてきつと俺らはもう、ケツトを楽しませる事ができないんだ。

もうケツトには会えないんだな。と、この時テルはなんとなく理解した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

SM 「knife」 「KT」 tell for

反応速度は中々だったが、野谷ほどでは無かったな。それにこいつはなんでゲームなのに楽しそうにしないんだ？

志貴崎は不思議に思った。周りの奴らは誰も彼もが本気で笑顔をむき出しにして、本気で悔しがって、ばかみたいな大声を出しながらゲームをしているというのに。

確かに上手いのかもれない。しかしきつとこいつは、このゲームがあんまり好きじゃ無いんだろ？ と志貴崎は結論づけた。

**四話 学業は大事、青春はもっと大事？（改訂）（前書き）**

まさかの大量加筆。

すさまじい修正となりました。原稿用紙10ページ分の追加ですw

#### 四話 学業は大事、青春はもつと大事？（改訂）

「しまつま」

「マンドリル」

「ルンバ」

「馬刺し」

「……しろながすくじら」

俺達は向かい合って座りながらしりとりをしていた。

待ち時間とはなかなか退屈なもので、最初は外の景色を眺めて楽しんでいたのだが、それもすぐに飽きた。

俺達の足下から鈍い振動が伝わり、時折ガタガタとこの場全体が揺れる。

座り心地のいいフカフカなソファ、丁寧な作りの一本の木削りだしたオーク机、足元には毛の長い真紅の絨毯、縦長に拾い空間、壁に飾られた高級そうなワインボトルの数々、そしてお茶のボトルを持ちながら待機しているスタッフさん。明らかに高級よりもさらに上、まさにVIPと呼ぶにふさわしい雰囲気がここにはあった。

「ライド オン シューティングスター」

「何それかっこいい。タルタルソース」

「スルメ」

「めざし」

「……しまつま」

そんな中で学校帰り、制服を着ながら、しりとりをしている俺達。鈍く、空気をいきよく吐き出すような低い音が常に響いている。

「マジエスティ」

「何それかつこよすぎない？ ティーチャー」

先ほどからしているこの音と振動は、俺達がいるこの空間が移動してる事によるものだ。

窓の外には一面の白いもやが眼下に広がるだけ広がりまくり、その上には青空一色。

「チャリティー」

「ティー」

耳鳴りが少しするな。気圧の変化だろうか。

「……ティーカップ」

「プリティー」

ここは空の上、VIP専用自家用ジェット機の中だ。

「……………どうしてこうなった」

「圭の負けー」

あまりの非現実につい口に出た言葉に、山城さんが反応した。

はぁ…………。

まあ、まず、なんでこんな事になったのか経緯を説明しなければならぬだろう。

\*\*\*\*\*

前日『部屋』で話し合ったように昼食の席で俺達は、今日やりた  
いことを出し合っていた。

広すぎる食堂には、昼休みに突入していることもあってほとんど利用する人は居ない。

「とりあえず俺はアクアリウムかな」

「ふむ？ アクアリウム？」

「水族館みたいな物ですね。色とりどりの水草を植えたり、水槽自体を面白い形にして、水族館とはまた違った楽しみ方をします」

「へえー面白そう！」

「……うん」

「東エリアにある高層ビルの展望フロアで今やってるらしいんだ」

「あ！ そこって『レリアスビル』？」

山城さんが身を乗り出してきた。ツインテールがぴょんぴょんと跳ねる。

「お、知ってるのか？」

「うん。その社長がこんど魚を使って何かやりたいって言ったんだよー」

「……」

そついう話に繋がるのか。

「それにしても、そんな所に女の子を誘おうとするなんてー」

さらに顔を突き出し、ニヤニヤと目を細めてくる。

「な、なんだよ」

「圭って案外たらしね！」

「ぶっ」

何で皆のために案を練ってきただけなのに、そこまで言われない  
といけないんだ!?

「圭ってばやし　ぶふ」

なおもたたみ掛けようとする山城さんの頬を、掴んで挟む。  
これ以上変にちゃちゃ入れられたら敵わない。

「おぶおぶ」

変な顔になっている山城さん。  
しかしこれだけ顔を歪めても、美少女ってのは造形が崩れない物  
なのだな。とどうでも良い事を考える。

「はいはい。おとなしくしてようね。で、鬼谷さんは?」

こういう時はさっさと次の話題に進めるに限る。

「え?　あ、はい……あの、その前に山城さんは……」

鬼谷さんは俺の顔と、頬を挟まれた山城さんの間で視線を往復さ  
せている。

「おぶぶぶ」

「しばらくこのままにしてる。罰だ」

「おぶぶー!」

「そ、そうですか」

まだ気になっているようだが、鬼谷さんは口を開く。



「あの、中央街に紅茶のおいしいカフェがあるのですが、そこでお話でもどうでしょうか」

なんとも『らしい』提案だ。

「紅茶かぁ。俺紅茶はあんまり知らないけれど、そういうのも良いな」

正直この二日で精神的に疲れている俺にとっては、何ともありがたいプランだ。

「ふふふ、そうですか。男の人はそういった場所はあまり好きじゃないのかな、とも思ったのですが」

「いや、大丈夫だろ。な、志貴崎さん」

俺は志貴崎さんに視線を向ける。  
が、彼は何とも難しい顔をしている。

「どうした」

「なぁ、鬼谷」

「は、はい」

凄まじく真剣な顔だ。

若干鬼谷さんが引いているぞ。

「ケーキは美味いか？」

「はぁ？」

いきなり何を言い出すんだ？ この人は。

「カフェだろう？　と言う事は勿論ケーキもあるはずだ」

「え、えっと。はい。あります」

「ホールか？」

「へ？　は、はい」

「なら大丈夫だ！」

二カつと笑う。

この筋肉、なんとも良い笑顔しやがるぜ……。

「……私も紅茶飲みたい」

「おぶおぶうっうっ！！」

「おお？」

今までおとなしくしていた山城さんが突然暴れ出した。

ああそうか。顔を挟んだままだった。

「　　ぷは！　ひどい！　絶対今一瞬私の事忘れてたでしょー！！」

「あーすまん」

「もー。赤くなってるない？」

少し涙目に鳴りながら山城さんは頬を擦る。

「大丈夫。なってるないよ」

「もー」

「で、山城さんは何を考えてきたんだ？」

「へっへっへー。私はねー」

彼女は地面に置いてある自分の鞆を漁り、一枚のペラ紙で出来た冊子を取り出してきた。

「……ホテル？」  
「そう！」

山城さんが出したのはホテルのパンフレットだ。  
ぱっとみでもかなりの高級ホテルだと分る。

「このプールが凄い綺麗なんだよー！」

そう言つて数ページめくると、なるほど確かに。  
緩くカーブを描いた豆のような形に、底に蛍光色でカラフルに描かれた鳥が印象的なプールの写真がでかでかと載っている。

「夜になるとすごい綺麗なの！ だから学校が終わったら皆で水着買つてそこで泳ぐの！」

『の！』つて……。  
勝手に確定するな。

「ふむふむ。で？ 野谷さんは？」

「ひどい！ スルーされた！」

「ダイジョウブダイジョウブ。チャントキイテイタヨ」

「ひどい！」

「で、野谷さんは？」

山城さんは傷ついたようにしょんぼりして、パンフレットをめくり出した。

そこまで落ち込まなくても……。

「……お風呂」  
「ん？」

「…………お風呂行きたい」  
「おおっ」

またなんともアレな提案…………。  
高校生達を集めてやりたいことがお風呂か。

「…………友達と入ったこと無いから」

そう言って野谷さんはもじもじ俯く。  
ぐ、かわいい…………。

「あーけど良いかもねーお風呂ー」  
「そうですね」

女の子達は意外と乗り気だ。

「風呂…………なるほどなるほど」

志貴崎さんは何故か意味深にうなずいてる。何を考えてやがる？

「で？ 志貴崎さんは？」

これで全員のやりたい事が出そろっわけだ。

「ふふふ」

志貴崎さんは眉を片方上げてえらくもったいぶる。

「考えてきたんだろ？」

まさかココまで来て何も考えてないとか言うとか？

「うむ。考えてきたぞ。そうだな。……おれの提案は『全部』だ」  
「え？」

「ごめん全然意味わかんない。

志貴崎さんはどや顔でふふん、と鼻を鳴らせるばかりだ。

「だから全部やるのだ」

「それはわかったんだが、具体的にどうするんだ？」

アクアリウムにプールにカフェに風呂だぞ？

どうすればそれだけの要素を一つに積み込めるといのか。もしかして頭まで志貴崎さんは筋肉になってしまったのか。

「俺達の目的は青春だ」

「まあそうだな」

「だとしたらやることは一つ」

「だからそれがなんだっていうんだよ」

もったいぶる口ぶりに若干いらいらする。回答が見えないやり取りをするのは正直疲れるものがある。

志貴崎さんは立ち上がって腰に手を当てて、天井をビシッと指差した

「修学旅行だ」

「……え？」

なんだって？

「聞こえなかったか？ 修学旅行だ」

嫌な汗が背中を伝う。志貴崎さんはいたってまじめだ。

「しゅうがくりょこう？」

「……………」

「はあ」

他の皆も目が点になっている。

「そもそもだ。俺達は『修学旅行』をやったことが無い！！」

「え？ 修学旅行、無いのか？」

鼻息荒い志貴崎さん。しかし修学旅行をしたことがない？ しかも『俺達』？

俺の前いた中学校では普通にやったぞ？ 約一週間くらいの行程で。

「そうか。上村は経験したことがあるのだな。そもそもここ、学園には修学旅行、学芸祭、体育祭などの世間一般で言う一大イベントはまったくないのだ！！」

『のだ！！』って言われましても。

「俺達は能力者。そんな俺らが修学旅行をやってみろ？ 間違いない阿鼻叫喚が広がるに決まっている」

「いや、自分達で『阿鼻叫喚』って言っなよ」

「いえ、上村さん。志貴崎さんの言う事は本当です」

「え？」

鬼谷さんを見ると、少し沈んだ顔をして目を伏せていた。

「私たちは能力者。それだけで周囲に要らぬ警戒や迷惑をかける物なのです。大げさかも知れませんが、私たちはこの『都市』より外に出る事はできない」

『モルモット』だから……。

そう言っているようで、胸が締め付けられる気がした。

「まあ、というわけで俺達はアニメとかで見るとような皆で温泉だとか、枕投げとか、猥談とか」

「おい」

「お土産選びとか、観光地巡りなどしたことがない」

志貴崎さんの目はキラキラ輝いている。

「そうね！ うん！ 言われてみれば修学旅行！！」

がばつと山城さんが跳ね上がる。

そして席から立ち上がり、くくるとターン。

「嗚呼！！ 修学旅行！！ それは甘美なる響き！！ 恋焦がれ寝た日の数は、算えることすらもう敵わない！！ いつからだろう！！ その言葉をあきらめていた！！ その憧れが今ここに！！」

綺麗なソプラノボイスは、人の少ない食堂でどこまでも響く。

腰を綺麗にそらし、天高く手を伸ばす。その手はどこまでもものび、指の先で何かを掴もうとする。

なにやってるんだか。

「嗚呼！！ ジュリエッ！！」

自分の中に入ってる山城さんを放っておいて、志貴崎さんの話に戻る。

「それで、目的地だが」

そうだった。目的地の話が残っていた。  
嫌な汗がだらだらと止まらない。

「沖縄に行こう」

目の前が真っ白になるような、なんともいえない感覚が俺の全身を駆け巡った。

「「「沖縄！！！！」」」

というわけで、俺以外のメンバーは全員乗り気だ。  
今日沖縄行こうと言われて「いくいくー」と言えるこの人たちの  
非常識さにはもう慣れた。何も言うまい。

だが俺は一般人だ。最後まで抵抗はさせていただく。

「まで。俺はお前らと違って一般人だぞ。お前らは金あるかもしれないが、そんな急に沖縄行きの飛行機のチケットなんてかえねーよ」

「何だそんな事か。そんな事気にするな。俺達の金を使えばいい」

「施しは受けねーよ」

「堅いねー圭はー」

山城さんも志貴崎さんに同調して気にするなと言ってくるが、俺は俺の考えでこいつらに付き合っていくと決めていた。



これからも一般人でいるつもりだし、最低限の常識の中で生きさせてもらう。

だから俺は俺なりの譲歩をする事にした。

「施しは受けない。しかし金もない。そして、俺も沖縄に行きたい」

そう。そもそもこいつらに付き合ってる時点で、今後もどんな無茶や無軌道が飛び出てくるか分かったもんじゃない。

沖縄なんてきつと序の口中の序の口のはず。多分半年後か一年後には「宇宙に行こう」とか言い出すぞ。

「だから、貸してください」

これが俺の中で出した結論。

施しは受けない。だが貸せ。恐らく一生返せないだろう。だが、きつとこいつらは一生待ってくれると変な確信があった。

「圭は律儀だね」

「まあ、上村さんらしいですね」

「……ん」

「素直じゃないな!」

そんな、「このツンデレめ」みたいな目で見るのはやめてほしい、志貴崎さん。

こいつらが金銭で規格外なのは何となく理解していた。だから俺はもういちいち気にせず開き直る事にした。こいつらの言う『青春』についていくしかないんだ。せいぜい借りるだけ借りまくってやる!

「それで、何泊にするのー?」

山城さんがツインテールを揺らしながら興奮を隠しきれないよう  
に聞いてきた。

どうやらトリップタイムは終わったようだ。

そんなに身を乗り出すと、襟からブラが見えそうで……見えないっ！

何泊？

泊！？

「え？ 泊まるの？」

「当たり前だろう？」

何を今更？  
みたいな感じで志貴崎さんが視線を向ける。

まあ、そりゃそうだよな。沖縄だもんな。飛行機だもんな。行つて帰ってくらだけなら何もできないもんな……。

[illegible]

ちよつと！ 学校どうすんだよ！！  
えねーよ。明日学校あるじゃねーか！  
いづら意味わかんねーよ。

もう何だよこの人たちあり  
意味わかんねー！ もうこ

助けてirisさん！！

いや、irisさんに助けを求めても「^p^」とか返してきそうだから駄目だな。しまった！俺には常識的な友達がいないえ！！

……こうなったらキャシーさんにも相談しようか。  
何か担任は当てにならない感じがするし。

そういうわけで俺は、計画を志貴崎さんたちに任せて教員室にい

るキャシーさんを尋ねた。

「……というわけなんです。助けてください」

いろんな意味でもう八方塞です。

「いいじゃない、沖縄。行ってくればいいじゃない」

「ええー……」

彼女は「いいわよ。沖縄は」なんて思い出話なんて始めてしまう。  
キャシーさんもこんな反応だ。もうやだこの学園。

「けど、成績とかに影響が……」

学生として当然な心配。勉強に追いつけなかったりとか、休みが多いせいで進学できないとか、ほかに色々支障が出るのが普通だろう。

「貴方、この学園を良い意味で舐めきってますね！」

ふんぞり返って「ぺろぺろしすぎよ！」とか言われた。  
何？　ぺろぺろって。

「昨日も話しましたね。この学園の事」  
「はい」

「この学園に居る事。それは国から保護を受けると言う事。それが何？　勉強ができない？　休みが多い？　そんな『下らない』理由で大切な能力者を手放すはずがないわ」

「いや、下らない事は無いと思うんですけど」

むしろ一番大切な事だと思っんですけれど。

「この学園は国が完全にバックアップをしています。この学園に登校するような能力者達は、皆なんらかの『利用価値』があります。この学園に席を置く事。それこそがこの学園にとっての一番重要な事なのです」

授業を受けることよりも、休まないことよりも大事なこと。

「だからこそ、この学園の授業進度は遅めです」

「な、なるほど」

「そして、学園の方針に従わない能力者は……」

キャシーさんがニヤリと笑う。

怖い。むちゃくちゃ恐え。

「そして卒業した後も、この『学園』が完全に能力者達をバックアップするわけです」

「な、なるほど」

舐めてました。ぺろぺろしてました。

まさに常識外だな……。

「そしてそのルールは貴方にも適応されてます。上村 圭」

キャシーさんは、突然冷淡な目をして俺を見た。

「貴方は『あの』上村 沙紀を姉に持ち、ランク5の人々と交流し今後も交流を続けると宣言した普通の少年。貴方は一般人でありながら、もはや一般人の枠には戻れない存在となった」

「……」

「貴方はもう戻れない。いえ、最終確認がそろそろ来るはずです。決心をした方がいいでしょう」

「……そんな気はしていません」

そもそも3日。その日数を長いと取るのか、短いと取るのかそれは人それぞれだろう。

しかし、この『特殊』な学園に入学した『普通』の俺は、この学園にとって異物ではない。そろそろアレルギーの出る時期が来ると言っことなのだろう。つまりは「お前は『特殊』な方に来るのか？ それとも『普通』に戻るのか？」そう言ってくるに違いない。

「……だからこそ」

キャシーさんは柔和な表情に戻りながら、俺の頭を撫でた。そして「沖縄、楽しんでらっしゃい」と後押しをしてくれた。

……って、後押しをしてもらうために来たんじゃないかなったような気がするんだが。さんざん脅されるだけ脅されただけな気がする。そんな訳で俺たちは放課後、そのまま空港へと向かう事となった。何故かと言うと、

「修学旅行なのだから、制服にすべきだ！」

と志貴崎さんが力説しやがり、俺以外の三人がそれに同意しやがったからだ。今回基本的な能力者4人が役に立たなさそうだと俺は直感して、反抗することを辞めた。

#### 四話 学業は大事、青春はもつと大事？

そういうわけで、俺たちを乗せたジェット機は沖縄へと向かっていった。空港でこのジェット機を見た時、俺の最後の砦として残っていたなけなしの『常識』は木っ端と化した。もうどうにでもなれ。

そして、飛行機の旅もある程度の時間かけるべきだという志貴崎さんの意見を反映し、このジェット機は、ジェット機なのに優雅にゆつくりと運行していた。

「あの、座ってた方が良いんじゃないですか？・・・ずっと立ってるんですか？」

俺はどうも、先ほどから後ろの方で畏まってお茶のボトルを持つ、客室乗務員というか、サポートというか、執事というか、そんな風貌の人が気になって仕方が無かった。びしっとしたスーツに白髪をきっちり固めており、まさに紳士。常に俺たち一向に不便が無いのか確認してくれているようだ。

「いえいえ、これが私めの仕事でありますから」

お気遣いどうも。と頭を下げられる始末である。

「そうだぞ、上村。人の仕事にケチを付けるものではない」

志貴崎さんは、オーク机に広げられたカードの束をにらみつけながら、俺に注意してきた。確かに、この人はこれこそが仕事だ。それを見て「座った方が」と促すのはケチ以外の何物でも無いのかもしれない。素直に反省する。

「すみません」  
「いえ」

お互いにぺこりと一礼。

ところで、志貴崎さんの前にあるカードの束、これはトランプだ。黒と赤にそれぞれ分けられてふた山ある。黒いカードの束を志貴崎さんが取り、そこから4枚引いて等間隔によこ並びさせた。

そして、対面に座るのは野谷さん。赤いカードの束を取り、同じように4枚並べる。

「ふふん。リベンジマッチという奴だな」  
「誰のリベンジ？」

獰猛な笑みに口をゆがませる志貴崎さん。それを受けて涼しげに野谷さんは答える。その口調は軽やかであり、戦士の気品すら感じられる。

「もちろん一昨日のだ」  
「あれは圭の失点」

少なくとも女の子に向ける類いの物では無い笑みを見せる志貴崎さん。野谷さんはそれを軽く受け流しながら答える。

「しかし、お前はそれを上村のせいにする気はないんだろう？」  
「……」

ついに、悪の魔王か何かにしか感じられない笑みになった志貴崎さんを、野谷さんは沈黙で遮断した。お互いの緊張の糸がピークに達する。特に合図も何も無いまま、二人は同時に口を開いた。

「「いっせーのーせ」」

シャシャシャシャシャシャシャシャ！！

もうおわかりであろう。スピードである。誰がなんと言おうと、スピードだ。

お互いのカードの束、これは手札。と、眼前に広げた4枚のカード。それを場札として「いっせーの」「スピード」などのかけ声で、お互いの手札から一枚取り出し、お互いの間に置く、これを台札。そしてそのカードと、一つ違いの数字を素早く出し合い、カードの束が最初に無くなった方が勝ち。単純明快、誰もが小学校時代くらいから慣れ親しんでいる対戦ゲームだ。

シャシャシャシャシャシャ！！

ただ、俺の眼前で繰り広げられているこれは、決して俺が慣れ親しんだ『お遊戯』じゃない。もっと化け物じみた『ナニカ』ではない

「もう『スピード』じゃなくて『ソニック』って言った方が良くないじゃ無いか？」

「・・・言ってる」

「毎回思いますが上村さんは、つつこみが的確なようで少しズレていますよね」

俺がズレてるんじゃない。貴方達がズレてるんです。

そう思いながら、二人のゲーム進行に目が離せない。黒と赤とが高速に入れ替わり、アニメか何かを見ているようだ。



シャシャシャシャシャ・・・

と、二人の動きがぴたりと止まる。見たところ台札は黒の8と黒の5。志貴崎さんは置くことができないようだが、野谷さんが二枚ほどこの台札にカードを出せる状態のようだ。

張り詰めた糸のような緊張感があたりに漂う。まるで、刀をいつ抜刀して斬りかかるか読み合う、侍同士の決闘のようだ。見たことはもちろん無いが。

恐らく、俺には良く分からないが、手札、場札、台札、その三つの要素が整い、今まさに、これからの野谷さんの一挙動が、勝ち負けを決める『割れ目』となっているらしかった。二人とも真剣だ。志貴崎さんは、せめてこの真剣さの1/100くらいは勉強に注いだ方がいと思うくらい真剣だ。

ゴオオオオというジェット機の音が、何倍にも増幅されたように感じてしまう。

・・・ついに、野谷さんの指がピクツと動いたのが見えたあとはもう、俺には何が起きたのかがわからなかった。

シャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャダン！！

二人の手が高速で動き、同時に台札を叩いた。二人ともそれぞれ台札に手を置き制止し、二人とも場札に札は無し。・・・ドローだろうか。

「・・・負け」

「危なかった！」

どうやら志貴崎さんの勝ちらしい。お互いの間できっちり勝敗が分かっているのなら良いが、はたから見ているこちら側からすれば、

何がなにやら分からない。

志貴崎さんは、緊張の糸が切れたのかソファにドガァ！と倒れ込んだ。

すかさず客室乗務員（？）さんが志貴崎さんにお茶の入ったコップを渡す。流石この道のプロ。今の非常識を見ているも眉一つ動かさない。いや、そもそもこのジェット機自体、彼ら特別な異能者達を送り迎える専用ジェット機なのかもしれない。

志貴崎さんの額にはじんわり汗がにじんでいる。どんだけ集中していたんだ、あんた。

対する野谷さんは、汗一つ無く涼しげだが、心なしか悔しそうだ。

「ま、何はともあれ二勝したわけだ」

大人げない笑みを浮かべて、志貴崎さんは野谷を見る。

「・・・次は、・・・こうはいかない」

「ふふん。まあ、楽しみにしておこう」

まあ、トランプ一つでこれだけ真剣になれるのは良いこと・・・なのかなあ。

と、野谷さんは乗務員さんに何かお願いをしているようだ。乗務員さんの顔が一気に驚愕の表情となりながらも、頷いて一旦奥へと下がって行った。

今度はなにが始まるのだろうか。

野谷さんは、不敵な微笑を浮かべて志貴崎さんを見ている。早くもリターンマッチということなのか。

戻ってきた乗務員さんの手にあるのはトランプの箱が4箱。ま、

まさか・・・。

「さあ、次の勝負を」

「・・・・・・・・」

流石の志貴崎さんも顔が引きつっている。野谷さんはそれを満足そうに眺めて、箱を開けて中身を出していき、山となったカードを一気に振り分ける。

元々きれいに整理されていたのだろう、まずジョーカーを排除し、軽くめくって赤と黒の境界を見つけたところで、指を入れて振り分ける。単純な作業であるが、これを一瞬のうちにやってしまうのだから恐ろしい。一気に赤と黒、4セット分のトランプを振り分けられた山が完成する。

次にさっきの勝負に使用したトランプふた山を野谷さんは拾い上げる。まさに、目にも止まらぬとしか表現できない動きで、こちらも赤と黒に振り分けて行く。赤と黒が混ざり合ってるのでいちいち選別しないといけない・・・はずなのだが。

そしてついに『それ』は完成した。なんだろうこれ。見たことないほどの高さにトランプがつみあがっている。

「良いだろう。勝者はいついかなるときも、挑戦を受けなければいけないのだ」

「流石」

もう既に二人の世界を作り上げてしまっているようだ。また「シヤシヤシヤ」と、解説のしようもない勝負が繰り広げられる事が予想されるため、彼らの事は放っておいて山城さんと鬼谷さんの方の輪に入れて貰おう。

山城さんと鬼谷さんはパンフレットを広げて観光する場所を選ん

でいるようだった。

「やっぱさー海だよねー」

「海ですよねー」

やはり思うところと言えば、沖縄〓海だ。青い空に青い海。使い古されたテンプレートの沖縄代名詞。そんなわけでどこの海にいうか。という話題で盛り上がっているようだ・・・が。

「ビーチすげえ多いな」

「だよねだよねー」

「この縮図で沖縄全てのビーチを書くと、文字が潰れてぐちゃぐちゃになりそうですね」

二人が広げているパンフレットには、でかでかと沖縄の地図が書かれていて、代表的なビーチだと思われる名前が書かれている。ここに書かれているだけで20カ所以上ある。それも名前だけしか書かれていないので、どういうビーチなのか良く分からない。トロピカルビーチ、パイナップルビーチ、さんさんビーチ。もうとにかくビーチ。

ちなみに、ちゃんと指定されていないところで泳ぐと、危険な生物に襲われる可能性があるため、絶対にちゃんと整地した所で泳ぐこと。とパンフレットに書かれている。

僕たちは良い子なので勿論ちゃんとしたビーチで泳ぐつもりだ。若干一名無視してどこかに行きそうな人が居るが。

至る所、赤丸だらけで沖縄が発疹でも起こしているように錯覚してしまう・・・と、そこで一つ思いつく。

「タクシーだ」

「え？」

「タクシーの運転手に、沖縄で一番綺麗なビーチはどこですか？つて聞くのは？」

沖縄中を走り回って実際に仕事している、タクシー運転手に綺麗なビーチを聞けば、穴場的な場所を教えてくださいるんじゃないだろうか。

「な、なるほど」

「俺たちは5人だから、タクシーで移動は難しいけれどな」

「柵の前に座らせて、後ろに残り皆乗ればいいんじゃないかなー」

確かに、俺は肩幅は小さい方だし、可能ではある・・・が、長時間女の子とくっつくというのは、その、気恥ずかしいものが若干、あります。

「ちょっと狭そうな気がするな」

「だったら、圭の膝の上に卯月を乗せれば？」

「ちょ、な!!」

「あら、羨ましいですね」

にやにやと山城さんがいたずらっ子の顔になる。鬼谷さんも、そんな不敵に笑わないでください。

シャシャシャシャズシャアア！

横で『ソニツク』をしていた野谷さんが盛大に手を滑らせる。その間に志貴崎さんが全てのカードを処理し終えたらしい。

「・・・・・・・・ミキ」

顔を真つ赤にした野谷さんが、山城さんを睨む。山城さんは目を反らせてその視線を受けようとしない。

「・・・勝つてたのに」

「ふふん。どうだか」

恨めしそうにカードを睨む野谷さん。

志貴崎さんは、口では余裕そうな事を言っているが、傍目に見てもかなりの神経を消耗していそうなのがわかる。額の汗の量が半端ない。

「よろしいでしょうか」

「はい？」

と、そこで客室乗務員さんに声をかけられた。

「お話の途中だったので、口を挟むのを遠慮させていただいていたのですが、志貴崎様の指示により、車を手配させていただいております。運転手も、当然おりますゆえ、その者に観光などの案内を指示していただければよろしいかと」

「えっ車!？」

いくら何でも用意がよすぎる。もしかして志貴崎さん、昨日の段階で、既に沖縄行きを自分で勝手に決定して指示を出していたんじゃないか？

意外と策士なのか、それとも自分の欲求に忠実なのか・・・。

「まあ、海などいくらでもある。沖縄を一周しながら綺麗な海を見つけてそこで泳げば良い」

志貴崎さんが汗を拭きながら答える。

「なるほどっ！沖縄一周かぁ」

山城さんはパンフレットの地図を見て、道路の線を指でなぞっている。一周ツアーをシミュレーションしているようだ。

「沖縄は、県全体に観光名所が点在しております。そのまま道を通行いたしますれば、各所に観光地の看板が掲げられている事かと」  
「そうなんですか」

鬼谷さんも、パンフレットを覗き込む。女の子二人で道路をたどり、色々想像を膨らませているようだ。

俺もパンフレットを手に取り、沖縄についての前情報でも仕入れておくしよう。こういうことは旅行のワクワク感を煽るのにとっても大事なことだ。

日本という国において、沖縄はなんとも特殊な県となっている。第二次世界大戦を発端とし、200年以上アメリカの軍基地がその土地の約10%も占めている。一時期海上へ軍基地を設立し、本土からの撤退も計画されたが、それは美しい自然を汚す事へと繋がるとして反対に遭い、今も昔と変わらずアメリカ軍基地はそこに根付いている。

亜熱帯の気候に恵まれたため、色々な種類の果物、動物を見る事ができる。「沖縄といえば海」というのが一般的かもしれないが、植物園や、ジャングル、岩石など沖縄特有の観光資源も沢山ある。

「沖縄方言」として認知度の高い「琉球語」と呼ばれる、この地

方独特の言葉があるが、それも残念ながら第二次世界大戦が端を發し、世代間での継承がなされなかったため、完璧な「琉球語」を使える者は今はもうほとんどいない。

現在残るのは「ウチナーヤマトグチ」と言われる、簡単な沖縄方言と標準語を混ぜた物が一般的となっている。簡単にマスターできるため、がんばって覚えて帰ろう。

珊瑚礁の減少や、ヤンバルクイナの絶滅、イリオモテヤマネコの本格的絶滅危機から知られるとおり、今なお沖縄の自然の減少の歯止めはできていない。そのため新たな観光資源の開拓のため、沖縄は日本で唯一「カジノのある県」ともなった。健全なギャンブルを常夏の島では是非楽しんで貰いたい。

こんな感じた。マイナスイメージも挙げたのは、パンフと同時に携帯で色々調べてみたからだ。

「健全なギャンブル」ってなんだよ。とかは置いておいて、所狭しと並べられる青い海の写真から始まり、蛍光色の魚や果物、天をつくような岩石……。どれをとってもまさに『常夏』を全面にアピールしてきている。

「irisさんとかにも見せてあげたいねえ」

山城さんがぽつりとつぶやく。そうか、irisさんは部屋の中にいるから見れないのか。確かに少し残念な気がするなあ。

「……できる」

「はい？」

野谷さんは学生鞆から何かを取り出した。トランプのダイヤをそのまま立体にしたような形。これは……。8面体カメラ？



野谷さんの手に置かれてる8面体カメラはその名の通り、八つの面にカメラを一つずつ搭載した物だ。対座が付いており自立できるようになっている。使い方としては、空中に投げて360度パノラマ写真を撮ったり、防犯カメラとしてよく利用される。

よく見ると頂点に対空間投影プロジェクタが付いているようだ。これだけ小さいのは初めて見た。

野谷さんはオーク机に置いて、それを起動。かすかな駆動音と共にカメラが起動。広範囲認識できる魚眼カメラが、それぞれの死角をカバーし周辺情景を認識、プロジェクタが起動して空中に映像を映し出した。丸い球体……？

「お帰りなさい。皆さん」

このいつもの挨拶はirisさんだ。ということはこれ（彼女？）がirisさんなのか。声は勿論外見を見るのも初めてだ。声は野谷さんの声にちよつと似ている感じで、落ち着いた大人の女性のよな感じがする。

「おー！irisさんだー！」

「ほほう！そんなことができるのか」

「こんな小さなプロジェクタ初めて見ました」

「まあ、お帰りと言われるとちよつと違う気がするが」

「これは、プロジェクタでの接続ですね。と言うことは、皆様がいつも『部屋』を利用する方々なのですね。対面では初めまして。『iris』です。今後ともよろしくどうぞ」

球体なので良く分からないが、お辞儀をしているようだ。皆でirisさんに改めて挨拶と、簡単な自己紹介をする。目的地まではあと20分。そうすればいいよ俺たちは沖縄へと上陸する。

#### 四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「ついたー！！！！！！！！」

「沖縄ー！」

なんだかんだいいつつ、俺のテンションはマックス！山城さんもテンションマックス！ひゃー！沖縄だー！

生まれてこの方、本土から遠く離れた離島にある都市から一步も出たことが無い俺には、そもそも海から外へ出るのが初めて。そしてそこが沖縄！テンションがあがって仕方が無い。

ジェット機から降りると、都市で嗅ぐよりも、濃い海の臭いと湿った熱い空気が俺たちの全身を包む。

放課後になってからの移動のため、時間は7時。9月なのでまだ辺りは明るい、そろそろ暗くなる時間でもある。青空に迎えられないのが残念だが、それは明日の楽しみに取っておこう。

空港の滑走路内のため、まだ周りには沖縄らしいものは一つも見当たらなかった。

にしても今日の朝自宅から学園に勉強しに出たと思ったら、そのまま帰宅せずに沖縄・・・なんとも濃い一日である。いや、そもそもこの人達に出会ってからと言うもの、濃すぎる。

俺の人生の大体2年分くらいの出来事を三日に圧縮しても、この三日間くらい濃い物にはならないだろう。彼らとの出会いを喜ぶべきか、悲しむべきか。

いや、考えないようにしよう。

ジェット機は小さいので、ジャンボジェットのように空港へ直通

で入ることはできない。バスで空港まで送迎してもらう。あたり一面コンクリートの滑走路を少し歩いてバスに乗り込む。普段は飛行機が動き回る所に足を着けるといいうのは、なんとも不思議な気分になった。

ちなみに、俺と志貴崎さんはカバンをジェット機に預け手ぶらだ。勉強道具しか入ってないしな……。きっと志貴崎さんは、勉強道具すら入ってないぞきつと。

女の子達は流石にカバンに色々入っているのだろう。皆手に持ったり肩にかけたりしている。それでも、旅行に持って行くには場違いな入れ物に変わりはない。でかいトランクケースとかなら、持とうか？と進み出るのだが、通学に使うカバンで、しかも女の子の持ち物なので、流石にそれも要らぬお世話だろうと考えた。

バスがゆつくりと進みだす。「めんそーりよ、おきなわ」と運転手がスピーカー越しに挨拶してくれた。浮かれた俺たちも「ー」「めんそーれー」「ー」と返す。

後で教えてもらったところ、『めんそーれ』は『ようこそ』という意味らしい。つまり「ようこそ」を「ようこそ」で返してしまっただけだ。ミーハーこのうえない。だがそれこそ旅行だろう？と開き直る事にしよう。

移動するバスの窓から、外の景色を眺める。バスは、飛行機が並んで整列しているターミナルへ、ゆつくりと移動中だ。

携帯で見た天気予報によると、今週は晴れと曇りが半々といったところであった。降水確率0%。沖縄まで来て、雨は悲惨なのでひとまず安心。

「卯月、乗り物に乗りながらPC操作をすると酔いますよ」  
「……わかった」

バスに揺られながら、タブレットPCをいじっていた野谷さんに、irisさんが注意した。野谷さんは素直に従っている。親子みたいでほえましい光景だ。

ちなみにirisさんは、野谷さんの制服の胸ポケットに入っている携帯から、音声通話のみで常時接続中だ。8面体力メラは移動するのに面倒なので、こういう形となった。

バスが空港へと到着する。沖縄本島唯一の空港、那覇空港だ。空港内へ入ると、手荷物しかないので荷物受け取りはスルー。さつさと空港の待合ターミナルへと足を向けた。ここで、今日からお世話になる車と、運転手さんにご対面になる予定であった。

「シキサキ 様 ご一行」という看板を掲げた人はすぐに見つかった。少し白髪の混じった、黒い髪を無造作に流し、肌の焼けた中々にナイスミドルさんだ。もっとピシッとしたスーツで決めてる人かな、とこれまでの道程を思い出して身構えていたのだが、色鮮やかなアロハシャツに、ジーパンという出で立ちであった。なんとも沖縄らしい見た目である。

「志貴崎だ。よろしく頼む」

「金城 学と申します。よろしく願います」

きれいで淀みのない完璧な標準語である。ちよつとがっかり。もつとこつ、沖縄っぽい、なんかこつ、あれな感じを期待していたのに。

そう思ったのは、ほかのメンバーもそうだったようで、その反応を見た金城さんは大声で笑った。

「方言じゃなくてがっかりですか。そうですか」

「いやあ、やっぱこう、期待するじゃないですか」  
「はっはっはっは」

金城さんはひとしきり笑った後、「じゃあどの位のレベルでいきましょう」と言ってきた。

「レベル？」

「5まであります」

ふむ？意味が良くわからないが、どうやら方言でしゃべってくれらしい。レベルの基準は分からないのでとりあえず。

「じゃあためしに5で」

「はいさい！めんそーりよーおきなわ。はじめていうおながびら、わんねー金城いちよいびーん。よたしくおにげーさびら。うちなー料理やーでーじまーさいびん、ちむどうんどうんしてるといいさー」  
「・・・レベル1をお願いします」

身振り手振りで自己紹介してくれたらしいが、まったく意味不明である。素直に降参してレベルを最低にしてみよう。

「はいさい！めんそーれー沖縄。始めまして、金城やいびーん。沖縄料理はデージ超おいしいから、楽しみにしてるといいさー」

「・・・」  
「おお！」「・・・」

おー。なんとなく分かるレベルまで落ち着いた。これくらいで十分である。

「ちなみにレベル1とレベル5しかないさー」

「極端だな！！」

いたずら成功、という感じで金城さんが豪快に笑う。やばい、どうやら金城さん、基本お調子者キャラのにおいがする。どうして俺の周りにはこうにも常識的な人がいないっ。

皆で自己紹介をしあい、とりあえず空港から出発する事にする。

「この車さー」

「わーい」

山城さんがダッシュで乗り込む。小型バスというのか、座席三列でゆったり座れるファミリーカーといった風体の車だ。後部座席は向かい合わせとなっており、テーブルがないがジェット機と同じ配置となっていた。

「どーせ遊んで汚れるから、汚れても良い車が一番の高級車にきまつてるさー」

「その通りだな」

そういわれて良く見ると、タイヤはオフロード仕様となっており、ボディは下の部分に汚れた泥が跳ねたりしている。・・・どんな道を走るつもりだ金城さんは？

車内も段差がなく、車のシートはフカフカしているが合成皮を使つててつなぎ目がない。金城さんの言うとおり、汚れたままで乗り込んでも大丈夫なように設計されてる車だった。気にせず遊べ、という配慮なのだろう。

「でー？どこいくばー？」

「本日以降の分の着るものがありません。補充をお勧めします」

「そうだな、近くにデパートは無いか？数日分の下着と水着、服を買おうと思う」

irisさんの助言に同調した、志貴崎さんの飛ばした指示に、そういえばと気づく。泊まるとして、下着や服をどうするのか考えていなかったな。別に旅行用で着るだけなので、安物の量産品で良い筈だ。ささと買い物して、金城さんのお勧めの所で夕食、ホテルへ行く。というプランを皆で考え、車はデパートへと出発した。

「あんまり水着選ぶ時間ないねー」

「まあ、仕方ないだろうな。それとも水着は明日選ぶか？」

やっぱり女の子、時間配分が厳しいスケジュールの中でも、やはり水着は厳選したいようだ。それならば、水着を購入する時間は明日へと伸ばしたほうがいいのかもわからない。

「いやっ明日は時間がゆるす限り海に行きたい！」

「そうですね」

「……ん」

女の子三人はなにやら作戦会議。どうやら、下着、服は適当な物をさっさと購入、残り時間を全て使い、かわいい水着を選ぶ事にしたらしい。ううん、どうしても位置が近いので、聞こえてしまう。なんとも甘酸っぱい気持ちになる。

「ま、女性陣が水着を選んでも間は、おとなしくカフェでも時間つぶすかな」

「そうだな」

「ふふん。悩殺してやるんだからね。卯月なんて結構おっぱむぎゅ

う」

山城さんの言葉が途中で途切れたのは、野谷さんが顔を真っ赤にしながらマツハで山城さんの口をふさいだからだ。そっか、おっぱかー。

「男はかりゆしウェアを選べばいいさー」

「かりゆしウェア？」

「これさー」

金城さんは運転しながら、自分の服をつまみ上げている。なるほど、あれはアロハシャツじゃなくてかりゆしウェアというのか。沖縄独特の衣服らしい。

金城さんの解説によると、かりゆしウェアは沖縄特有の技術、紅型をあしらった着物をシャツにリメイクしたもので、昔は古くなつた着物を使用して作っていたものが、広く広まった物らしい。200年程度前に地球温暖化、クールビズ計画の一環として、沖縄の正式な場で着て良い衣服としても設定された。

なので沖縄の偉い人も皆かりゆしウェアをきている。テレビの記者会見がカラフルこのうえない事になっているらしい。むむ、見てみたいなその記者会見。

「じゃあ俺もかりゆしウェア買おう」

「ふふん。圭は小さいからな。こういうのは俺みたいなのが似合うだろう」

「チヨコレート柄のかりゆしウェアは無いと思いますよ」

いやいや、俺は平均以上に平均で少し童顔かもしれないが、さすがにそれはないだろう。というか志貴崎さんと比べるといいたい。そしてirisさん。「もちろんケーキも」とか言ってるが、そん



なボケは要らない。

「わかってる。沖縄だからな。魚柄だ」

「なるほど、流石椛ですね」

そういうことじゃねー！ああ！もう！誰か俺に常識的な友人をくれ！

志貴崎さんとirisさんは「いや、鳥柄がいいか？」「魚の方が沖縄らしくありませんか？」とかやってる。もうツツコミをするのも疲れてきたので、窓の外の景色を眺めて精神の安定を計る事にする。

あたり一面住宅や店などが所狭しと並び、なんともカオスというか、アジア！というごちゃごちゃした印象を受ける。普段、計画的に設計された都市に住んでいると、こういう光景にすさまじい違和感を感じる。あの路地の奥に入ると戻ってこれる気がしない。

空も所狭しと電線が這い回り、まさにカオス。一応観光地域は地中埋設によりすっきりした見た目をしているらしいが、少しでも道をそれるとこういう光景が広がっているらしい。

と、景色がいきなり一変する。

一面のフェンス。その向こうには青い芝が広がり、一階建ての正方形もしくは長方形の白い家が並んでいる。今まで見た光景とはまた180度雰囲気が違う、異様な光景だ。

「そこが軍基地さー」

「これが……」

沖縄県というこの県の10%、沖縄本島だけで計算すると実に1

7%をも占める第二次世界大戦の爪あと。陽気なはずの島国の中に、異常な存在感を見せつけ続ける白いフェンスに緑の芝生。

広い庭に一階建ての建物。道路はきれいに整備され、芝生も背がそろっている。あまりにも内と外、その光景は違いすぎる。もつとも、どこが内で、どこが外なのか、観光客にすぎない俺には、その判断をする資格はない。

ある人は言う。軍など要らないと。しかし沖縄はその軍のおかげで、軍の中で仕事をする事ができる人がおり、軍のおかげでさまざまな援助を受けられる人がいる。軍と沖縄、その二つは長い歴史の中で完全に結びついてしまった。この問題に対処できるのは、沖縄の人々以外に居ない。そして、答えを先伸ばしし続け、今日に至った。

今現在に至ったその経緯を、その判断を、その決断を、俺達は知らないし、これからも知ることは無いだろう。

「軍の人によー、ぎぶみーちょこれーと！！ってゆーとチョコレートをくれるさー」

「何っ」

「いや、冗談だから、戦時中の話だからそれ、志貴崎さんも反応するなよ。卑しすぎるぞ」

金、沢山持つてるだろうが。何でこの人の、食い物に対する執念はこんなにもすごいんだ？

そんなバカ極まりない話をしていると、車はデパートについた。見たこと無い名前だが、沖縄にしかないデパートなのだろうか。

とりあえず店内に入ったところで男性陣と女性陣で分かれて、9

時にはまたこの位置に集合する事を確認しあう。

「下着はこれでいいだろう」

「そだな」

早速二人で適当に下着を買って行く。とりあえず三枚ずつで問題無いはずだ。その流れでＴシャツ。汗をかいて着替えるかもしれないのでこっちはちよつと多め。ズボンは二人ともちよつとだぼだぼした裾の短いズボンにした。

「靴をこれにしたらいいさー」

金城さんが手渡してきたのは草履である。

「草履？」

「そうさー。靴を履くと蒸れるから草履のほうがきもちいいさー」

なるほど、一理ある。ためしにはいてみる。足にぴったりと吸い付き、かかとも浮かないので、靴のような感覚で歩ける。走ったりしても問題なさそうだ。つま先が露出しており、確かに蒸れない。海の中もこれでいけるようだ。

値段を見てみる………、見なかった事にする。

「良い草履だ。これにしよう」

「確かに。これはいいものだ」

二人とも気に入ったので購入。しかし、似たような服装を購入したので兄弟みたいな出で立ちになってしまった……が、まあ女性陣も似たような服装になってると予想される。どうせ仲間内にしか見せないの、格好をいまさら着飾ったところで、俺の評価が上

下するわけもないだろ。

続いてかりゆしウェアの方を見に行く。漏れなくカラフルである。地味な色であっても、柄は凄く複雑なものがほとんどで自己主張しまくりだ。

ひとまず安い量産品らしいものを見てみる。生地も薄く、プリントといった印象を受ける。そのまま物色を続けていると、中々良い生地のかりゆしウェアを見つけた。柄も結構好みだ。目にうるさくない程度に明るい青い下地に、紺でハイビスカスや鳥が飛んでいる。値段は勿論見ない。見ないほうがいいと脳内で警報が鳴っている。

志貴崎さん？彼は勿論、魚柄を選んでいた。「おいしそうだろう？」とか言ってやがる。もう何も言うまい。

その後も、デパートを回り時間を潰す。途中、水着を購入したわけだが、志貴崎さんが、ブーメランな水着を買おうとするのを必死に止めるというハプニングはあったものの、必要な物はこれで全てのはずだ。

志貴崎さんはこれから夕食を食べに行くというのにアイスなんかなめてやがる。

「流石に腹が減ったからな」

そういえば志貴崎さんはジェット機に乗ってる間も物を食べていなかった。沖縄料理のためにある程度我慢していたのだろうか。

そうこうしている間に時間も9時だ。指定の場所へ向かうと女性陣が既に待っていた。それぞれ手にデパートの袋を持っていた。

「時間通りに全部買えたねー」

「……ん」

買い物をしてご満悦な山城さん。この表情を見てると水着選びは無事終わったようだ。

「ふふふ、明日を楽しみにしててくださいね」

不敵に鬼谷さんが笑う。ど、どんな水着なんだ・・・ごくり。

「それじゃ、ご飯食べてホテルに行くさー」

ちなみに、夕食を食べたのは、現地の人たちが利用するような食堂のようなお店であった。まさに沖縄の母の味だというのだろうか、素朴な味にこれが沖縄のあじかぁ。と素直に感動しながら食べた。おいしかった。

どれもこれも色とりどりの色に彩られ、沖縄そばを始め、焼き魚、チャンプルー、豚の煮物、サラダ、どれをとっても食べたこと無い見たことの無い料理ばかりであった。

細かく描写しないのは、リミッターを解除した志貴崎さんがすさまじい量を食べたので、料理の描写をするだけですさまじい量を使いそうだからだ。どんだけ我慢してたんだって話だ。

四話 学業は大事、青春はもっと大事？（前書き）

4500PV、ユニーク500、ありがとうございます

#### 四話 学業は大事、青春はもつと大事？

「ふぁー……」

俺の間抜けな声が漏れる。

夕食を終え、俺たちはホテルについた。時刻は既に11時を回っている。

学校の後、飛行機での移動をし、デパートで買い物をして、夕食を食べ、車にて約一時間の移動。強行軍すぎる。体はヘトヘト、しかし旅行のハイテンションと、ホテルの豪華さに俺たちのライフゲージは満タンである。

『なきじんそん今帰仁村』の美しい海沿いに、帝王の如くそびえる約40階建ての高層建造物。一階あたりわずか6室しか部屋が無く、廊下にはこれでもかと絨毯が引かれている。

もちろんロビーにはシャンデリア。悠然とくつろげる、待合スペースのブレイクメニューを覗き込むと、一杯のコーヒー2000円である（それより下のメニューは俺には恐ろしすぎて見ることできなかつた）。

展望フロア兼レストランからは、沖縄の美しい景色が一望できる。そんな中、デパートのやすっぱい袋を提げて、どこの馬の骨かもわからない学生達が紛れている。もちろん俺たちの事だ。場違い感がありすぎて困る。

もう口が開きっぱなしである。え、ここに泊まるの？

「今日は遅いからゆつくり寝て、10時くらいに来ようかねー」

俺たちを降ろした金城さんは、そう言いながらホテルを出て行っ

てしまった。いや、10時くらいって何時だよ。アバウトすぎるよ。これがうちなーたいむというやつか。

「俺の予想だと11時くらいに来ると見た」

「圭は甘いね。私は、あの人は10時にタイマーをセットしてて、10時半にもそもそ起きて、11時くらいに出発するタイプの人だと見た」

「なんでそんな細かいんだよっ」

優雅なクラシック流れるロビーに、俺たちの漫才は想像以上に響く。自重しよう・・・。

「志貴崎だ」

「はい、お待ちしておりました。鍵でございます。お荷物を」

「いや、良い。自分達の衣服だからな」

「左様で、ではお部屋まで案内いたします。」

志貴崎さんは、そんな俺たちのやり取りを置いてさっさとチエツクイン。志貴崎さんに続いて、俺たちもエレベーターホールへと向かう。うう。周りからの視線が痛い。・・・考えすぎだろうか。

エレベーターへと入る。俺からの位置だとホテルマンさんの背中での階のボタンを押されたのか分からない。まあ、最上階以外はその部屋も同じだろう。けどできるだけ高くて海沿いがいいなと思う。当然だよな？

俺たちを乗せたエレベーターは、どんどん上に昇っていく。扉の上にあるディスプレイをわくわくしながら眺める。

1、4、6、9、10、14、17、お、結構上だなあ、これくらい上げれば景色もよさそうだ。

20、24、27、29、32、うお、結構たかいんじゃないの



か？これ。

34、36、・・・。

38、40、展望フロアを越えた。もうこの時点で俺の嫌な予感センサーがびんびん。

41、42、43。

ポーン

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

そうです。最上階です。いや、もうそんな気はしてたよ。流石に。

エレベーターを降りるとすぐに扉がある。ここからもう部屋なのか・・・。

志貴崎さんが、躊躇無く扉を開け放つ。待つて！待つて！まだ心の準備が！！あー！！！！

扉を開けた瞬間、飛び込んでるのは夜景。遠くに見える対岸の光がちらちらと瞬いている。そして、地面から発せられるオレンジ色の光は、アメリカ軍基地の光か・・・夜でもすさまじい存在感だな。皆で中に入り、細かく確認していく。ほとんどの部屋が区切られず、開放感にあふれている。当然のごとく、全ての壁は大きな窓があり、ホテルの周辺をほぼ一望できる。

まず大きなリビング。かなり大きな低めのテーブルを囲むようにソファが置かれ、その先には大型テレビ。バーもある。それでかなりの範囲の場所を取っているが、まだまだ余裕がある。この広さが無駄すぎである。

寝室はリビングから繋がっており、カーテンのみで仕切られるようになっていて。二つだから男女で分けて寝られるな。しかし、ベッド一つに四人くらいは余裕で寝れそうだな。部屋自体もかなり広

いし。これベッドあと三つほど入るんじゃないのか、この部屋だけに。

そして当たり前に、巨大なベランダ……というかテラス？付き。あとはトイレが3つに、洗面台が二つ……風呂は？

「風呂はここだ」

志貴崎さんが指を指すところには扉の無い入り口が二つ。ここもカーテンで仕切れるようになってる。中は、更衣室だろうか？風呂はその向こうか。

「露天風呂だ」

「露天風呂！？」

「いいですねえ」

「おー」

あまりの豪華さに何も考えられなくなる。ざつと見回ったところ部屋は広いがホテルの面積から考えて、まだまだ余裕はありそうだ。風呂も相当でかいと思われる。どんだけだよ。20人くらい余裕で泊まれそうだよ。そう思ってクローゼットを開けたら、布団も出てきた。なるほど、大人数でも泊まれますよって事なのか。用意が良いなっ！

女の子達は、まあこういった所も慣れているのだろう。わくわく、程度のテンションのようだ。

ホテルの二階と三階には、スパもあるようなので明日くらいにはそこも利用しようかな。

さて、部屋の凄さに目を回しつつも、流石に皆疲れを感じているので、さっさとお風呂を楽しんで寝ちゃおう。という事になる。

「どっちが男？女？」

入り口には特に違いは無い。

「どっちでもいいじゃーん」

山城さんがすいと右の方の入り口に入っていったので、俺達は自然と左の方へ。脱衣所もやっぱり豪華だ。この木枠、一本物の木から削り取ってるんじゃないや……。

「すっごいねー！」

山城さんの声が聞こえる。……ってええ！？仕切りの壁ねえ！衣類置き、棚の上が空洞になっている。

「風呂はもつと凄いぞ」

「え！？柵！？あ、壁ないのかー」

「ちょっと恥ずかしいですね」

「……ん」

ちよつとなんだ……。

向こうから、がさごそと衣擦れの音とか普通に聞こえてくる。この人達の神経は本当理解不能だ。がさがさ、パサッ、ガチャとか、小さい声でキヤーとか聞こえてくる。うぐつ。

妄想が妄想を呼ぶこの状況と、恥ずかしさに耐えきれなかった俺は、さっさと風呂の方へ行く事にした。ささっと全裸になって、腰にタオル一枚だけ巻く。

志貴崎さんはとくに準備してお風呂の方にずんずん進んでいる。俺もそれに続く。ちなみに、ちゃんと志貴崎さんも腰にタオルを巻いている。ここらへんの常識はあるのか。

「おーすげー！」

プールかっというくらい、でかい風呂がそこにはあった。

天井無しの完全な吹き抜け（後で調べると、屋根を出し入れできるようにうだ。ブルジョアすぎるわ）、風呂はマーブル色の黒い一枚岩を使っているのだろうか。底につなぎ目を感じられない。そして、眼前に広がる沖縄の夜景。素晴らしすぎる。

ガララッ

「おー！本当だー！夜景きれー！！」

山城さんの興奮した声が後ろから聞こえた。俺もこの光景にテンションが上がりまくっていたので、後ろを振り向いて同調した。

「すげーよなー！朝風呂とかすげーきもちよs・・・」

そう、俺は後ろを振り向いて同調した。

そこには勿論、女の子三人。

え？

「「ぎゃー！！」」

「ふふん。どうだ。凄いだろうこの景色！」

いや、志貴崎さんそんな事もうどうでもいい！！どうでもいいから！！

鬼谷さんは、体をバスタオルで覆っていた。しかしはつきりと、体のラインが見えてしまう。くびれた腰に、大きな胸。銀色の髪がなびいてとても綺麗だ。

野谷さんは、意外にも胸が・・・、着やせするタイプか。

そして一番に乗り込んできた山城さんは、ツインテールをおろし、小さなタオルを頭に乗せていただけであった。つまり、全裸・・・。顔を真っ赤にして、体を手で覆ってしゃがみこんだ。

「やー！！！！」

「む？どうした？はいらんのか？」

もうここまでくると志貴崎さん、あんたすげーよ。

「す！すまん！！すぐ出て行く！！！！志貴崎さんはやく！！」

「む？・・・わかった」

疑問符浮かべた志貴崎さんを、引っ張って脱衣所へ。速攻で着替えて2階のスパで体を洗うことにしたのだった。体を洗っている最中、志貴崎さんは「皆で入れれば気持ちいいと思ったんだがな」とか言っていた。この人男女の概念がないのだろうか。いや、無いんだろっな。

というか、脱衣所わけんなよ。わかんねーよ。と思ったが、どうやら混浴かどうかを選べるらしかった。志貴崎さんの独断によって混浴にされていたらしい。彼の事だから勿論「皆で入った方が楽しい」という理由以外には無い。

さつさと風呂を済ませ、部屋に戻る。男の風呂より女の子の風呂つてのは長いもので、ソファーに腰掛けて皆を待っていた。ちなみに、俺と志貴崎さんは浴衣に着替えている。

「うう、もうお嫁にいけない・・・」

山城さん達がお風呂を終えて出てきた。とりあえず謝る。

「すまん。疲れて頭が回っていなかった」

「・・・んーん、椀に全て任せた私がバカだった」

山城さんはしょぼくれている。どうやら、ホテルの手配は沖縄に来たことがあるという志貴崎さんが「任せろ」と言ったので、任せていたようだ。

「私ももうお嫁にいきません」

「・・・私も」

皆浴衣を着ており、濡れた髪が色っぽい。

「ふむ？良く分かんが、まあ、それならば俺の所に来ると良い」

志貴崎さんはやはり、自分がしでかした事をよく理解していない。そして、そんな器の広さ見せなくて良いから。

その反応を見た山城さんが、ガクツと肩を落とす。そしてゆらりと、顔を上げた山城さんの顔は、女子高生のそれではなかった。慌てて顔をそらせて山城さんを見ないようにする。

「椀、正座」

「はいっ!!」

それから30分ほど、山城さんの前に、へばることとなる志貴崎さんであった。

「どっちのベッドを使う?」

山城さんの演技は、いつまでも志貴崎さんをへばらせるわけにもいかないのです、山城さんがある程度ヒートアップした所で止めてもらった。

今の問題は、この巨大なベッドのどっちを男、どっちが女の子が使うか、という事である。志貴崎さんと同じベッドなのは、寝てる間に引きちぎられそうで怖いが、まあ・・・大丈夫・・・だよな?

「ん?ベッド?修学旅行なんだから、ここは川の字じゃない?」

山城さんはそう言い終わらないうちに、クローゼットから布団を取り出そうとしている。どうやら皆で並んでふとんで寝ようと言うことらしい。

「え!?!ええ!?!まじか!」

「それは楽しそうですねっ」

「そうだな。それがいい」

「……ん」

俺が狼狽している間に、皆山城さんの案に乗り、布団敷きが始まった。スペースは十分すぎる以上に十分ある。

絨毯の上に敷き布団。異様な光景だ。

まあ、皆がそういうならいいか。ホテルの最上階スイートまできて、やることは結局修学旅行に終始する辺り、俺たちらしいと言えば俺たちらしい。

「順番だが、どうする？」

「……柊のとなり、……や」

「ふふん、大丈夫だ。寝てる時も力の制御はできる」

だからそういつつ筋肉うねうねさせんなよ。こえーよ。そんな訳で、俺たちの命がけのじゃんけんが開始される。

「……じゃーんけん！！」「……」

皆真剣である。もうバカばかりだ。……後で思ったけれど、野谷さんリミッター付けてたよね？

結果、端から志貴崎さん、山城さん、野谷さん、俺、鬼谷さんとなった。

「……圭」

山城さんが、涙目で俺に訴えかけてくる。女の子の涙は、胸に来る物がある。だが、それとこれとは別である。俺は心を鬼にする。



山城さん、しんでくれっ

「変わらないからね」

「・・・・」

山城さんがふくれっ面になる。

と、突然俺の腕に山城さんがすがってくる。浴衣越しのせいで、女の子の柔らかい体の感触がダイレクトに感じられる。

「けいっ」

ぐらりと、俺の脳が揺れた気がした。やられたっ！山城さん幻術使ってやがる！！

山城さんの顔から目が背けられなくなる。

「私の裸見た変わりにさ」

さらに、腕にからみつく山城さん。胸が押しつけられる。山城さんの胸の感触に気が遠くなり、浴衣がじゃっかん崩れ、胸の谷間が、ダイレクトに目に飛び込んでくる。

山城さんの足が、浴衣の中からすらりと伸びて、俺の両足の間に入り込む。山城さんの体温を、直に感じる。

これは、淫靡な夢。夢と夢の間にある、清く淫らな服従の演目

山城さんの言葉にうなずいてしまいそうになる。いや、うなずかないといけない気がする。・・・そういう役割を、割り振られたような気がしてくる。

頭にもやのかかったような、絶対服従しなければいけないような

！。

山城さんは、とどめとばかりに、俺の腕を下に引いて、俺のバランスを崩した。操り人形のように、素直に膝立になった俺に、上から被さってくるように、山城さんの顔が近くなる。

目が背けられない。

どんどんと山城さんの顔が近くなり、吐息がおれの肌をくすぐる。

「ねえ」

山城さんの髪が俺の顔にかかる。濡れた髪感触に、髪の匂いが、俺の脳裏を刺激して止まない。

唇と唇が近づいていき、俺の視界にはもう、山城さんの瞳しか写らない。闇よりも深い黒。その向こうに淫靡な揺らめきの炎が、見える気がした。どこまでも深く、どこまでも濃い。

俺が俺で無くなる！。いつまでもこの夢に潜っていたい。山城さんの体に触っていたい。

が、突然俺の脳裏に志貴崎さんの、筋肉うねうねが浮かんできた。いやいやいや、騙されない。騙されないからね！俺！！

「いや！いやいやいや！！じゃんけんで負けたんだから潔くなさい！！」というか幻術禁止！！」

「・・・ちえ」

突然、俺の脳を覆っていた、淫らなもやが霧散する。夢が覚めた。山城さんは、今までの演技を辞めて、唇をとがらせた。もういつ

もの女子高生の演技に戻っているようだ。この人危険すぎる。

「どきどきしましたー」

「・・・えっち」

「そんなに俺の隣は嫌か？」

「できるだけ離れてよね！」

一部始終を見ていた、鬼谷さんと野谷さんは、顔を赤くしてキヤーキヤー盛り上がってる。助けてくださいよ。ねえ。

志貴崎さんは、山城さんの拒絶にちよつと残念そうだ。

山城さんは口ではそう言いつつ、志貴崎さんの布団を離そうとはしない。何だかんだで楽しそうだ。もしかしたら、さっきの幻術もわざとタイミングを見て、力を弱めてくれたのかもしれない。

「はいはい！一時過ぎです！皆寝ろ！！」

「・・・はい・・・」

このままだといつまでもワーキヤーやってそうなので、さつさと指示して寝かせる事にする。「おかあさん」とか言ってくる山城さんは黙殺しておいた。

両隣に女の子が居て、シャンプー（リンス？）の匂いと、女の子の吐息の音に最初はドキドキするも、心地よい疲労感がすぐに襲ってきて、俺は深い眠りに落ちた。

明日はいよいよ海に行く。楽しい明日がきつと来ると、そう確信できた。あれ？もう今日だっけ？どっちだろうか。そんな思考力も、俺には既に無いようだ。

## 間話 深夜の密会

皆が寝静まった後、志貴崎は目を覚ました。

時刻は4時を回ったところだろうか。志貴崎は異常者としての脳に加え、人の範囲を超えた臓器類により、基本的に3時間程度の睡眠で全ての疲れが取れる。

皆を起こさないように静かに身を起こす。

と、右腕に山城が絡みついていた。緩みきつて幸せそうな寝顔に、思わず志貴崎の口角が上がる。あれだけ離れると言っていたくせに、人一倍寝相が悪いらしい。よだれまで垂らして、志貴崎の浴衣に染みを作っていた。

大胆に投げ出された足は、志貴崎の体の上に乗せられ、下着まで露出してしまっている。

そのまま見守っていたい気持ちもあるが、今日の所は遠慮させて貰おう。腕を少し強引に引き抜く。

志貴崎が腕を引き抜いたせいで、元々着崩れていたのだろう。山城の浴衣の胸元があらわになってしまった。形の良い胸が、呼吸に合わせて上下している。

下は着けているくせに、上を着けていないのか。相変わらず『女の子』というのは良くわからんな。

志貴崎はため息を一つつき、山城を転がして、涎を拭き、浴衣を正してやる。その手つきは優しさに満ちていた。

最後に腰紐を締めるときに、志貴崎の胸にいたずらが芽生た。昨日の腹いせに、『少し』きつめに引っ張ってやる。

「ぐひゅ」

変な声が山城の口から漏れ出るが、ささやかな仕返しである。

志貴崎は、彼の昨日の行動が、根本的に問題であった事を、結局何一つ理解していなかった。

最後に布団をちゃんとかけてやり、山城の胸の上をぼんぼんと軽く叩いた。

今日は遊びに遊ぶからな。風邪を引くなよ。

音を立てないように、そろそろと皆の持ち物が置いてある場所まで進み、ビニール袋を慎重に退ける。

野谷、すまん。

心の中で一応の謝罪をしつつ、野谷の鞆をあさぐる。野谷の鞆には、昨日穿いていた下着等も入っているが、志貴崎は、女の子の鞆を開けるといのがどれほど罪深いのかは勿論理解していない。

先の謝罪も、単純に『他人の鞆を勝手に漁るのは悪いな』という彼なりの一般常識の現れでしかない。

志貴崎の『女の子の扱い』スキルマスターへの道は、遠く険しい物だと言えそう。

野谷の鞆から、目的の物を見つけ出した志貴崎は、そっと鞆を元に戻して、脱衣所へと向かった。

露天風呂に出て辺りを見回す。時刻は4時であるが、うつすらと周辺が明るくなってきたような色合いとなっていた。

湯船につかりながら、志貴崎はお盆を二つ浮かべた。一つには泡盛とグラスとスティック状のクッキー、そしてもう一つには。

「お帰りなさい、栞」

「やはり、風呂は誰かと入るに限ると思って、irisさんと呼んでみた」

志貴崎さんは、満面の笑みを8面体カメラから映し出された発光体に向ける。

「私なんかで良いのですか」

「irisさんさえ良ければ、それで十分すぎる」

「私がここに浮かべられている以上、拒否権も何も無いと思うのですが」

「ふふん。確かに」

志貴崎は鼻で笑いながら、泡盛をグラスに注いだ。そしてもう一度聞き直す。

「嫌か？」

「まさか」

irisの即答に、志貴崎は景気よく泡盛を一気に飲み干した。

45度のアルコールは、志貴崎の喉を一瞬だけ暖かくするだけで、彼の内臓が一気にそれを分解。体中の毛穴からそれを霧散させる。

志貴崎の強靱な肉体が、彼を酔わせることを許さない。

「未成年の飲酒は法律で禁止されています」

「ふふん。どんな学校にも、不良児とは居るものだ」

「なら、問題ないですね。不良児の飲酒は法律で禁止されていませ

ん」

残念ながら、現在彼らの会話に突っ込みを入れる存在は、他の皆と一緒に夢の中である。

しばらく無言でのんびりと酒を楽しんでいると、志貴崎は空腹感を感じた。この時間ではまともな物は買えないだろうと予想して、持ってきていたクッキーを、嫌々つまんでかじる。

体の維持に必要な各種栄養素の、効率よい吸収と日持ちだけを念頭に置いて作られる、彼の非常食である。志貴崎はこのクッキー以上にまずい物を食べたことが無い。何かに例える事すらおぞましい。

一口かじっただけで、クッキーを戻す。

このクッキーと、人が一日に食べる食事の1/2程度摂取するだけで、彼は一日に必要な各種栄養素を補給する事ができる。だが、彼はこんなまずい物を食べるくらいなら、一日に20食でも30食でも食べた方がまだましだと考えている。これこそが、志貴崎が食べ物に執念を燃やす理由である。

「それはおいしくないのですか？」

「俺の知る食べ物の中で、一番まずいな。いや、これを食べ物という枠に入れることに怒りを感じる」

「ポテトよりもですか」

「芋、嫌いなのか？まあ、芋よりもだ」

「そうですか……」

クッキーの、いつまでも口の中に残り続けようとする執念に辟易し、志貴崎は泡盛を一気飲みする。

「検索したところ、脱衣所に卵があるようです。温泉卵など、いか

「がでしょう」

「ほほう。そんなものが」

聞くやいなや、志貴崎は立ち上がり、脱衣所に走っていった。

「女性に断りもせず、陰部を見せるのはどうかと思います」

志貴崎が既に脱衣所の中に入った後、彼がたてた波に揺られながら、irisは一人つぶやいた。

お湯が出る所に卵を設置し、志貴崎はまた酒を楽しんでいた。温泉卵になるのは約30分後である。

「そうだ。昨日の報告がまだであつたな」

「皆さんのお話はもうしばらく聞けないのかと、寂しい思いをしていました」

「まったく。疲れにかまかけてirisさんを忘れるとはな」

「その通りですね」

その疲れを作り出した張本人は、自分のことを棚に上げて、言いたい放題だ。

「昨日、山城が上村に幻術を使ったぞ」

「……それは」

irisは驚いた。能力を一般人に使う。それはまさしく信頼の証に他ならない。いや、信頼以上かもしれない。「能力を使って拒絶される」それこそが、彼らの心に深い傷を付ける、一番最初に迎



えるトラウマであるからだ。

そして、そのトラウマがありつつ、彼らはランク5。同じ能力者達にも拒絶されてきた。

拒絶に拒絶を、重ねて重ね、彼らはこれまで一人で歩んできた。

そのトラウマを乗り越え、能力を使用する。それが、どれだけ凄いいことなのか。どれだけ勇気の要る事なのか。

「ふふん。上村は不思議な男だな」

「・・・そうですね」

「あいつは昨日、俺とベッドを共にする事も覚悟し、この旅行を楽しんでいたようだしな」

「・・・」

志貴崎は心から楽しそうに笑う。彼の能力を知り、彼が少しでも『その気になれば』体を細切れにすることもたやすいと知りながら、それでも彼を信頼し、それとおそらく同じか、それ以上に彼女たちも信頼している。

上村 圭。一般人、無能力者として彼らと付き合う男。

何者なのだろうか。

irisは、彼らの誰よりも、上村 圭という男が異質に思えてならなかった。

「実際どう思う？上村の事」

「・・・能力者？」

「ふふん。例えば？」

「・・・人を信頼させる？」

irisは、自分の論理破綻した思考に、自分自身で驚いていた。彼がそんな能力など持っているはずが無い。そもそも、irisは

野谷の話と、『部屋』で文字のみの会話でしか彼を知らない。実  
姿を見たのはこの旅行がはじまってからである。

それなのにirisは彼の事を信頼していた。自分の正体や生い  
立ちを平気で話せるくらいには。

そんな間接的な経路、しかもirisのような、プログラムで  
きている者にまで効力を発揮できる能力が？

先の鬼谷との一件では、鬼谷本人が直接VRで接続してきてよう  
やく、能力が行使できていた。鬼谷ほどの強力な能力でそれなのだ。  
上村がそれほどの能力を使えるならば、既に学園に入れさせられて  
いるはずだ。

元々、『上村 沙紀』という、志貴崎達をも超越した存在を姉に  
持っていたから？彼自身の器の広さ？性格？人格？

「まあ、人を信頼させる能力かどうかは、わからんが、常人ではな  
いと俺は思う」

「・・・そうですね」

「そもそもだ。俺達は出会って3日だ」

「そうですね」

「それなのに俺達は、自分の能力のほぼ全てを、上村に見せている  
事になる。鬼谷とかは、まだ隠している所がありそうだな」

「それは、桜達が始業式に出席した理由が一番なのではないのです  
か？」

志貴崎達は、自分たちが一人でいることに耐えきれず始業式に出  
席した。それと上村の異質さとは無関係ではなからうか。

「まあ、出会って三日で、友や親友や恋人になるなんてのは、よく  
ある話だ。大きな問題では無いだろう。運命的な出会いって奴だな」

志貴崎はニヤニヤ笑いながら泡盛を一気飲みした。

「俺が言いたいののは、俺たちが示し合わせたように、『能力を見て一緒に歩んでくれる友達を探す』という理由で始業式に参加し、そしてそれに『偶然』上村が転入してきて、その日のうちに遊んだ。その事実だ」

「……………」

「あいつは自分を自分で『巻き込まれ体質』だと言っていたぞ」

「……………他人の運命を自分に向ける能力？」

「違うな。他人の運命に自分を絡めてしまう能力だ」

『偶然』 上村 沙紀の弟になる。

『偶然』 能力者の学校に通わされた先で4人の最高ランク能力者と友になる。

志貴崎達的能力を見ても『偶然』上村 圭は姉に能力者が居たので、常人なら恐れて逃げるような所を、「すげー」の一言で済ませる。

さらに、自分に能力を向けられても、自分の『巻き込まれ体質』のせいだからと、これを軽く流す……………。

たった三日で、これだけの『常識』やぶりな状況にさらされても、上村は「巻き込まれた」の一言で済ませる。

「能力者じゃなくても、常人の神経では既に三回くらい精神が崩壊してるな」

志貴崎は楽しそうに、泡盛をあおる。そろそろ瓶の中身がなくなってきたようだ。

「ま、常人だろうが能力者だろうが、上村は上村だ。俺は信頼してるし、皆も信頼している。これから皆と一緒に時間を共にし、遊び、楽しくしたい。irisさんはどうだ？」

「ええ、そうですね」

irisは野谷の顔を思い出していた。あれだけの表情を、彼女にさせるだけの人物。ついにirisには、叶うことのできなかった事だ。irisも上村、いや、彼らと一緒に居たいと思った。

「でだ。話を最初に戻す事になるが、山城が能力を使ったわけだが」  
「ええ」

「まだ演技を解くまでは、いつてない」

これは初日から志貴崎が試みていることでもある。わざと彼女の逆鱗に触れ、彼女の能力を引き出そうとしていた。しかし、どうやらこの方法では彼女の『素面』は見られそうもなさそうだ。もつとも、志貴崎の意図していない所でも、山城の逆鱗に触れまくっているのだが、もちろん彼はその事に気づいていない。

「彼女の本当の顔が見たいと？」

「ふふん。やはり全てを晒しての友だろう？」

「女の子のいやがる事するのは感心しませんね」

「まだまだ勉強中の身なのでな」

irisは内心ため息をついた。この志貴崎という男は、あらゆる意味で自然体で動く。

さて、しかし、一見無理難題なように感じる……。が、irisは閃いた。

「それでは一つ」

「ふむ……。？」

irisの案に志貴崎は興奮気味にうなづく。なかなかの妙案のようである。二人の秘め事が進行する。そろそろ朝日が昇るようだ。

「なるほど、それでいこう」

「楽しみですね」

「ふふふ」

まるでいたずらを仕込む子供のような笑いである。

山城にとって、あまりよくない方向へと話が転がっている気配がある。

志貴崎はしばらく今後の事を想像して楽しそうにしていたが、ふと顔が真顔に戻る。

「そうだ、鬼谷の事なんだが」

「はい」

「どうやらあいつは、一步引いている節がある」

「……。なるほど」

鬼谷は、いつも控えめにしており、あまり自分を出さない。周りに同調し、前に出てくることはあまりない。それが志貴崎にはもどかしく感じた。

irisはしばらく考える。

「桜」

「む？」

「皆のために、命をかける気はありますか？」

唐突な質問である。たった三日連れ添った人間のために命を捧げられるか？

「ふふん。愚問だな。どうした？脳みそでもさび付いたか？」

志貴崎は即答する。彼らの全てを志貴崎は受け入れる気でいた。そして、志貴崎の理想の関係のために、彼らを自分勝手に巻き込む事も。全ては彼のわがままである。責任は、全て取るつもりだ。そのために自分の命など、一ミリも惜しくは無い。

「それでは」

irisは話し始める。

彼らの運命を定めるのか、歪めるのか。

それは分からない。

が、志貴崎の命に、志貴崎の心に、彼らと、そして自分自身の運命をそつと、預けた。

少しだけ長い計画の話し合いが終わり、志貴崎とirisは静かに朝日を眺めていた。

「おお、温泉卵があつたな」

志貴崎は存在自体を忘れていた卵を取り出し、二本目の泡盛もついでに持つてくる。

「うまいな」

大量の温泉卵に泡盛。志貴崎は完全にくつろぎモードに突入していた。

「付け合わせと言えば、椀」

「ん？」

「ケーキには何が合いますか？」

志貴崎はしばらく考え込んで、確信を持って答えた。

「ショートケーキには抹茶アイス、ティラミスにはミルフィーユだな」

「なるほど」

二人の密会はまだまだ続く。時刻は6時半を回ったところだった。

五話 曇りが一番良い天気？（前書き）

四話 継続 二日目



## 五話 曇りが一番良い天気？

チリリリリリリリリリ

8時に設定していた、タイマーの控えめな音に、俺の意識はゆっくりと覚醒した。・・・いつもの自宅の目覚まし時計の音ではない。

まだ半分脳の寝たままで、目を開ける。と、そこには野谷さんの顔がアップで迫っていた。

規則正しい寝息、さらさらと流れるように傾いてる髪、布団から少しだけ出た肩、長いまつげ、下品にならない程度に少しだけ着崩れた浴衣。

「うえ！？野谷さん！？」

がばつと飛び起きる。何だこの状況！！野谷さんが隣に寝てる！！！！

「おう。上村、起きたか」

志貴崎さんは、のんびりとソファでくつろぎながら、でかいを通りこして、でかすぎるテレビを眺めていた。

志貴崎さんの声に、ゆっくりと脳が覚醒してきた。昨日俺が沖縄に皆と一緒に来て、ホテルに到着、川の字で寝た事を思い出す。

「早いね。志貴崎さん」

なんとなく、志貴崎さんが最後まで寝てるようなイメージを持っていた。

背伸びをして、昨日の疲れが残っていないかどうか確かめる。うん、深く眠っていたのだろう。疲れはすっかりとれていた。

「今日が楽しみでな、ついつい目覚ましよりも速く起きてしまった」  
「なるほど。ちなみに何時くらい？」

「4時だ」  
「遠足前の子供かつ」

何だよこの人。どん引きだよ。

「遠足か。なるほど、遠足もしたことないな」

志貴崎さんは、興味深そうにうんうんうなずいている。  
しまった！自分から墓穴を掘った！！

「まあ、遠足は置いておいて、こいつらを起こしてやれ。女は化粧やらなにやら、時間がかかるのだろう？」

「あーそうか」

未だにタイマーは鳴っているが、誰一人起きようとしない。山城さんなんて口開けて涎までたらしている。少なくとも女子高生が、男性の前で見せる顔では無い。かわいいけれど。

とりあえず隣にいる野谷さんから起こすことにする。眠っている女性をこんなに至近距離で見るのは初めてなので、ときどきしてしまふ。

布団から少しだけ出た肩に、そっと手を置いて野谷さんを揺すった。若干高めの体温が、手の平を伝う。

「野谷さん、起きて。朝だよ」

「……………んにゅ」

かわいらしい声を出して、野谷さんが起き出す。目をこすっておりまだ少し眠たげだが、布団からもそもそと出てきた。

浴衣によつて、野谷さんの腰からお尻にかけての、ボデラインが顕著に見て取れる。四つん這いで布団から出てきた野谷さんは、その華奢で小さな体つきから、猫をイメージさせる。少しだけ寝癖のついた髪が色っぽい。目を離せないのは、男として仕方ないことだと思うんだ。

内心ドキドキしながら、野谷さんが覚醒するのを待つ。

「……………おはよう」

「おはよ、朝だよ。山城さん起こしてくれる？俺は鬼谷さん起こすから」

「……………ん」

野谷さんが山城さんの方に行ったので、俺は振り向いて鬼谷さんを見た。

妖精が居る。と思った。

山城さんは、少しだけ顔を俺の反対側に向け、規則正しい寝息をたてていた。どうやら寝相はかなり良いらしい。美しい銀髪を、枕の上にあげて髪を引っ張らないようにしているようだが、その髪が朝の光に照らされて、きらきらときらめいていた。まるで、妖精の羽か、羽衣のように錯覚させる。

ちゃんと肩まで布団を被っていたので、大事な所に触らないように、慎重に肩をゆする。

「鬼谷さん、朝だよ」

「・・・・・・・・・・あう」

夢から覚めたようで、綺麗な銀色のまつげを振るわせて目を開けると同時に、口から意味をなさない言葉が漏れる。

「・・・・・・・・・・おはようござい・・・・・・・・」

どうやら低血圧気味らしい。ゆっくりと起き上がるのに合せて、銀髪もさらさら流れて綺麗だ。しばらくそのままぼーっとしているので、目が覚めるまで待つとしよう。

「・・・・・・・・・・んっ！」

後ろで小さな悲鳴が聞こえたので振り返ると、野谷さんが山城さんに絡みつかれていた。がちりホールドされているようで、野谷さんの力ではどうにもならないようだ。いったいどうやってたらその体制になるんだ。

「ただ寝相わるいんだ山城さん。」

「・・・・・・・・・・助けて」

正直女の子同士が、体を密着させているこの状況は大変目にうれしい・・・・・・・・・・いや、たのしい・・・・・・・・・・いや？なんって言ったらいんだろうか。

まあいつまでも見ているわけにも行かないので、二人を剥がしにかかる事にする。

山城さんには悪いが、口と鼻に手で栓をする。手に山城さんの呼吸が感じられてくすぐったい。

「・・・・・・・・・・ぶふあっ」

しばらく待つて、苦しそうな顔になったところで手を離す。山城さんは涙目になりながらもどうにか夢から覚めたようだ。

「…………あれ？」

「おはよう。山城さん」

山城さんの顔に、「なんで圭がここにいの？」みたいな表情から、「あー沖縄旅行だっけー」という表情に変わるのを待つてから、

「野谷さんを離してあげて」

と言ってあげた。その間、野谷さんは抵抗するのに疲れたのか、山城さんの胸の上でぐったりしていた。

「…………え？あ、ごめん！私寝相悪くてさ」

「…………疲れた」

寝相悪いっていうレベルじゃなかったぞ。あれ。

「俺とかだったらどうするつもりだったんだよ」

大騒ぎになってたぞ。きつと。

「へへー、圭ならいっかなー」

山城さんはいつものニヤニヤ顔になりながらそんなことをほざきやがった。是非ともお願いしたいですが、あまりにおふざけが過ぎるので、

「明日は志貴崎さんに起こして貰おう」  
「げげっ」

一応明日のために釘を刺しておいた。

「はいはい！お風呂入るなら入って、準備しなさい！」  
「「「はい」」」

皆に指示を出して、俺は志貴崎さんの隣に腰を下ろした。

「はあ、まったく」  
「もうすっかりおかあさんだな」  
「俺がすっかりしないと皆暴走するだろ」  
「違うない」

一番暴走する予定の志貴崎さんは、静かに笑いながらテレビを眺めている。俺もテレビを眺める。

天気予報は、早朝は晴れ、昼以降は曇りとなっていた。降水確率0%。すぐに画面が切り替わり、今日の占いが始まった。げげ、曇りか。ちよっとテンションダウン。

「曇りかー」  
「ふふん。良い天気だな」  
「曇りが？」

何でだろうか。やはり沖縄と言ったら白い砂浜に、さんさんと照りつける太陽ではないのだろうか。

「俺たち男にはまあ、問題ないかもしれないが、女性陣は嫌だろう」

「日焼けか？」

「詳しい解説は金城にしておおう」

あの三人は比較的肌が白い方だ。特に野谷さんは、普段家の中にいるのか、かなりの色白具合となっている。まあ、金城さんに解説してもらえらるなら、それを期待しよう。

ちなみに、今日の俺の運勢は真ん中くらい。混乱の中にあることがあるでしょう、との事。この占いはきつと的中するな、と俺は確信した。

準備を終えた俺たちは、展望フロアに朝食を食べに来ていた。朝は晴れとの天気予報通り、そこから眺める沖縄の景色は、最高に美しかった。

青い空に、白い砂浜、そして色とりどりにたゆたう海。写真なんかで見ると、沖縄の海は青か緑といった印象しか受けないが、白い砂浜と海の境界線から、白、明るい緑、緑、深い緑、青と、どんな色の変化があり、さらに珊瑚礁や岩に合せ、どこを見ても同じ模様にはならない。太陽に照らされ、波に揺られて、海はいくらでもその表情を変える。

「きれー！」

「綺麗ですねー」

「きれいだなー」

「……ん」

『綺麗』の一言で済ませられる景色では無いが、それ以外にこの景色を表現できる言葉を俺は知らない。皆で一緒にしばらく海の様子を眺める。

ちなみに全員、動きやすい服装だ。

山城さんは、黄色いＴシャツに、赤いラインの入った黒いジャージ。

野谷さんは、オレンジのＴシャツに、タックショートパンツ。

鬼谷さんは、丈の長い白シャツに、ホットパンツと膝上までのレギンスだ。

俺はというと、さつそく買ったばかりのかりゆしウェアを着て、ミ－ハー旅行者を満喫している。

志貴崎さんは、Ｔシャツだった。景色を眺めて楽しむ俺たちを、放ってさつさと料理と取りに行つてここにはいないが。

ひとしきり景色を楽しんだ後、俺達も食事にする。ちなみに朝はバイキングである。相変わらず大量に食べる志貴崎さんにはもう慣れたので、気にしないで自分の分を食べ始める。

ウインナーに卵焼き、焼きシヤケ、味噌汁、ご飯、パンとジャム朝なので軽めにした。志貴崎さんが食べてるものは、見なかった事にする。

ちなみに、時刻は１０：３０である。金城さんは到着したら展望フロアで、と言つてあるので、昨日の予想通りまだ来ていないようである。それを予想して、到着予定時間にご飯を食べてる俺たちも俺たちであるが。

「金城さん、どれくらいでくると思う？」

「んーあと一時間くらいみたほうがいいんじゃない？」

のほほんと山城さんが返す。まあ、別に時間に追われているわけではないし、のんびり朝ご飯を食べよう。

「うきみそーちー、はいさーい、来たさー」



「はいさーい」

と、そんな時金城さんがやってきた。山城さんが元気よく答える。すっかり自分の分のご飯を皿にのせている。金城さんもここでご飯を食べるのか。自由人だな。

「うきみそーち？」

「うきみそーちー。おはようって意味さー。まー、沖縄の人もあるま使わないさー」

金城さんは、俺の言葉に、わざとゆっくり言葉を言い直してくれた。独特の沖縄方言のイントネーションはとても面白い。

「今日は海いくけどよー、泳ぐのは太陽隠れてからさー」

「え？晴れてるうちに泳ぐのがいいんじゃないのー？」

山城さんが、びっくりして食べかけのパンから顔を上げた。ジャムついてるよ。

「太陽出てる時の海は綺麗さー、けどよー、それで泳ぐと塩と太陽で火傷してあちこーこーよ。だからよ、フル装備で釣りするさー。でからよ、魚を昼に食べて泳ごうねー」

どうやら、太陽照りつける中で、水着なんかつけて泳ぐと、日焼けを通り超して軽度の火傷になるらしい。沖縄の海、恐るべし。現地の人は水着の上から長袖のＴシャツなどを着用して泳ぐのだとか。それでも、日がもっとも高い時間は泳ぐのを避ける。

「水ぶくれができて、ぼろぼろ皮が剥がれて、斑模様になるさー。」  
「ひい」

金城さんの言葉に、女の子達の顔が青ざめる。

しかし今日は曇り。その時に泳げば日焼け止め程度で水着で泳いでも大丈夫だ。なるほど、志貴崎さんが言っていたのはこのことなのか。確かにその話を聞くと、曇りが泳ぐには一番良い天気かもしれない。

そして、太陽の照る綺麗な海では、日光対策を万全にしたフル装備で釣りをしようというのが金城さんの今日のプランだ。

話を聞いた俺たちは、金城さんのプランに素直に従う事にしたのだった。

「日焼け止めって、どんなのがいいの？」

「このホテルの売店に、良いのがあるよー。高密度の微粒子がなんとかかんとかでから、UVカットが何かすごいらしいさー。高いけどよー、あの日焼け止め使ってるお客さんは、皆日焼けあんまりしないで帰って行ったさー」

「流石ガイドさんっ」

女の子達は、自分の肌を守るため、真剣だ。金城さんの解説は適当極まり無いが、俺たちみたいな人を何回も案内してきたのである。う。そんな人が勧めるのだから、きっと大丈夫なものだろう。

窓の外を見る。さんさんと日光を反射して止まない雲達が、ゆったりと流れて俺たちを待っている気がした。

## 五話 曇りが一番良い天気？

さて、ご飯を食べて元気いっぱい俺たちは、金城さんの車に乗り込み、元気よく出発した。日焼け止めもばっちり購入。

金城さんの車の荷台には、釣り道具の他に、日光対策のパラソル、麦わら帽子、見た目がカッパにも見える超極薄の遮光ジャンパーなど、色々と積み込まれていた。ナイフや即席キャンプセットもある。何でもありだ。

「何だか映画とかで見る、スパイとかが車に隠してる武器庫みたい！」

座席に座り、後ろの荷台を見ながら山城さんがはしゃぐ。

「そーばーよー。その時に合せて、できる限りの最高の装備にするからよ、今日は女の子いるから、釣り竿も電動リールとかで力使わないのにしたさー。餌もよ、虫じゃなくて人工生成疑似餌で簡単さー。ほかにも色々あるからよー」

流石、伊達にこの仕事はやっていない。細かい気配りは流石だ。そして相変わらず説明が適当である。金城さん曰く「てーげー」らしい。適当って意味なのだから。だめだこりゃ。

素人目に見ても、手入れの行き届いた釣り道具の数々だ。釣り竿や餌も、手作りや高級品なのがなんとなくわかる。

「どうせだったら俺は本格的なものでやりたいな」

志貴崎さんは、電動リールや疑似餌ではなくちゃんとした虫や普通のリールでやりたいようだ。

「こういうのは、雰囲気楽しむさー。魚釣れなくてもスーパーで買って食べればいいさー、くらいのとーげーでやればいいんどー。泡盛飲みながらだらだらつとするのが沖縄の釣りだからよー」  
「ふふん。例え釣れなくても、本気で当たって砕けるのが俺だから」

自分で当たって砕けるとか言うなよ。あと、金城さんはさらっと飲酒しますよ宣言とかするな！！

俺は警戒して携帯でアルコールチェッカーのソフトウェアを、検索してダウンロード・インストールしておくことにした。こっそり飲んでたら運転代行を呼んでやる所存だ。

ホテルを出て、沖縄の海を窓から眺めながら、のんびりと車は走っている。昨日は夜なので実感もありなかったが、車窓から海を眺め、道に植えられた沢山のヤシの木を見ると、おー、沖縄っぽい（っぽい、ってのも変な話だな）！と実感が出る。

車は、橋を渡り、『やがしま屋我地島』に渡り、さらにそこから橋を渡って『こごり古宇利島』へと向かう。今日の目的地はそこだ。

この『こごり古宇利島』へと向かう橋を『こごりしまおおはし古宇利島大橋』と言うのだが、この橋にさしかかる前から、沖縄の満点の空と、まだ見ぬ『古宇利島』の海との組み合わせに興奮する。

そして、橋へとさしかかる。

「「「「「おおおおー！！」「」「」

そこにはまさに、エメラルドグリーンの海が広がっていた。鮮やかな緑。透明度の高い海！橋の上、さらに車の上から見てもこの透

明度。ため息すら出てしまうほど綺麗だ。

車はどんどん進み、橋の中間にさしかかる。

「すげーな、プールの底みたいだ」

「あ、なんとなくわかるそれ」

ホテルの上からだ、色々な色があるように見えた沖縄の海だが、これくらい近くまで来ると、底の白い砂に透明度の高い海の色がまざり、まさに鮮やかな緑一色。境目の無い無限に広がるプールのようだ。

さらに、反対側の車窓からは、これまた美しい位に、深い青の海が広がっている。橋の左右で、ここまで海の色に違いがあるとは。車で移動してるというのに、その透明度高すぎる海では、たやすく魚群を発見することができる。

「沖縄の海が、ここまで綺麗だとは思いませんでした」

「・・・うん」

女の子達は食い入るように海を見ている。

そして、金城さんが『古宇利島』の解説をしてくれる。

「この橋は無料で走れる橋で沖縄一、長いさー。ちょっと前までは日本一だったけれどよ。皆畑仕事してるさー。あとはウニ丼がおいしいさー」

適当である。

「ほほう。ウニ丼」

志貴崎さんの目がキラリと光る。

「今日はそこで釣った魚を料理してもらって、ウニ丼食べるさー」  
「おいしそー!」

「釣れなくてもウニ丼食べるさー」

まったくもって適当である。

車は橋を渡りきり、すぐに右に折れて駐車場に止まった。

「この海でおよぐさー」

「おおお!」

橋を降りてすぐにビーチがあるらしく、皆でビーチの確認をする。  
白い砂浜、青い空に、エメラルドグリーンのビーチ。まさに、う  
たい文句通り、沖縄の海そのままの光景がそこにあった。夏の太陽  
の照りが白い砂浜に反射し、上からも下からもじりじりと肌を焼く。

「きれー!!」

砂浜を下り、海と砂浜の境界へと近づく……。あまりの海の  
透明さに言葉が出ない。海へと足を踏み入れる。

「冷たいな。そして海って透明なんだ」

「ほんとうだねー……」

「ですねー」

「……きれい」

既に膝下まで進み入ったが、その透明度は変わらない。少し緑っ  
ぽくなっただけ程度である。周りには、夏休みの時期を外し、平日だ  
と言っことで観光客も、現地の人もほぼ0だ、ほとんど貸し切り状

態でこの海で遊べるわけだ。

「でーじ綺麗だろー。曇りになっても全然綺麗だからよ、わくわくしてるといいさ」

「「「「はい」「」」」」

とりあえず、皆で車に戻り釣りの準備をすることになった。  
と、志貴崎さんが何か握っている。

「・・・何だそれ？」

「魚だ」

志貴崎さんの手には魚が握られていた。どピンクの魚だ。・・・  
すさまじい色だな。しかしどこから？

「どうしたんだ？それ？」

「獲った」

「・・・はい？」

「海に入った時にだな、足下をこう、泳いでるから、獲った」

「・・・」

「こうな、魚が手に気づいて前に逃げるから、ちょっと手前に手を入れるのがコツでな」

熊かよ。どん引きだよ。釣りいらねーじゃねーか。そんなHow  
Toいらねえよ。志貴崎さんにしかできないからねそれ！静かだ  
なと思ってたらそんな事してやがったのか！！

「それはぐるくんさー、焼いて食べるとおいしいさー。ビールと食  
べるとでーじまーさいびん」

「これがぐるくん・・・」

「ぐるくん？」

「沖縄の県魚ですよ。確かタカサゴっていう魚です」

志貴崎さんの手に持つ魚を見て、皆興味しんしんだ。しかし、素早さ次第でさかなを獲れるなら、野谷さんももしかして、獲れるんじゃないか？

「……熊じゃない」

考えが読まれてた。

「ふふん。魚獲りでは勝負しないのか？」

「……しない」

口を結んで、静かにすねる野谷さんはかわいらしかった。

「さて、それじゃあ釣るさー！」

志貴崎さんがフライング(?)してしまっただ、気を取り直して魚釣りである。

ビーチから少し移動して、堤防の上に俺たちは腰掛けていた。

パラソル、遮光ジャンパー、麦わら帽子、簡易椅子。もう色んな意味で準備万全である。

勿論ひやけ止めも塗ってある。流石高いだけあって、さらさらとした手触りで、顔に塗っても何の違和感も無い。



「まずよ、釣り竿あるだろ？この針に、この餌をつけるばーよー」

そういいながら、金城さんは疑似餌を取り出す。何となくエビっぽい見た目だ。

「でからよ、振りかぶって投げるさ。振るのを機械が見てて、勝手に飛んでくからよ。投げるときは、パラソルの下から出ないとパラソル飛んでくから気をつけてねー」

普通なら振りに対してタイミング良くリールのロックを解除するなり、リールを止めている指を離すなりの操作があるが、初心者用に各種コンピューターを導入した釣り竿のようだ。釣りはしたことが無いのでありがたい。あと、パラソルの下から云々は要らないと思う。

「でからよ、落ちたところに浮きが出てくるからよー、それが沈んだら魚が餌食べてるさー。そうしたら巻き取れば釣れるばーよー」

今回は演習なのですぐに金城さんが巻き始める。それをコンピューターが検知しフィールドバック、人力との比率約1:2で内蔵されたアクチュエーターを駆動させ、リール巻きを補助してくれる。さらに、引きの強さ、リール巻きに掛かる力から、どの程度の魚が掛かっているかを的確に検知。ディスプレイに表示させる。今回は特に何も居ないので、ディスプレイの表示は特に何ともなっていない。

「あとは、これを繰り返すだけさー。針の付け方とか、魚の外し方はわーがするからよ、気軽に言えればいいさー」

「「「「「はい」「」「」「」」」」」

早速皆で餌を付け、投げ始める。「しゃー！」っというリールから針がはき出される音が連続して鳴り、照りつける太陽と、沖縄の海を眺めながら、のんびり腰掛けて魚がかかるのを待つ。

「俺が投げると電動だと壊れるからな。これだ」

志貴崎さんの声に、振り返ってみると、なんともすさまじい釣り竿を握っていた。

「ハイコーティングされた、クロムクロスファイバーがどうか炭素なんとかが、なんとかかんとかな凄い丈夫な釣り竿さー」

相変わらず適当な金城さん。どうやら凄まじく頑丈な釣り竿らしかった。余計なパーツはついておらず、まさに漢の釣り竿。どう考えても釣り初心者の人が持つ物ではない。

そして餌は魚の切り身である。何の切り身かはわからないが、かなり厚く切つてある。何を釣る気だ？あんだ。

「ふん」

ブオン

気軽に投げているように見えてるが、釣り竿がありえない位になり、先に付けられた重りを勢いよく飛ばす。「ギヤアアアアアアア」というリールの系をはき出す音は、もはや釣り竿の悲鳴にすら聞こえてくる。

ってか、遠くに飛びすぎて浮き見えなく無い？

「飛ばしすぎさー、浮きが見えないねー。もっとでかい浮きにする

べきだったさー」

「……大丈夫、……見えるから」

野谷さんには、遠い浮きかはつきり見えているようだ。流石異常者。

しばらくぼけーっと釣れるのを待つ。こう、今までの三日がすさまじかっただけに、俺の精神は海の緩やかな流れに合わせて、ゆっくりと癒やされているようだった。ああ、癒やされる。

そういえばこの人達的能力って、魚に通用するんだっけ？

「山城さんや鬼谷さんの能力って、魚にも有効だっけ？」

「そだねー」

「ええ」

流石、ランク5。もう何でもありすぎる。

「見せようか？」

「いや、いいです」

山城さんが気前よく言ってくれるが、遠慮しておくでしょう。山城さんの手の動きに合わせて、魚が飛んだり跳ねたりシンクロしている様子を想像する。恐ろしすぎる。

しばらくそのままポケットとしてると、金城さんが楽器を取り出した。

「それは？」

「さんしんさー」

「それが……」

黒い漆を太陽光に反射させて、蛇の皮を張ったその楽器は、沖縄文化の象徴でもある。

「沖縄の人は、時間を一秒も無駄にしないで、とろとろするさー」

沖縄の人は、時間にルーズである。それは別に時間を無駄にする事ではなく、時間を楽しむからである。時間に縛られ、時間を気にして、時間に従うのではなく、時間を見て、時間を楽しみ、時間を感じる。

釣りをするときも、遊ぶときも、仕事をする時も、彼らはいつでも時間と戯れ、時間と生きる。

ギターピックでつま弾くサンシンの音が鳴り響く。

サア、君は野中の茨の花が、

サーユイユイ

暮れて返せば、ヤレホンニ、引き留める

マタ ハーリヌ チンダラ カヌシヤマヨ

サア、嬉し恥ずかし、浮き名を立てて

サーユイユイ

主は白百合、ヤレホンニ、ままならぬ

マタ ハーリヌ チンダラ カヌシヤマヨ

ある所に、アサドゥヤ安里屋のクマタという村民生まれの美しい娘が居た。

そして彼女を見た下級役人は

「嗚呼、貴方はなんと、野原に咲く茨の様に美しい。是非とも、是非とも貴方と添い遂げたい」

と、彼女に何度も結婚を申し込んだ。「マタ ハーリヌ チンダ  
ラ カヌシャマヨ」、「また逢いましょう。美しい私の思い人よ」。  
役人の命令は絶対である。それを受けたクマタは言葉を濁し、かわ  
して、ついにはこの申し込みを拒否した。

役人は言った「それでは私は、貴方よりも美しい人と結婚してみ  
せよう」と。

歌は23番まであり、歌は彼女と彼のやりとりを、おもしろおか  
しく描いている。

しばらく、金城さんの歌と、海の波の音と、俺たちのリールの音  
が、青い空に向かって静かに溶けていた。

志貴崎さんの竿の音だけが、青い空を引き裂いていたが。それは  
俺の精神安定上あまりにもあれなので、聞かなかったことにした。

## 五話 曇りが一番良い天気？

皆で釣りを楽しんだ後、俺たちはビーチの近くの海の家に来ていた。トタンを組み合わせた壁に、濃いコケ色やら、青や黄色のペンキが塗りたくられすごいことになっている、海で獲れたのであろう、でかい貝殻とかが飾られて、なんともアジアンダイニング、という独特な印象を受ける店だった。

「ありー、にいにいーいるー？」

「おー、金城やしえー。仕事かー？」

「そーばーてー、しにるかてーげーやってきたばー」

「てーげーはだめやしえー」

どうやらお店の人と知り合いらしい。理解不能なレベルで方言を交わしている。俺たちの釣った魚を手渡しているところを見ると、料理をしてもらえるようだ。

ちなみに、俺たちの釣った魚はグルクンが三匹、カレイが一匹、ハコフグ二匹。一時間半程度の釣りにしては、かなりの量が釣れたと思う。・・・志貴崎さんは釣れなかった。

「当たって砕けたな」

と豪快に笑っていたが、ちょっと寂しそうだった。しかしあれだけの切り身を使って釣れる魚って何だ？そもそも居るのか？沖とかにいないと無理なイメージがあるんだが。

俺たちは釣った魚がどういった料理をするの分らないし、沖縄料理の知識もあり無いので、金城さんにメニューを任せた。しばし待つと、他に客が居ない事もあってすぐに料理が出てきた。

さしみ、焼き魚、サラダ、ウニ丼、魚のアラ汁、沖縄そば、etc.

「おおおー！」

「すごいですね」

「・・・おいしそう」

沖縄の色豊かな魚がメインだけに、目に鮮やかでとても楽しい料理のフルコースとなった。ほとんど料理が運ばれてくるが、志貴崎さんが大量に食べるので問題は無い。

「自分で釣った魚はやっぱおいしいさー」

海の匂いと、音を聞きながら、俺たちは新鮮な素材の味に、舌鼓を打った。

時刻はそろそろ2時になりそうだった。

さて、ご飯も食べ、腹も満たされた俺たちは、いよいよ海に来ていた。全員もちろん水着だ。

山城さんは、赤とオレンジの水玉模様のチューブトップビキニ、元氣いっぱい動き回る彼女らしいと思う。

野谷さんは、青と黒の細かなボーダー柄のボーズレグビキニ、小柄でショートカットだから、遠目に見ると中性的であるが、胸の膨らみと相まってとても健康的な色っぽさを感じさせる。

そして、鬼谷さんは、前日の宣言通りかなり攻めてきた。なんと黒ビキニにパレオである。黒い下地に、白いハイビスカスが控えめに散る上品な水着だ。銀色の髪との対比がとても綺麗だ。

「みんなかわいいさー」

「へへーん」

「がんばって選びましたからね」

「・・・ん」

対する俺と志貴崎さんは、まあ普通と言えば普通。ズボンタイプのゆるっとした水着だ。沖縄だと言うことで少し派手めではあるが。

「椀の事だからなんか凄いの選んでくると思ったよ」

「選びそうだったから俺が見繕った」

「・・・圭がいてよかったよ」

山城さんは頭を抱えている。

早速海にはいるー！！と思うのだが、まずは下準備である。

「志貴崎さん、パラソルぶっさして」

「ふん」

ズトン

ぐいぐい引つ張って抜けない事を確認する。うん、大丈夫そうだ。広げて影を作る。そしてビニールシートを敷いて、四方の穴に、これまた志貴崎さんに釘を打ち込んで貰う。あっという間に休息所の完成である。

「・・・圭、背中塗れない」

野谷さんが、日焼け止めを持って俺の前に座った。確かに、一人



では日焼け止めは背中に塗れないな。だが、俺じゃ無くて鬼谷さんか、山城さんに塗って貰えば良いのに。信頼してもらえてることなのだろうか。

「お、俺がか」

「・・・ん」

変な汗がいたら流れるが、まあ、日焼け止め塗るくらい友達同士普通にするか、と思い直し、日焼け止めを受け取った。少し手の平に出し、両手に付けて引き延ばす。

とりあえず、女性の背中に日焼け止めなど塗ったことはないの、首筋から塗り始める。手の平が野谷さんの首筋に当たり、ワンテンボずれて野谷さんがびくつと震える。

「すまん、冷たかったか」

「・・・大丈夫」

大丈夫そうなのでそのまま肩口へと伸ばし、そのまま下へ、肩胛骨をなぞり、

「・・・ん」

広背筋、

「・・・は」

背中のくぼみ、

「・・・ふぁ」

・・・ちよつと待て、この水着の下どうすんだ？ホックタイプで、そのまま塗ると水着の下に日焼け止めを塗ることができない。ヒモとかだと塗らなくて良いんだろうが、これは結構な面積がありそうだ。水着の下は特に塗らなくても良いのか？しかし少しずれたりしたら、そこだけ日焼けしそうだし・・・。うーん良く分からんな。・・・とりあえず、水着の下に手入れるしか無いか。ちよつと恥ずかしいが、しかたないか。水着の下にさつと手を入れ、塗ってやる。

「・・・・・・・・っ！」

真ん中から手を入れて、徐々に外側へ、

「・・・・・・・・！！！」

脇腹に触れそうな所で手を抜いた。

「・・・・・・・・っ！」

はあ、最初は女の子の肌の柔らかさに緊張したが、中々どうして綺麗に塗ろうと集中してて、塗り始めると気にならないもんだな。

と、野谷さんは顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「どした？ちゃんと塗れてなかった？」

「・・・・・・・・大丈夫」

野谷さんは小さく顔を振るばかりだ。・・・水着の下は流石にまぶかったのかな。野谷さんってあんまりそういう事口に出さないから、内心では怒ってるのかもしれない。

「水着の中ってやらなくてもよかったのか？ごめん」

こういうときは素直に謝るべきだよな。

「……大丈夫……だから、……びっくりしただけ」

とりあえず怒ってはいないらしい。良かった。

「ふふふ、上村さん、日焼け止め塗るの上手ですね。私もお願いしても？」

後ろで見ていた鬼谷さんが、そういつつ野谷さんの横に座る。

まあ野谷さんのをやった手前、鬼谷さんだけ恥ずかしがってできないってのもな。覚悟決めるか。

鬼谷さんは、綺麗な髪をまとめて前に回して、背中を露出させる。その仕草が女性らしすぎてときどきする。

とりあえず、鬼谷さんの順番で日焼け止めをぬる事にする。首筋から肩口へと広げて、肩甲骨へ。

「……中々くすぐったいですね」

「ぬお、すまん」

鬼谷さんは、肩甲骨へ日焼け止めを塗った時点で背中を少し背中をのけぞらせた。

「いえ、大丈夫です。続けてください」  
「そうか」

鬼谷さんは、自分の反応にちょっと照れながら微笑んだ。

鬼谷さんの水着はヒモタイプなので、そのまま塗り上げる。これ  
では自分で塗れるはずだ。

「私も、ひもじゃない方が良かったですかねえ」

と、鬼谷さんはちょっと残念そうであった。これ以上俺を辱めな  
いでください。

「ねえーけいいー」

「ん？・・・ぶっ」

野谷さん、鬼谷さんと続いたら後は山城さんである。お前もか、  
思いながら振り向いた先には、寝そべりながらビキニのひもを解  
いて、山城さんが扇状的にこちらをさそっていた。何やってんだあ  
んた！

「日焼け止めぬってー」

「ちょ！その格好違うから！普通サンオイル塗るときだから！！」

「へー、サンオイル塗るときならこうやって塗ってくれるのー？」

「いやいやいやいや！！」

使いどころ間違いすぎである。と、山城さんの後ろに、満面の笑  
みで日焼け止めを持った志貴崎さんが。嫌な予感しかない。

ボタボタボタッ

「ひゃああああー！！」

志貴崎さんは、山城さんの背中に勢いよく日焼け止めを投下。不

意打ちを食らった形となる山城さんが悲鳴を上げる。そしてそのまま志貴崎さんは、山城さんの横に腰を下ろし、山城さんの背中に落ちた日焼け止めを塗り広げる。

「ぎゃああああー!!」

まともに周辺状況が確認できない中で、よく分からないものが背中に落ちて、さらにそれが塗り広げられるのは相当な恐怖だろう。

「はっはー!どうだ」

「ちょ!?!? 椀!?!? やっ!?!? そこおし……!!?!? そこはぬんなー!!?!? にゃあああー!!?!?」

すさまじい悲鳴である。志貴崎さんはそれを聞いても全く動じない。やっぱあんた凄いわ。

「んー? 肩凝ってるな? どれ?」

「マッサージはじめんなー! やめれー!!」

志貴崎さんは当初の目的を忘れて、山城さんの肩をもみ始める。ああ、ばかばつかだ。何でこう、海に入る前なのにここまでバカ騒ぎに発展するんだ? この人達は。

「あれはあれで羨ましいですね」

「……私は嫌」

鬼谷さんのチャレンジ精神というか、この人もこの人で行動原理が良く分からなかったりするよな。

山城さんが、肩で息をしながら、志貴崎さんに砂を投げつける。

志貴崎さんは「どうした!？」とか言いながら海の方へ逃げていった。それを追いかけて山城さんも海へと走っていく。

そしてそんな二人を見て、野谷さんと鬼谷さんも海へ。

金城さんは、そんな俺たちの騒動を微笑しながら眺めて、椅子に座りながらのんびりさんしんをつま弾いていた。我関せずを貫くようだ。

さて、俺も行こうかな、というところで金城さんが口を開いた。

「圭君は能力者じゃないんだって?」

「え? はい」

いつもの適当金城さんではなく、その顔は無表情で、言葉も綺麗な標準語だ。

「彼ら、どう思う?」

「あいつらですか? 友達ですよ」

それを聞いた彼は、押し黙ってしまった。  
しばらくして、金城さんは口を開いた。

「俺は、仕事と割り切って彼らと付き合っている。友達にはなれない。この意味、わかるか?」

「・・・・・・はい」

金城さんと、俺たちの間にはつきりと見えるつながり、それは金だ。金城さんや、来るときに利用したジェット機の人達は、金を通して俺たちと接する。そこに友情や信頼なんて言葉は無い。

「あいつらが、その気になったら、俺はこの世にいらなくなる」

「それは・・・」

「俺は、あいつらが怖いよ。恐ろしい」

たかだか、沖縄を観光するガイドと、能力者ランク5。もしも、能力者達が少しでもその気になれば、金城さんは殺され、しかもその罪は問われない。それほどに、国にとって能力者というのは大事な存在だ。極端な話、国にとって大事な研究や実験に付き合いさえすれば、どんな事をしたって許されてしまう。

そんな存在が、自分の横に。

その存在を認めるのには、どうすれば良い？答えは簡単だ。関わらないようにするしか無い。じゃあ、関わるしかないなら？その答えが、金だ。

「けど、あいつらはそんな事しないですよ」

「わかってるよ。あいつらは良い奴だ。でも、ずっとそうとは限らない」

「・・・」

俺はここに来る前のキャシーさんのやりとりを思い出す。心と能力のバランスだったか。子供の心は、簡単に揺れてしまう。崩れてしまう。そんな時期を一人で歩んでいた彼ら。そんな中に突然出現した俺。その俺の存在が、国にとってどういった意味となるか？俺は、この時初めて自分の責任と、役割を知った気がした。

ならば、そう。俺は。

「お前はどうか？ずっと、友達でいられるか？」

「・・・はい」

「見返りが彼らとの友情ただ一つだとしても？」

「はい」

「一生彼らとすごす事になるんだ。そしてそれが短いか長いかわからない」

「はい」

俺は、彼らと歩もうと思った。

普通の生活に戻るとか、そんな事、できるわけがない。

だってこんなにも、こんなにも……。俺の中で彼らはこんなにも大きくなっているんだから。

そして、彼らと遊んだたったこれまでの数日間、今までの人生の中で、この数日に勝る『思い出』があつたか？

もう、戻るわけないだろ？

俺はまだ、野谷さんからVRFPSの教えをちゃんと受けてないし、山城さんに服の借りがあるし、他にも色々、知らないこと、沢山あるだろ？未練のこつてしかたない。些細な問題だが、金も借りたことになってるしな。

「あいつら、自分たちには『青春』がなかったって、言ってたんですよ」

「……」

「高校生ですよ。バカですよ。それで皆集まったらいきなり『思い出作り』だって。

それで、出会って三日で沖縄ですよ。

遊び方、知らないんですよあいつら。生き急いで、本気出して、何もかもを短縮して、濃縮して。

俺たちもう、友達とかとくに通りこしちゃってるじゃんって。



もつと、ゆつくりでいいんじゃないかって思ったんですけど、あいつら、楽しそうなんですよ。そして、俺も楽しかった。いや、楽しいですよ。

あいつら、俺いないと皆勝手に暴走して。

今俺いなくなったら、またあいつら一人ぼっちになってしまうんじゃないかって。自分勝手ですけど、そう思います。

・・・だから」

あいつらと、青春つくりますよ。

それが、俺の答えだ。俺たちの思い出作り、これから色々やるんじゃないか。とことん付き合ってやるよ。

「そうか。俺が言うのもなんだが、あいつらのこと、ちゃんと見てやれよな」

「・・・はい」

「おかあさんみたいにな」

「それはもういいです」

しっかり落ちつけなくていいよ。決心が揺らぐよ。

金城さんはいつもの顔に戻って、さんしんを弾き始めた。

チンサグ  
鳳仙花ぬ花や

チミサチ

ス

爪先に染みてい

ウユ

グトラウ

親ぬゆし事や

チム

ス

肝に染みてい

ティン

ムリフシ

天ぬ星々や

ユ

ユ

読いば読まりゆい

ウユ  
親ぬゆし事や  
グトウ  
読みやならん

鳳仙花の花を、魔除けとして爪先に染めなさい。そして、親の言う事を心に染め上げ、守りなさい。

天の星々は、数えようとすれば数えられる。しかし、親の教えには数の限りなど無い。

沖縄に伝わる、優しい音色の教訓歌である。人からの教えを守り、心を育て、栄え、浮世を渡れ。

砂浜の向こうから、山城さんの声が聞こえる。俺を呼んでいるようだ

「圭……！」

「おー！すぐいくよー！！」

遠目に見ると、志貴崎さんが、いやがる野谷さんを抱き上げて3mほどぶっ飛ばしていた。まったく。目を離すとすぐこれだ。

## 五話 曇りが一番良い天気？

さて、美しい沖縄の海であるが、この人達はいつものようにバカ騒ぎの上にバカ騒ぎを上乘せした。

まず、志貴崎さんが意味不明なハッスルをしまして、俺らをどんな打ち上げロケットよろしくぶっ飛ばしまくった。後ろから脇腹に手をつっ込まれたと思ったら、次の瞬間、空にいるのだ。むちゃくちゃ怖い恐怖体験であった。・・・チビッテナイヨ？

打ち上げロケットを体験して相当怖かったのか、マジ泣きした山城さんが、「椀以外耳をふさげ！」と叫び（軍曹か何かの演技なのか、俺たちは一斉に「サー！」のかけ声と共に耳を塞いでしまった）、人魚伝説『ローレライ』の演技を始めて、志貴崎さんを海に沈めた。

ローレライとは、スイスに古くから伝わる人魚伝説の一つで、もつとも有名な人魚の一人でもある。ローレライは、実らない恋に絶望し川に身を投げた乙女で、絶望のままに美しい水の精になった彼女の歌声は、人々を惑わし、舵を狂わせ、川底へと誘う。

そして、山城さんの歌声に誘われたかどうか分からないが、山城さんの周りに魚が魚群を作り出して凄まじい事に。

周囲の状況に気づき、山城さんが悲鳴を上げつつ女子高生の演技に戻ったところで、海底で覚醒したのか志貴崎さんが海上へと浮上してきた。

志貴崎さんの目の前には魚の群れ。半ば条件反射に魚を獲っては投げ、獲っては投げて砂浜に魚を打ち上げた。

それを見た野谷さんが、勝負魂に火をつけたのか参戦、やらないんじゃないのかよ魚獲り合戦へ。

しかし、山城さんは既にローレライの演技を止めていたので魚は一気に散開。勝負はドローゲーム扱いとなってしまった。

気を取り直して、次は定番のスイカ割り、と言うことで、スイカ割りを始めたのだが、皆の能力使用に触発されたのか、鬼谷さんが能力発動、スイカを一発で割りやがった。志貴崎さんが大人げないスネ方をするも、スイカを食べてすぐに機嫌を直した。餓鬼か。

スイカも食べたので、次はビーチボールでバレーのまねごとでもしようとなったが、ビーチボールの扱いに慣れてなかったのか、志貴崎さんが、一打目のトスをしようとしたところで、力加減を間違えて破裂させるというお約束をした。（力のコントロールできるんじゃないかったのかよ）

野谷さんが砂でお城を作り出し、かわいらしいなあとはんわかしてたら、どんどん規模がでくなり、外壁やら堀やら門やら、大変な大作になって、かわいらしいを通り超した造形物になりはてた。その後、その城を使って、志貴崎さんと野谷さんと、いつもちよつと二人の勝負を羨ましそうに眺めていた鬼谷さんが棒倒しで勝負し、なにげに鬼谷さんが勝ってた。

とまあ、さんざんにバカ騒ぎを続けまくるので、俺は突っ込み疲れて海の上でぷかぷか浮いて、精神の安定を図っている最中である。大きな浮き輪に、尻を入れて、どんぶらこどんぶらこという感じだ。海の上、遠くから聞こえる皆の笑い声と、雲に覆われた太陽からの熱と、海の冷たさ。あーこれだよこれ。俺の求めてた沖縄の海って、こういうのだよ。癒やされるー。

しばらく砂浜からあまり離れないように気をつけつつ、ぷかぷか

浮いていると、野谷さんがこちらに向かって泳いできた。

「ん？どうしたんだ？野谷さん」

「泳いでないから、疲れて流されてるのかなと思って」

「あー、心配させたか、すまん。のんびり浮かんでみたかったんだ。きれいだろ？海。だから」

離れすぎないように注意はしていたつもりだが、野谷さんたちの方から見ると、俺が流されているように感じたらしい。ちなみに、基本運動しているときの野谷さんは、リミッターを付けているようだ。

野谷さんは、俺の浮き輪に腕を入れて休憩を始めた。どうやら泳ぐのに少し疲れたらしい。

「本当、周りが全部海……」

しばらくのんびり二人で海の流れに身を任せる。

そういえば、野谷さんと志貴崎さんって、何であんな良い勝負ができるんだろう。志貴崎さんって脳のリミッターが外れているのは野谷さんと一緒だけれど、筋肉が自由自在に動かせるだけだよな。聞いてみるか。

「志貴崎さんと野谷さんって、何であんな良い勝負になるんだ？志貴崎さんの能力って筋肉が自在に動かせるだけだよな。スピードの時の勝負とか、野谷さんの圧勝になりそうだが」

「それは私が脳の制限を、普通の人間の最大値くらいまでに抑えているから。柎は多分、飛びぬけて動体視力が良いんだと思う。・・・視力以外にも、柎は筋肉を操れて、筋肉も常人以上みたいだけど、

それだけだとあの量の食事と力の説明がつかない。もしかしたら筋肉の他に心臓や肝臓、胃とかは常人以上の強い物になってるかも」

「何で心臓とか肝臓まで強い必要があるんだ？」

「あれだけ大量に食べても、すぐエネルギーにはなったりはしない。消化して運んで送り出さないと。それには最低胃と肝臓と心臓、あともしかしたら血も常人以上じゃないと、あの筋力と食事量は維持できないと思う」

「……………人間か？」

「……………本人に聞くのが一番早いと思うけど」

「俺はやめとく」

「私も」

二人で考察してるとどんどん志貴崎さんの存在が、人間という枠から外れていく（そもそもスタート地点から、人外だが）ので、とりあえずこの考えは保留ということにした。そういえば、野谷さんの能力って、どういう感じで制御しているんだろうか。

ということで、話の流れで野谷さんの能力の詳しい解説をしてもらおう。

「私の脳は、目からの情報量をどれだけ制限するかのリミッターが付けられる」

野谷さんの説明によると、まず、目からの情報を読み取る。それを脳がどれだけの処理をするか。単純にいえば、フレーム数と、その情報解像度にそれぞれ制限をおくことができる。

動体視力と、視力にそのまま置き換えても大丈夫そうだ。

単純に、野谷さんはこのリミッターを外しているいつもの状態だと、この両方の要素がマックスになる。あたりがスローモーションになり、遠くのがどこまでも認識できる。また、視界に移る全ての物も認識できる。その反動として、その情報処理しきれない

脳によって、体の反応全般が著しく停滞を起こす。つまり反応が遅れる。

たとえば、一昔前の地球と月との通信タイムラグみたいなものだ。月にロボットを置いたとして、そのロボットを地球から操作しようとする、タイムラグが6秒程度発生していた。野谷さんは体の中でそれに似た状態が発生している。

そして、脳のリミッターを取り付け、脳に負荷がかからない程度にまで制限を付けると、上記の彼女の能力の性能が若干落ちる。この前ゲームセンターで、俺の手と野谷さんの手が重なっても、野谷さんが気がつかなかったのはここら辺に理由があるようだ。

この制限レベルで、たとえば志貴崎さんと野谷さんが『ソニック』で対戦すると、野谷さんが圧勝するようだ。あれより早くなるのか・・・・と思うが、野谷さんの体、つまり筋肉自体は常人レベルだ。あくまで高速で展開されるカード一つ一つを高速で認識、計算、処理に余裕ができるだけの差だ。

しかしその差は大きい。オセロ等の対戦ゲームでのお互いの思考猶予時間が、1秒と60秒に設定されてるようなイメージだ。一方は一秒の思考時間で打ち続けなければいけない。そして自分は60秒ゆっくり考えて落ち着いてプレイできる。野谷さんは、志貴崎さんと対戦しているとき、その差をできる限り埋めるようにリミッターを調整しているらしい。

だから対戦しているとき野谷さんは涼しげで、志貴崎さんは神経をすり減らしていたのだ。あの勝負の裏にこんなことがあったのか。

例えば、ゲームセンターでのホッケーの時も、志貴崎さんはある程度力を制限して戦っていたわけだしな。フェアプレイの精神というか、この二人は純粹に勝負をする事が楽しい人たちみたいだ。

また二人でぼけつと海を漂う。遠くから山城さんの叫び声が聞こ

えてくるが、おそらくまた志貴崎さんが要らん事をしているのだろう。あの山城さんの叫び声からして、まだ大丈夫なレベルだと判断気にしないことにする。

「私、圭達と出会えてよかった」

野谷さんが、突然そんなことをぽつりとつぶやいた。  
俺は照れくさくなって、

「まだ会って4日じゃないか」

と、自分の心にうそをついた。ほんと俺も、皆と出会えてよかったと思ってるが、素直になれない。

「今はまだ4日かもしれないけど、……これからもずっと皆と一緒に、でしょ？」

照れて顔を少しだけ染めた野谷さんの瞳には、確かに確信の光があった。まっすぐな瞳。その瞳はこれからの日々と、これまでの日々と、今の俺達を全て見通す常人ならざる者の眼差し。

「そうだな。きっとそうなる」

俺は自然と野谷さんの頭をなでた。海の水を吸って、少し重くなった野谷さんの髪に手を絡める。

野谷さんは気持ちよさそうに目を瞑り、俺の手の感触と、海の波間にまどろんだ。二人で波に揺られて、これからもこのバカ騒ぎが続けばいいな、と願った。

……そろそろ山城さんの叫び声が、デッドラインに届きそう



だったので、俺達二人は砂浜へと向かって泳ぎだした。まったくのんびりさせてくれよ。

「あー遊んだー！」

山城さんが、敷布団に倒れこんだ。時刻8時である。沖縄の夏は、いつまでたっても暗くならない。誰も時計を確認しないので、6時くらいまで結局ノンストップでワーギヤーやってた。

ご飯を食べてからホテルに移動だと、眠くなって仕方がないので、今日はホテルの部屋でご飯を食べて、そのままもう寝てしまおうという志貴崎さん案に乗る形となり、俺達は海からそのままホテルへ直行。皆で交代でお風呂（せっかくのでかい風呂を、半分に分けるのはもったいないので、混浴仕様のまま、男女交代で入る事にした）に入って、のんびりくつろいでいるところだ。

夕食を食べるにはいい時間なので、志貴崎さんが夕食の指示を出す。

その間に、野谷さんが鞆から8面体力カメラを取り出した。静かにうる駆動音。

「お帰りなさい、皆さん」

irisさんが浮かび上がる。

海だということで、今日はirisさんは連れて行けなかったのだ。このカメラ、見た目的には防水っぽいのであるが、irisさん曰く「私の本能が海に近づく事をゆるしません」らしい。どんな本能だよ。

「ただいまー」

山城さんはもう完全にふとんに寝転がってだらけモードである。  
浴衣が着崩れそうになっているんだが、大丈夫だろうか。

「海はどうでしたか」

「きれいだったよー」

「キジムナーはいましたか？」

「キジムナー？」

「はい。体中から血を流しながら、魚ー魚ーと言いながら徘徊する  
全長6mの大きな」

「ちよつと待つて、なんだそれどこ情報だよ。絶対違うからねそれ」

キジムナーが何なのかまったくわからないが、その情報は絶対な  
にかの間違いだと想う。

「ふむ、海は楽しかったぞ。棒倒しではまさか鬼谷に負けるとは」

「ふふふ、砂の動きと、棒の傾き、そして砂にかかる荷重を細かく  
計算しましたからね」

「ぬ、まさか能力を使っただけ」

静かに微笑むばかりの鬼谷さん。この人、すごい無駄な事に能力  
使ってやがる！しかし、電磁波を読み取ってそれを細かく計算つて、  
もしかしてすごい離れ業をやってたんじゃないのか、たかが棒倒し  
に。この人も意外と大人気ない・・・いや、これまでも思い起こ  
せばその片鱗は見せていたような気がするな。

皆であれこれ今日の出来事をirisさんに報告している間に、  
結構な時間がたっていたようで、料理が運ばれてくる。

エビチリ、ゴーヤーチャンプルー、ラフテー、オムライス、ステーキ・・・まったくもってまとまりがない。志貴崎さん自分が食いたいやつを片っ端から頼みやがったな。

「目にうるさい食卓になったな」

「・・・すごいカラフルだねー」

赤に黄色に緑に茶色に・・・何色でも取り揃えていますって  
いうくらいに色であふれている。

「まあ、美味ければそれでいいじゃないか」

そういいながら、志貴崎さんは皆にオレンジジュースを配った。  
・・・においを嗅ぐと、どうやらオレンジではないようだ。何の  
おいだろうか。黒いつぶつぶも浮いている。

「これ何だ？」

「パッションフルーツといってな、南国の果物だな。酸味があつて  
美味いぞ」

聞いたこともない名前の果物だ。皆もこの飲み物に興味しんしん  
のようだ。

いい加減腹も減ってきたし、さっさとこのカラフルなフルコース  
を食べる事にしよう。

「まあ、美味しいならいいか。それじゃ食べるか」

「おー」

「いただきますー」

皆それぞれ好き勝手に皿を取って食べる。

パッションフルーツのジュースは、果物を潰して果汁を出した生ジュースのようで、とてもおいしかった。体もぼかしてくる気がする。なんとも沖縄らしいジュースだ。

「おいしー！ 椀これまだあるのー？」

「うむ。いろいろあるぞ。マンゴーとかどうだ？」

「それも絞ったやつなの？ 豪華ー！」

山城さんは大変気に入ったらしく、いろんなジュースを小さなコップに分けて飲み比べをはじめた。

皆もそれに参加し、色々なジュースを飲み比べたり、ご飯を食べたり、なかなか騒がしい夕食となった。

「・・・・・・・・圭い」

「上村さ〜ん、えへへ〜」

「ちよっ！！ 二人とも！！ どうしたんだよ」

どんな流れでこうなったのかわからないが、野谷さんと鬼谷さんが俺に絡み付いてきていた。

野谷さんも、鬼谷さんも、心なしか目が座り、頬を赤らめている。左腕に野谷さんが絡みつき、右腕に鬼谷さんが絡み付いてきている。二人の体温が浴衣越しに手を伝ってくる。お風呂で落としきれなかった海のおいと、おそろいのシャンプーの匂いにまぎれて、女の子の香りが俺の鼻腔をくすぐり止まない。

さっきまで皆でご飯食べたりジュースを飲んでいただけなのに。  
・・・・・・・・ジュース？

そういえば先ほどから、なんとなく脳の奥がぼんやりしている気がする。・・・もしかしてこれってお酒じゃ？

「志貴崎さん！これお酒！！お酒でしょこれ！！」

「んん？そうだが？」

さも当然のように言ってくれる。

「ちょー！俺達学生だろうが！！てかジュースじゃねえのかこれ！！」

「誰がジュースだと言ったよ。これは美味いぞとしか俺は言っていないぞ」

詐欺だー！！

「ふふん。修学旅行といえ、ちょっと酔がって背伸びをしたがるものだろう？」

「うわー！こうなったらもう志貴崎さんは止まらない！！こうなったらirisさんにとめてもらうしかない！！」

「irisさん助けてー！」

「不良児の飲酒は法律で禁止されていませんが」

「不良児でもだめだから！！酒のんじゃだめだからー！！」

悪い方向にirisさんは融通が利きすぎる！！AIじゃないだろこの人！！

「上村さん私達放っておいてしゃべるなんてだめですよ」

鬼谷さんが俺の顔を、両手でがっちりとはさみ強引に向きを変えさせられる。そこには鬼谷さんのアップが。化粧は落としているのだろつが、銀色の繭と睫毛が揺れて、俺の目をじっとみつめる。鬼谷さんの少しアルコールを含んだ吐息が、顔にかかる。  
一気に心拍数があがる。

「……圭、……熱いの」

反対側から野谷さんが、胸を俺の手に押し付けながら、体重をかけてくる。やめてー！！やめてくれー！！

「あら。胸、好きなんですか？」

いたずらを思いついたような顔をしながら、鬼谷さんが、腕に力を入れて自分の胸を押し付けてくる。浴衣がはだけ、露出した部分と俺の手が直にふれあい、鬼谷さんの熱い体温が伝わってくる。

というか俺の考え読んでるだろこの人！！酒のせいで自制聞かないのか！！素数だ。素数を数えるんだ！！

「ふふ、動揺してますねー」

「……圭ー」

ついに野谷さんが俺のひざの上に倒れこんで寝だした。ぎゃー！！顔の位置！！野谷さん顔の位置それ危険な場所だよー！！

「助けて山城さーん！」

ふと、山城さんの存在を思い出して助けを求める。そういえば何だかさつきから静かだった。

「……何ー？」  
「……いや」

人形が居る。と思った。

山城さんは、口調こそいつもの女子高生の演技をしている時のそれだったが、その顔には、一切の表情すら張り付いていなかった。無表情をも通り越した何か。

人形の目と焦点が決して合わないように、山城さんの目線も、どこを見ているのかわからなかった。野谷さんのように全てが見えているわけではなく、山城さんが『どこを見ているのかわからない』。人間に限りなく近い何か。まるでロボット、精巧な人形。

『不気味の谷現象』という言葉がある。ロボットがどんな人間に近づき、リアルになればなるほど、人はその外見の小さな違和感に強い嫌悪感と不自然さを感じるという。

山城さんの顔はまさにそれだ。と思った。きっと、これが彼女が俺達の前ですつと演技を続ける理由なのだ。完全な人間に近い何か、動き、喋り、物を食べる。それは、不気味、という以外の何物でもない。しかし、それこそが彼女の……。

『愛されない恋人』、理解されない本質。彼女の本当の顔。

「どうしたのー？」

「いや、なんでもないよ」

きつと、今知るべきことじゃない。

「山城さんはこれ平気なの？」

「んーこれ？大丈夫大丈夫。ちよつともやってするだけー」

おそらく、お酒のせいで能力が上手く働いていないのだろう。

山城さんが、自分で決めたタイミングで、俺達を本当に信頼して、信用して、自分からその『素顔』を晒して話してくれる時がきつと来る。来ると良いなと思った。だから、今見た事は『無かった事』にしよう。

まあ、なんとなく動きが散漫な気がするので、お酒は確実によっぱらっている気がするな。

「これ、酒だからあんまり飲みすぎないようにしろよ」

「これ、お酒なんだー。椀でしょー」

「ふふん。美味いだろ？これも美味いぞ」

そういつつ、志貴崎さんは白い液体の入ったグラスを山城さんに勧めている。というかそれ以上すすめんなよ！！

止めに入ろうとしたところで、鬼谷さんがまた倒れ掛かってきた。

ぎゃー！忘れてたー！！これももうどうしょー！！！！

「私の事忘れるなんてひどいじゃないですかー」

「わー！離れて！というか考え読まないでー！！」

もうこれはお酒を飲んで飲んだ勢いで寝るしかー！！！！



## 間話 不良児達の円卓（前書き）

B LとかG Lチェックつけたほうがいいのでしょうか、どうでしょうか。ご意見あれば教えてください。

## 間話 不良児達の円卓

「桜、あんた謀ったでしょー」

上村達が酒に負けて寝てしまったので、志貴崎、山城、irisはテラスへと席を移した。

お酒によって、演技が上手にできなくなった彼女は、口調こそ女子高生の演技の時のままではあるが、その顔は、何も演技をしていないときの、素の状態となっている。何者にでも違和感を与える完璧な人形の顔。無表情をも通り越した何かが彼女の顔にはあった。

「ふふん。何の事かな」

志貴崎はあくまで白を切る。

「irisさんが何か言っただんでしょー」

「私は、桜が『ミキとケンカばかりになるので仲良くなるにはどうすればいいか』と悩んでいたので、ネットから検索をして『酒の席で口説く』という結果が出たので、教えました」

「はぁ……」

山城さんは頭を抱える。

「過ぎた事はしかたないだろう。まあ飲め」

志貴崎は、山城にずいっと泡盛の入ったグラスを渡す。

「あんたがいうな！まったくもう……ブファー!!」

若干あきらめの入った口調で、山城は薦められるまま泡盛を一口飲む、が、45度のアルコールは彼女ののどを簡単に焼き、胃に強烈な一撃を加える。

「げほっ・・・これ何、すごい味なんだけど」

「泡盛だ。美味いだろう？」

「強すぎるってば！！私はこれでいいよ・・・」

そう言いながら山城は自分のマンゴーサワーを取る。直絞りの真正銘高級取れたてマンゴーは、アルコールを完全に隠し、飲んでみただのマンゴージュースにしか感じられない。完全に『してやられた』形となってしまうた。

「まったく。私のこの顔は、もうちょっと私の心の準備をしてから見せようと思ってたのに」

「それで、大学生、社会人、主婦、老人の演技とどんどん答えを先延ばしにでもするつもりだったのか？」

「・・・」

「それで、演技をしたまま、その顔を見せないまま、皆とずっとやっていけると？」

「・・・」

正直、凶星であつた。山城には自分からこの顔を見せる事は、きつとなかっただろう、いや、絶対になかっただろう。遅かれ早かれ、志貴崎の謀にはまる運命であつたのだ。・・・彼らと一緒に居る以上、いつかは見せないといけない顔であつた。・・・それでも。

「圭、私の顔見て気持ち悪いって思ったに決まってる」

山城は、先ほどの上村の反応を思い出していた。絶対に彼女の顔

には気づいていた。それでも、精一杯いつもの口調をしようと努力していたが、普段から演技をしている彼女にとって、他人の演技を見破るのはたやすい。

ほかの皆と同じ。嫌悪、違和感、不快感を感じる表情。皆から、その反応が返ってくる事が、堪らなく怖かった。初めての友達だから、能力を晒しても笑ってくれる、友達だったから。

圭、いや、皆からはあの目を向けられたくない。

「上村が、そんな小さい男に見えるのか？」

「だって！まだ四日しか経ってないし！わかるわけないよ！」

「本当にそう思ってるのか？」

「う……」

山城は思わずたじろいだ。志貴崎は完全に怒っていた。山城の経験上、この男は常に自然体で、器だけはどこまでも広い男であると感じていた。実際、今現在、素の顔の彼女を目の前にしていても、なんとも思っていないようだった。

しかし、そんな彼の顔に浮かんでいる表情。純粹な怒り。友を見下された事に対する、ただそれだけに向けられるまっすぐに強い感情。

「今まで一人だった俺達をまとめて、好き勝手やつても怒らず、笑い、それどころか肯定し、答えを示して、導き、こんな所までついてきてくれたあいつが、お前のその顔を見ただけで、本当にお前を嫌うと？そう思うのか？」

「……」

「小さい。小さいな山城。お前は」  
「……」

こんな小さな事で？と志貴崎の顔が言っていた。

昨日の夜、そして、海で山城は冗談半分とはいえ、上村に能力を使用していた。彼・・・いや、彼らなら笑って許してくれると思った。何でだろう。いまさらながら思う。何で私は圭を含め、皆をここまで信頼していたのだろうか、と。

そして気づく。志貴崎の言葉によって。

上村はいつだって皆を導いていた。積極的なわけではなく、常に皆の案を最優先にしてくれて、それでもいつの間にか皆上村の後についていった。不思議な力が、彼には確かにあった。

だから山城は、安心して暴走する事ができた。安心して能力を使うことができた。危ないラインになったら、上村が止めてくれるという安心感がそこにはあった。

「私は小さい・・・」

「そうだ。小さいな。お前は」

ぬうつと志貴崎の腕が伸び、山城の頭に乗せられた。そのまま優しくなでられる。

「だって、圭は私の事を・・・」

「上村の事だから、山城が直接言ってくるまで、見なかった事にでもするつもりだったんだろう。だがあいつ、演技下手そうだからな」

「・・・うん、あれば良かった」

確かに、彼らしいと、山城は理由も特になく、そう思った。上村圭という男は、そういう男だと、確かな信頼がそこにはあった。

「野谷も鬼谷も、お前の顔を見ても、大丈夫だろう」

「・・・そうかな」

「ふふん。きつとそうさ」

今日の二人は、酒を飲んでべろんべろんの状態であった。多分山城の顔は見えていないだろう。皆にこの顔を晒せる日が来る……来るのだろうか。

「もう少し、考えさせて」

「お前の問題だからな」

「……うん」

しばらく黙って酒を飲む。空へと上る星々は、残念ながら軍基地の明かりによってそのほとんどを見ることはかなわない。赤い群の光に照らされた夜の雲達が、ゆっくりと流れ、どこかへと向かって歩いていく。

「さっきさ、主婦の演技とか言ってたけどさー」

「うん？」

「私が、結婚できるわけじゃないじゃない」

「能力者は幸せになれないって話か？」

能力者は幸せになれない。『人』とは違うために。違う体、違う心、違う命、違う中身。どこまでも分かり合えない。そのズレはどんどん大きくなり、歪んでゆがみ、擦れて切れる。

それは人と能力者だろうが、能力者同士だろうが、関係ない。

違うという事は、不幸という事。

「上村がいるじゃないか」

「圭が私を好きになってくれても……私が圭に恋愛感情を持てない」

上村が好意を寄せてくれるなら、それは嬉しいと、山城は思う。しかし、山城は人へ恋愛感情を抱かない。いや、『人間』を恋愛対象と見れない。それは犬が猫に恋愛感情を抱かないように。馬と鳥に子供ができないように。そこに、幸せなんてあるわけない。もし、彼が愛してくれるならば、自分の体なんて好きにしてもらって構わないと思うが、多分上村 圭という男は、それを望むような人間ではない。と山城は思った。

「別に恋愛対象に見なくてもいいじゃないか」

「……けど寄り添うってそういう事でしょ？ エッチ沢山して、好き合って、体くっつけあって、子供作って……」

「意外とやってみると楽しいものかもしれんぞ」

「それ以上は止めて。圭に失礼だよ」

「……そうだな」

志貴崎は素直に引き下がった。

しばらく志貴崎は空を見て、酒を楽しんでいる風であった。そして、唐突に口を開く。

「恋愛しなくても、愛せるだろう？」

「は？」

「俺達5人で家を建ててそこに住むというのはどうだ？ きっと楽しいぞ」

「……呆れた。本気？」

「本気だな。俺の理想の目的地点はそこだ。そのためにどんな努力も惜しまない」

上村、野谷、鬼谷、山城、そして自分。志貴崎の理想の関係。それはお互いがお互いを愛し、共に生き、暮らす事。性なんて些細な

問題だ。

愛した異性と二人でしか暮らしてはいけない。そんな一般常識、志貴崎には関係なかった。愛しているのならば、一人でも二人でも三人でも何人でも、果ては人種も種族も異星生物も関係ないではないか。性別なんて、彼にとってそれこそ些細すぎて気づかずに踏み潰してしまえる程度の問題だった。

「……はあ。もういいよ。けど、ちょっと急ぎすぎじゃない？」

「今回はちよつと仕方がなかった。上村の事でちよつとな、あとお前の事もあつたしな」

「私の事？」

「これでもう後戻りできないだろ？」

「……本当、呆れた。けど次からはもうちよつと余裕持つてやりなよー」

「ああ」

志貴崎は静かに笑うだけである。山城はため息をついて立ち上がった。

「もう私は寝るよ。椛はどうする？」

「俺はもう少し空を見てるよ」

「おやすみなさい、ミキ」

「おやすみ、irisさん」

テラスから室内に戻るとき、山城は立ち止まって志貴崎の背中に声をかけた。

「……椛のその、一緒に暮らすって奴」

「ん？」

「私は賛成だから」



「ふふん。そうか」

山城は心なしか照れながら部屋へと戻っていった。テラスにはもう志貴崎とirisしかない。

しばらく、時間を忘れたように志貴崎は空を眺めていた。どれくらい時間が経ったのだろうか、志貴崎は口を開く。

「山城は、俺のことを許してくれたと思うか？」

「どうでしょうね。明日仕返ししてくるかもしれませんよ」  
「それは恐ろしいな」

口ではそんな事を言いながら、志貴崎は心底嬉しそうに酒を一気飲みする。

「ところで、先ほどの話ですが」

「うん？」

「本当に5人で暮らしていけると？」

「ふふん。せつかく理解しあえる仲間ができたんだ。行けるところまで行こうではないか」

ずっと一緒にバカやって、遊んで、騒いで。それは世間一般で言う愛し合うとか、好き合うとかとは、明らかに違うかもしれない。

だが、志貴崎は思う。お互いに信頼しあい、頼り、頼られ、全てを任せられる相手が居れば、それは愛と何ら変わらないのではないかと。

そのために、まず皆の中心になる上村が必要であった。学園という特殊な場所に居る時点で、上村にはかなり早い段階で立ち振る舞いを迫られる、もしくは決めなければいけない時点が来るはずであった。

一日目、二日目と、彼と彼女達の反応を見ていた志貴崎は、さらに親交を強制的に深めるために、今回の沖縄行きを計画。主に上村の決意を固めるのが目的であった。

その目的は一日目の時点で達成される事となる。彼の言葉を引用するなら『貸してくれ』だった。

沖縄に来るためのチャータージェット機、一時間当たり160万円、スイートルーム一泊65万円。その他、豪華な食事や金城の案内など、単純に上村一人にのしかかるわけではないが、これからも続く沖縄旅行の事を考えると、彼が志貴崎達から借りると事なる金額は莫大な額となるだろう。

それこそ、簡単に払える払えないの話には収まらないレベルで。もちろん、志貴崎達は誰一人その借金を返してもらおうとは思っていないだろうし、金を出されても突っぱねるだろう。そして、上村もおそらく全てを払う気はない。・・・いや、払える気がしないと言った方が良いだろうか。

つまり、あれは間違いなく、自覚症状の有る無しにかかわらず、彼が志貴崎達と一生歩んでいく覚悟を決めた瞬間であった。

一安心した志貴崎であったが、その日のうちに山城が上村に能力を使った。これは志貴崎にとって嬉しい誤算であった。志貴崎の中で、山城からどう素面を引き出すかが一番の問題であったからだ。

能力を上村・・・無能力者に使用する。それは少なからずここ数日で山城が上村を信頼している事に他ならなかったのだから。

そして、それは今日叶った。

少し強引すぎる気は自分でもしたが、結果に志貴崎は満足していた。あとは山城自身の問題だし、彼女の心の問題にこれ以上ちよっかいを出す気はない。

もうあとは、純粹に沖縄旅行を楽しんで遊びに遊ぶつもりである。

「彼ら4人を愛していますか？」

「一般的な意味でか？」

「・・・・・・貴方の中の常識で」

気になる言い回しだが、それならば志貴崎は確信を持って答える  
しかない。

「ああ。上村も、野谷の、鬼谷も、山城も。全員等しく愛している。  
そんな事を聞いて、どうしたんだ？irisさん」

「貪欲ですね、桜」

「ふふん、目に入る物全てがほしくて仕方がない性質でな」

「・・・・・・」

「・・・・？どうした？」

irisはしばし沈黙する。

しばらく返答が帰ってこないと思った志貴崎は、二本目の泡盛の  
蓋を開けた。

「そこに、私は入っていないのですか？」

突然そんな事をぼつりとつぶやいた。

志貴崎はふきだした。

「ふは！すまん。irisさんを入れてなかったな。面と向かって  
言う事ではないだろう？それに、野谷とirisさんはいつも一緒  
じゃないか」

言うまでもない。

「そうですね。それでは、どれくらい愛していますか？」

「ふむ。難しい質問だな。うーん」

どれくらい、と聞かれると、なんとも答えに困るものだ。

「そうだな。チョコレート20キロ分くらいだな」

「なるほど。とても甘そうですね」

「そして重いぞ?」

「確かに、そうです」

志貴崎はirisの反応が心底たのしいというように、笑いながら酒を飲む。

「しかし、irisさんは意外と嫉妬深いな。嫉妬深い女は嫌われると、何かで言っていたぞ?」

「何でも手に入れようとする男は、女に嫉妬を抱かせる物らしいですよ?」

「なるほど。違うない」

「嫉妬深い女は、嫌いですか?」

「irisさんなら、気にならないな」

山城がおいて行ったマンゴーサワーに、志貴崎は泡盛を混ぜて飲んでみる。おお、これはいける。

「・・・そうですか。それでは一つお願いが」

「何だ?」

「私の事はどうか、『iris』と呼んでください」

「?いつもirisさんとよ・・・ああ」

志貴崎はにやつと笑う。時刻はそろそろ深夜の3時を回ろうとしていた。

「そろそろ俺は寝ようと思うが、『iris』はどうする？」

「そうですね、できれば部屋の中に入れてもらえれば助かります」  
「ふふん。了解した。iris」

志貴崎は、8面体カメラを手に取り、部屋の中に入った。

さて、今日はどこにいくのか。楽しい一日になればいいが。

六話 お静かに願います？

チリリリリリリリリリ

今日もまた、8時に設定したタイマーが俺の脳を揺さぶる。

ぼんやりと脳が覚醒してきて、昨日の大騒ぎを、だんだんと思い出してきた。何で海で泳いだりご飯を食べるだけで、あれだけ大騒ぎになるのだろうか。

女性陣に酒は厳禁だな。

鬼谷さんと山城さんは能力を制御できなくなるようだ。そして野谷さんは速攻で泥酔するらしい。酒を飲んだ野谷さんはあらゆる意味で危険すぎる！

そして、昨日の影響か何だか体が妙に重い。

ゆつくりと目を開ける。どうやら布団が掛けられているようだが、敷き布団では無い。・・・ソファの上だろうか。これは。

リクライニング式になっており、シングルベッドか、それを一回り大きくしたくらいに大きい。

恐らく、昨日お酒の勢いでその場で寝てしまって、山城さんが志貴崎さんがソファを倒してくれたようだ。あの二人お酒強そうだったもんな。

・・・志貴崎さんがもしお酒に弱かったらどうなっていたんだろうか、と一瞬想像して体中に寒気が走った。志貴崎さんが酒に強くて良かった！

・・・とりあえず起きるか。

そう思つて、ゆっくりと身を起こすそうとするも、何かが俺の体の上に乗っていて、起き上がることができない。どうやら体が重いのは酒の影響では無く、単純に俺の体の上に何かが乗っかっているだけらしい。

すっぱりと布団に入っていて、何が俺の体の上に乗っているのかわからず、何も考えないで布団をめくってしまった。

そこには熟睡する野谷さんと鬼谷さんが。

・・・。

・・・。

・・・。

え？

野谷さんは、俺に寄り添うように体をぴったりとくっつけ、上半身だけ俺の体の上に乗せる形で眠っていた。うつぶせになつていて顔は見えないが、俺のはだけた胸元に、彼女の体温と吐息を感じる。鬼谷さんは、まさに腕枕状態。銀髪が流れ、野谷さんの髪と所々混じつてしまっている。浴衣がはだけて、胸の谷間がはつきりと見えてしまい、その大きな胸が押しつけられて、色々と危ないです。

「ちょー！！何これどういう状況！？起き上がれないし！！起きて！！二人とも起きてー！！」

もう半ば狂乱状態だ。飛び退こうにも、二人ががっちり俺の体を固定しているため、どうにもならない。布団の中にこもっていたのだろう。女の子特有の香りが一気に舞って、俺の鼻腔をくすぐる。

ぎゃー！！落ち着け。落ち着け。体の血の巡りを意識するんだ。そう！素数！！素数を考えるんだ！！

そう無！！無だ！！いつものスルースキルを発動するのは今だ！全てのMPを消費する勢いで発動するんだ！！

ティロン

MPが足りない

上村 圭は かしこさ が足りない

何と言うことだ。俺には圧倒的にレベルが足りないっ！！

くそ、こんな事になるんだったら、近所の猫を倒して経験値を積んでおくべきだった。いや、猫を虐めるのは良くないな。そうだ！Gだ！黒くててかてかしてぬるぬるしてそうなあいつなら、きつと経験値の1や2くらいあるはず！

そうだ！！ロードすれば！！オートセーブを頼りに昨日に戻るのでは！？ええい、リセットボタンはどれだ！

くそ！！リセットボタンが見つからない！！

スタートとセレクトとRとLを同時押し。くそ、だめか。それじゃあ、しいたけボタンは！？くそ！！だめだ！！リセットコマンドはどれだ！！

これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』これは『非常識』

落ち着け。まずは開発者コマンドをオンにして、コンソールを表示、exit game「jinside」を入力すれば・・・。

「うっん」



鬼谷さんが、タイマーの音に不快そうに眉を寄せて、もぞもぞ動き出す。具体的には、さらに体を俺に押しつけて、顔を埋めた。

脳みそに電気が走り、目の前が真っ白になるのを実感する。

おお ぼんじんよ しんでしまうとは なさけない

鬼谷さん。それは刺激が強すぎます

「何やってるんだ。上村」

俺のじたばたを眺めていた志貴崎さんが、あきれたように声をかけてきた。

「この二人を起こしてくれ」

これ以上二人に密着されて、さらにもぞもぞ動かれでもしたら、俺の理性という名のリミッターが解放されてしまう。第二、第三、の封印を突破して、はてはヘル・ゲートすらも突き抜けて俺は赤ずきんちゃんを食べるオオカミのごとく

何だよ。ヘル・ゲートって。

「ふむ。相変わらず朝に弱いな。こいつらは。ほら、起きろ」

志貴崎さんはまず、野谷さんの浴衣の襟を持ち上げる。上半身だけ浮かされた形となり、首を持ち上げられたような猫のような状態になっている。そのまま左右にぶらぶらゆすられる野谷さん。

志貴崎さん、もうちょい起こし方ってものが。

「・・・う、・・・うつ？・・・・・・？？？」

揺すられながら起きた野谷さんは、自分が左右に揺すられ、しかも上に引つ張られている状況に困惑している様子だ。そりやそうだよな。

志貴崎さんは、野谷さんが起きたのを確認すると、手を離れた。また俺の胸の上に落ちてくる野谷さん。

「・・・圭？」

「・・・おはよう。どいてくれると助かる」

「・・・え？・・・ええ？」

俺の上に乗っている状況に困惑しながらも、慌てて野谷さんはどいてくれた。はあ。良かった。これ以上密着してたら本当にどうにかなりそうだった。

「・・・どうして？」

野谷さんは完全に昨日の記憶が抜け落ちてしまっているようだ。とりあえず野谷さんは置いておいて、次は鬼谷さんである。野谷さんがどいてくれたので、ゆっくりと体を起こす。

体を起こしながら、静かに鬼谷さんの頭を、腕から降ろす。

そして俺はようやく起き上がることができたのだった。

鬼谷さんをこのまま寝かせても仕方ないので、昨日の要領で肩を揺する。

昨日は髪を枕の上に上げていたが、酒を飲んで寝たせいか、今日は髪が暴れ放題となっていて、俺の揺する手にも彼女の髪が絡みつき、さらさらと流れる。

「鬼谷さん起きてー」

「……やあー」

「やー」ってかわいいなおい。酒のせいで、すっかり熟睡して幼児化でもしてるのか。

「朝だよ」

「……うん？……」

ようやく鬼谷さんが起き出し、昨日と同様ぼーっとしている。しばらくはまともな反応はできないだろう。

その間に、未だ疑問顔の野谷さんに、昨日の説明をする事にする。

「昨日、志貴崎さんが出したジュース、お酒だったんだよ」

「……お酒」

「それで、野谷さん酔っ払って、俺の上で寝ちゃったんだよ」

「……そう、……ごめん」

「いやー、うん。大丈夫大丈夫」

野谷さんは、昨日の事を必死に思い出そうとして、眉をひそめている。異性と添い寝してしまったことには特に何とも思っていないようだ。

もしかして、ぎゃーぎゃー騒いで赤面嬉し恥ずかしやるのって、俺だけなのだろうか。

「……おはようございます」

まだ目が据わっているが、意識がはつきりしてきたようだ。浴衣がはだけて、心ここにあらずな感じが、なんとも扇状的に見えて仕方が無い。

「おはよう。二人とも、お酒の匂いがしてるから、お風呂入ってき  
た方が良いでしょう」

「……ん」

「……はい」

もそもそと、二人は脱衣所の方へと向かっていった。

「両手に花だねえ」

見ると、山城さんが布団の上であぐらをかいてにやにや笑っていた。女の子があぐらつて……

今は女子高生の演技になっている。どうやらお酒の影響はもうないようだ。よかった。

「起きてるんだったら助けてよ」

「やだよ。起きたら女の子が添い寝！！ってなんかこーらぶこめ  
っぽいじゃん？」

てへぺろ（・>）とかかわいい顔になっているが、あぐらを  
しているには変わらない。大変シユールな光景である。

「明日は私も混ざろっかなー」

「やめて！俺のオオカミが！！」

「おおかみ？」

「……」

意地悪な顔で笑う山城さん。にやにやと、しばらく楽しそうに  
していたが、ふと真顔に戻る。

「昨日の私の顔さ」  
「ん？」

その顔は、真剣で、何か思い詰めている風でもあった。

「もう少し、時間ちょうだい」

思い詰めているようにも、泣き出しそうにも、すがっているようにも見えた。きっと、昨日の顔は、山城さんの一番見られたくない場所。それを晒すのには、大変な勇気と、覚悟が必要だ。

それを彼女は、俺にいつか話してくれると言っているのだ。

「しゃべりたくなかったらー」

「うん。知って欲しい。けど、もう少しだけ・・・」

「・・・もし山城さんが、『何者』であつても、俺、山城さんと、友達で居るから」

「うん」

山城さんは、そう言つて、少しだけ目に涙を浮かべていた。

きつと、あの顔をさらして、何度も何度も、色んな別れを経験したのだらう。しかし、俺たちは『能力を晒しても大丈夫な友』を求めて集まつた。

山城さんの素顔が、生い立ちが、人生が、どう言つたものであると、俺は・・・いや、俺たちは受け入れて、それでも笑い合える仲にならないと、いけないんだ。

「ふふん。何とも『青春』らしいじゃないか」

「友情、という物ですね」

「昔の漫画で見たが、河原で殴り合つて親交を深めるらしいぞ」

「なるほど。『言葉にできない感情』を表現するのに、そういった

手法を用いるのですね」

「きつと、お互いを良かれ悪かれ特別な相手と認めて、殴り合い、相手の本質が理解できるのだらう」

「複雑極まり無いプロセスですね。『人間』とは、とても入り組んだ精神構造をしていると再認識しました」

「本人達は単純な感情の流れなんだろう。周りから見ていると、それは奇怪にしか見えない」

「なるほど。流石椋ですね」

志貴崎さんは、俺たちのやりとりを見てirisさんと勝手に盛り上がってる。本当仲いいなあ の二人。

「私もお風呂はいつちやおうかなー」

もういつものテンションに戻った山城さんは、すつと立ち上がり、脱衣所へと消えていった。

それを見送った俺は、ソファに座り直り、志貴崎さんとirisさんと向かい合う。

「・・・何で酒なんか出したんだ？」

「美味しい酒が見つかったな。美味かっただらう？」

「・・・おいしかったけどさ・・・。はあ」

この人は何か考えてやってるのか、何も考えていないのか本当に良く分からないな。・・・気にするだけ頭が痛くなるだけなような気がする。

「あんまり学生から外れたような事するなよ？」  
「了解した」

ニカツと良い笑顔をする志貴崎さん。この筋肉め。

「今日はどうするんだ？」

「そうだな。あとは喫茶店と、アクアリウム・・・水族館だな」

「は？・・・あ」

志貴崎さんの言葉に、しばらくして合点がいった。そうだ。この旅行の一番最初の目的。

俺はアクアリウム。

山城さんはプール。

鬼谷さんはカフェ。

野谷さんは温泉。

志貴崎さんは、それを一つ一つ忠実にクリアしていこうとしているのだ。なんともまあ、律儀というか、なんというか。俺たちの中で、一番まじめなのは、この人かも知れないな。課程はどうであれ。

「じゃあとりあえず水族館だな。確か近くにあったろ」

「そうだな。この県唯一の水族館だ」

志貴崎さんは、これから向かう事になる水族館に思いをはせて、にやりと笑った。

今日の天気は雲一つも無い晴れ。

どうやら、日焼け止めと日光対策を万全にした方が良さそうだ。

六話 お静かに願います？（前書き）

まとめちゃうお



六話 お静かに願います？

「ここが沖縄唯一の水族館のある公園『海洋博公園』さー」  
「ひろーい」

そんな訳で、俺たちはこの県唯一の水族館を内包する、国立公園へとやってきた。

俺たちの宿泊するホテルから数十分。海沿いに広大な敷地を持つ公園に俺たちは来ていた。

1970年頃に運営を開始されたこの公園は、それから2000年経った今も、何度かの改装や面積拡大を経て今なお沖縄最大の観光施設として機能している。

その広大な面積の中に、植物園、水族館、郷土資料館、プラネタリウム、ビーチ、博物館、琉球時代や三百年前の沖縄の村をそのまま再現した郷土村なんてものもある。

正門をくぐると、いきなり目の前に広大な海が広がる。公園の敷地自体が、正門から海へと向かってだんだんと下がっていくため、このような光景になるのだろう。

なんとも開放的な印象を受ける公園だ。道も広く、移動にはエスカレーターか階段を使う。

「流石観光に力を入れてるだけあるなあ」

掃除は行き届き、地面には細かい色違いの石を敷き詰めて色々な模様を描いている。木々の手入れも隅々までやられているようだ。

「早速水族館にいくさー」

金城さんの先導に、素直について行く俺たち。エスカレーターを利用し、海の方へとどんどん降りていく。

と、俺たちはいつもの習慣でエスカレーターの左側に立ったが、金城さんは真ん中に立っていた。

「あれ？沖縄つてもしかして、エスカレーターの右とか左に寄る習慣無いの？」

「あ！金城さん真ん中だー！」

「本当ですね」

「？？何で-？」

金城さんは、そもそも俺たちが左側に立っている理由にすら、合点が行ってないような顔をしている。

「こう、皆一方によつてたら、急ぐ人が通れるじゃない？」

「そーばー？うーん、考えてみると、そうかもしれないねえ」

金城さんは、自分の立ち位置と、俺らの立ち位置を見比べて考え込む。

「・・・何で、エスカレーターを急いで使わないといけんばー？階段使えば良いさー」

「・・・・・・・・」

これが沖縄人の思考か。エスカレーターを急いで使う人なんて居ない。居たとしても、その人のためにどちらかに寄る必要なんて無い。

「エスカレーターは、のんびり使うものさー」

もう何も言うまい。

「おおー！ひとでー」

エスカレーターを降りた先にはすぐに水族館の入り口があり、ドキドキしながら入った先にはすぐに低い水槽が並んでいた。

ヒトデや珊瑚など、色とりどりの海の生き物があり、実際に手で触れて触れるようになっていいる。

「色んな色があるんだなあ」

「本当ですね」

皆でヒトデをいじった後もどんどん奥に入っていく。小さな魚や、海藻、擬態する魚を見ながら順路を進む。

志貴崎さんは、魚を見ながらこれはうまそうとかこれはまずそうとかしか言わない。あんたの物事の判断基準はそれだけしかないのか。

ちなみに、irisさんは施設内での携帯の使用を控えるようにとのお達しを受けて『部屋』で留守番である。観光施設はそういう所が多いので仕方ないな。

「「「「「おおー」」」」」

と、いきなり道が開けて大きな広場に出た。

この水族館のほぼ全てのスペースを使用した巨大水槽だ。技術の発展により、分厚い厚さが必要であった水槽ガラスは、厚さ0.5cmの薄い膜状の透明な金属に代替され、光のわずかな歪みすらなく水槽の中の魚たちを観察する事ができる。

人類が本当の意味で宇宙に進出して早100年。世界の工業技術も宇宙進出に合わせて格段に早まった。完全なアモルファス金属や、別々な金属の完全な混合合金を始め、果ては人工骨格、人工臓器等、これら『宇宙でできた金属』で代用されている物まである。

そういつた無重力状態でしか生成できない物質は、新しい種類の物が今なお俺たちの頭上で今日も試行錯誤する科学者達によって作り続けられている。

現在火星にあるプラントの建築、改築、増築は急ピッチで進められ、今や人々は完全に地球の外へもブルーカラー、ホワイトカラーが進出する時代となった。

現在製造されている『リボン』を用いて、地球とその衛星軌道上を周回する宇宙ステーションが繋がれば、その速度はさらに高まるだろう。

そして、その科学革新、工業革命の支援を受けた、近代科学の結晶の一例がまさに目の前に。沖縄の海を切り取ったような空間を俺たちの前に作り出していた。

巨大な蒼い壁を前にして、魚たちに俺たちが観察されているような印象さえ受ける。

何十匹、何百匹、もしかすると何千匹も泳いで居るであろう水槽だ。中にはジンベイザメや、エイまでいる。

その圧倒的な光景に、しばらく俺たちは言葉を無くして、ただ啞然として魚たちの群れに目を奪われた。

「すごい……」

「すげえなあ」

「ですねえ」

「……ん」

皆で『凄い』を連発しまくり、魚の群れに目を泳がせる。水槽の前には、色々な魚の解説プレートが置かれているが、種類が多すぎてどれがその魚なのか、まったくもって判断する事ができない。

志貴崎さん、よだれを拭いてください。

そのまま水槽にそって歩いて行くと、テーブルがいくつもあるスペースにきた。どうやら軽食を提供する場所のようだ。

「しばらくここで休息するか」

「ですね」

「はい」

昨日の海同様、利用客があまり居ない事もあり、すぐにスペースを取る事ができた。

金城さんが飲み物を買ってくるようなので、俺も飲み物を運ぶ手伝いに後ろをついて行く。

「アイスコーヒーと、さんぴん茶と、メロンフロート・・・」

金城さんはどんどん注文していく。

皆は金城さんのお任せで頼んだので、統一感など一切無いチョイスだ。

「・・・あと、ぜんざい6つ」

と、あろうことか金城さんはぜんざいを頼みやがった。

ぜんざい！？こんな、まだまだ夏まつさかりの沖縄のと真ん中で暖かい甘味とは。

「どうぞー」

そう言っ て出てきたのは、器に真っ 白に盛り上がったかき氷の山。  
・・・ なんだろっ これは。

「ぜんざい？」

「ぜんざい」

「え？ぜんざい？」

「ぜんざいさー」

「え？」

「え？」

金城さんに手渡されたおぼんの上には、『ぜんざい』と呼ばれる  
うつわに盛られた謎の氷の山が6つ。あ、おぼんの下には黒い汁が  
沈んでいるのがわかる。

どうやら俺のイメージしていた暖かいぜんざいとは違い、ここで  
言っぜんざいはかき氷のようなイメージで食べる物のようだ。

「おまたせー」

「おお、おかあさんそれなにー？」

「うまそうだな！」

「かき氷？」

「・・・ おいしそう」

「ぜんざいだ」

「・・・ え？」

「ぜんざいだ」

「・・・ え？」

皆俺と同じ反応しやがる。俺の手に持った『ぜんざい』と、皆の  
頭の中の『ぜんざい』は完全にイメージが異なっているようだ。

あたりまえか。

とりあえず皆の前に、ぜんざいを並べ、金城さんが皆に飲み物を

配る。

「冷たいぜんざい・・・不思議な感じだ」

「脳が混乱しますね」

「えー？おいしいじゃーん」

「・・・おいしい」

「冷たいのもいいなあ」

「ぜんざいは冷たいものさー！あつたかいのはおしるこっていうさー」

金城さんそれちよつと違う。

皆でしばしぜんざいの味を楽しみ、水槽を流れる魚を眺めた。

ゆるやかな時間が流れる。やっぱりこういうゆったりとした楽しみ方が水族館の醍醐味だよなー。

とか考えていたが、ふと見ると野谷さんの手がテーブルの上でぴくぴく動いている。目は水槽の方を向いている。・・・何をしてるんだろう。

志貴崎さんの手も同じようにぴくぴくしていた。何だ？

「野谷、何匹だ？」

「一分で6匹」

「ぬ・・・」

どうやら脳内で魚獲りをしているらしい。少しものんびりした時間を過ごせないのかこいつら。

「ねー！ちよつとクラゲのとこみてきていいかなあー！」

山城さんはさっさとぜんざいを食べ終わり、こちらの返答を聞か

ずに立ち上がると、さつさと歩いて行ってしまった。  
クラゲ、好きなのかな？

「わーがついていくさー」

金城さんが山城さんの後を追う。

「ふむ。クラゲか。亀とかもいるかな？」

山城さんが出て行くのを見てか、志貴崎さんもそわそわし出す。  
まったくこいつら・・・。

「・・・私も・・・見たい」

「ふむ。二人で見てくれば良いよ。俺はもう少しのんびり水槽を眺めてるよ」

流石に水族館では、大騒ぎにならないだろうと判断。二人で先に  
行っておくように促した。

自然と俺と鬼谷さんの二人つきりになる。

鬼谷さんは面子の中で静かな方なので、無言の時間が苦痛になる  
わけでもない。特に会話らしい会話もせず、ぼけっと水槽を眺め、  
青い光に包まれて精神がゆっくり落ち着いていくのを感じる。

「あの、昨日はすみませんでした」

「え？」

のんびりしていると、鬼谷さんがそんな事を俺に言ってきた。  
顔を俯かせて、その表情は曇っている。

「お酒に酔っていたとはいえ、上村さんの考えを読んでしまった」



「ああ」

言われて、昨日の惨状を思い出してしまつて、苦笑いを浮かべてしまふ。

「お酒で記憶がぼんやりしていますが、何か大変な事をしてたり・・」

「あー、えーつと」

「したんですね・・」

「いやあ！したというかまあ、大丈夫だから。特になんともなつてないからさ」

鬼谷さんの表情はどんどん暗くなり、今にも泣き出しそうな域に達してしまいそうになっている。

「・・・・」

「あー、えーつと」

鬼谷さんはもう、完全に沈み込んでしまった。うーん、どうすればいいのだろうか。

「大丈夫だつて！お酒で悪酔いして、ちょっと絡まれたくらいだから！」

「・・・・うつ・・」

昨日の出来事をそのまま教えても、鬼谷さんをさらに恥じ入らせるだけだろうし、かといって、あることないことを吹いて回れるほど俺の肝っ玉も大きくないし、頭も回らない。事実を濁して伝えるしか無い。

「……私の能力は気持ち悪いでしょう？」  
「え？……ああ」

人の考えを読む能力。人の考えを読み、その先に周り、いつでも相手の有利に立つ事ができる。もしもその能力の制度が『なんとなく』のレベルであつたとしても、それだけで脅威になるだろう。

「私に近づく人は、皆、私の能力を恐れました。考えが読まれる。それはとっても恐ろしい事です」  
「……」

彼女に近づいた人間は、彼女の能力を知り、恐れて離れていった。しかし、そんな彼女を必要としている人達もまた、居た。しかし、彼女を人間としては思わず、『道具』として扱ってきた。

「それでも、私の大切な『縁』だと思いました」

彼女は今までの十数年を、そうやって、引つ張れば切れるような『縁』にすがって生きてきた。惨い事も、理解できない事も、見える事も、見えない事も、見てはいけない物も、汚い事も、全て等しく彼女は愛した。そのか細い蜘蛛の糸に寄り添う事しかできなかった。

「でも、疲れちゃいました」

そういつて彼女は笑う。疲れたように。すさんだように。彼女の心は、ついに耐えきれなくなってしまった。幼い心に、幼い体に、罪の意識が彼女をすり潰した。

そして彼女は、俺たちと『友達』になった。この『縁』は、引き

たら切れるのだろうか、どうなるのだろうか。今まで見たことの無い『縁』に、彼女は戸惑い、距離を取った。

この人達は、私の能力を知っても『すごい』と言い、どこかへ遊びに行こうと誘ってくれる。その関係は、とても心地よく彼女の心に染み渡った。

そうして、俺たちの後をついてきた。

それだけで、十分幸せだと思っていた。

だけど。

きつと、昨日の酒の席をきっかけに、もう押さえきれなくなったんだろ。俺に能力を使ったとか、使ってないとか。そんなことはきつと関係ない。吐露してしまうしか、もう彼女には残っていないかったんだろ。

こんな私でも、側に居ていいですか？

彼女の心に、触れた気がした。

六話 お静かに願います？

二人の間に、静かな時間だけが流れる。

水槽から射す青い光が、鬼谷さんの銀色の髪に当たって、綺麗に揺らめく。

「私は」

鬼谷さんは口を開くが、それ以上言葉が続かない。俺は、静かに待つ。

彼女の今まで人生の吐露に、俺の口を挟む隙は、無い。

「私はこの能力が怖い。もしも、この能力がいつか暴走でもして、逆に私の考えが相手に伝わったら？もしも、強い力を浴びて相手の脳にダメージを与えてしまう事があったら？」

もしも、今まで慣れ親しんだ能力が、突如、自分の制御を離れて、自分に牙を剥いたり、相手を傷つけたら？

「私は耐えられない」

それでも

「・・・それでも、私は友達が欲しい。いえ、『人』でありたい」

この道筋の先に、何が待っていようと、誰かと繋がっていたい。誰かと話し、ふれあい、遊び、感じていたい。その先が、地獄だろうが、天国だろうが、絶望だろうが、それでも。

「私は卑しい人間です。他人を疑う事しか知らず、誰も信じず、誰も受け入れず、そして自分のことさえ信じられない」

私は 私は 私は 私は

「それでも、私は・・・」

彼女の中に渦巻く物。その一片が、彼女の口から漏れ出た。それは彼女の心にある黒いもの。汚れて、卑しく、捻れて切れた、腐った何か。

それでも、俺はそれを、美しいと思った。・・・いや、愛しいと・・・。

「俺さ、皆と初めて一緒に遊んだとき、何が一番怖かったと思う？」

「え？・・・それは」

突然の話の方向転換に、鬼谷さんの目が点になり、その後、沈んだ顔になる。

鬼谷さんは、きっと俺たちがバカ騒ぎしている横で、笑いながらも、心のどこかで楽しめていなかったんだろう。楽しむことを罪だと思っそれてしまっていたんだろう。

しかし、きつと彼女は、その罪さえも忘れて、海を楽しんだ瞬間があつたんだろう。皆と一緒に居るのが、かけがえの無いものだと思っただろう。

だから、俺に、こんな話をしてくれている。

本当、バカだよ。

遊べばいいのに。楽しめば良いのに。ハメを外せば良いのに。騒

ぎに加われれば良いのに。

本当、遊び方、知らないんだから。

ひどく、不器用だと思った。真面目すぎる。頭の中凝り固まって、バカじゃないのか。

人を疑ってとか、信じないとか、受け入れないとか。そんな難しい事ばかり考えて。本当。バカじゃないの。バカにバカを上乗せして、さらに三つくらいバカを被せても足りないくらいにバカだ。バカだよ。鬼谷さん。貴方が俺たちの中で一番のバカだ。

「志貴崎さんだよ。一番志貴崎さんが怖かった」  
「……え」

「だってさ、3mジャンプするんだよ？ リンゴとか指先一つで爆発させそうじゃない？ そんなのが横歩いててさ「お、上村。これ食べるか」とか言つて、アイスでも渡してきて、それが勢い強くて胸にでも当たったら10m位吹っ飛んで、俺なんておだぶつじゃん？」  
「……」

「海でもさ、簡単に俺なんてぶっ飛ばされて、気づいたら海の上だよ？ 鬼谷さん、あれ怖くなかった？」

「私は最後だったの……その……楽しかったです」

恥ずかしそうに頬を染める鬼谷さん。

「俺はちよつとちびつた」  
「……」

笑ってはいけないという感じで、口をつぐむ鬼谷さん。その顔は十分にひょうきんですよ。

「ホテルでもさ、志貴崎さん力加減とかそんなの信用できないけど、ベッド二つしかないからさ、男同士で寝るしか無いって覚悟決めたら、山城さんが川の字とか言い出して。負けた山城さんは俺に能力使ってくるし」

「・・・ふっ」

ついにぶるぶる震えだした。ひどいな。俺の覚悟、そんなに面白いのか？

「野谷さんもさ、俺突っ込み疲れてるのに志貴崎さんと勝負始めちゃって、ヒートアップしたら俺止めないといけないじゃん？あんな嵐の中に止めに入るの、そろそろ本気で疲れてきたからさ、山城さんに頼もうと思ってさ」

「・・・山城さん？」

「止め！って軍曹が何かの演技でもして貰ったら二人ともピタって止まるんじゃない？」

「・・・ぶふっ」

変な声でたな。

軍曹がどれくらいエラい人なのか良く分かんが、山城さんの一言を聞いた瞬間に制止する二人を想像したのだろうか。

まあ、大変シユールな光景だろうなあとは思えるが。

「まーそんな訳で、皆、結構やりたい放題じゃないか。だからさ、別に鬼谷さんがそんな能力気にする必要なんてないんじゃないかな」

「・・・え？」

「考え読むだけだろ？山城さんとか志貴崎さんの能力が俺は怖いよ」

そう。別に鬼谷さんがどんな能力を持っていようと、気にするだけ無駄なのだ。これだけ皆やりたい放題やってるんだ。

こちらとしては、直接体に影響しない能力なだけ、鬼谷さんの能力の方が何倍も俺にとっては精神に優しい能力だと思われる。

「大体、山城さんとか「あんまりこの能力はつかわないよん」「とか言って置きながら、何か沖縄に来てじゃんじゃん使ってるし」

だいぶ出会ったときの山城さんが誇張されてる気がするが、きつと気のせいだ。

「鬼谷さんも、別に能力のことであれこれ悩んだってしょうが無いんじゃない？」

「しょうがない・・・」

「能力使ってもさ、「ごめーん」って言えばいいんじゃない？って事。それが」

友達ってもんでしょ？

俺たちは、能力を晒しても大丈夫な友達を得るために集まった。それは別に、能力の自重をして、子猫みたいに舐め合って寄り添うためじゃない。能力をお互いに使っても、笑い合えるために集まったのだ。

そして、最終目標は、掛値無い思い出を皆で作ること。そのために目下全力疾走中だ。

少なくとも、俺はそう感じている。

だから別に、能力を使っても、ごめんねって言えばそれでいい。本当にだめだったら、止めるって皆言う筈だ。

それでも切れない縁を、俺たちは作っている。いや、作りたい。

「友達・・・」

「抑えて抑えて、こんな場所ではき出しちゃうくらい弱ってさ、そ



んな顔しちゃってさ。鬼谷さん、バカだよ」

「・・・・・・」

「別に信じなくて良いし、信頼しなくてもいいじゃんか」

「・・・・え」

「友達だろ？恋人でもないし家族でも無い。皆、何か隠し事の一つや二つしてる。別に殺し合ってるわけでもない。敵とか味方とか、そんな事にもならないでしょ？」

「・・・・それは・・・・そうですけど」

「俺も、鬼谷さんに隠し事一つくらいしてるよ」

「え！」

意外そうに、鬼谷さんが目を見開く。そんなに以外なんだろうか。

「鬼谷さんは、潔癖症すぎるよ。そんな能力持ちちゃって、他人の考えがわかって、自分が一方的に隠し事してるのが許せなくて。けどさ。そんなの別に、俺たちに感じなくても良いじゃないか。」

俺たちは別に、鬼谷さんを利用しようとはしてないよ。一緒に肩並べて歩こうって言うてるだけなんだ。

ちよっと考えが読まれたって、それが何？」

「私は・・・・」

そう。考えが読まれた。それでどうなるのか。その結果俺たちはどうなる？何か変わるのか？

答え、何も変わらない。変わるわけが無い。ちよっと恥ずかしいな、と思うだけだ。・・・・まあ、流石にあんまり覗かれるのも嫌だが。

テーブルの上に置かれた、鬼谷さんの手がかすかに震える。

俺は思わず、そっとその手を握り、彼女の目を見る。

揺れる瞳に、迷いが見えた。

「鬼谷さん、俺たちとまだまだ遊びたいんでしょ？明日も、明後日も、もっと先もずっと」

「私は」

鬼谷さんの手の震えが止まる。

その瞳は、もう揺れてはいなかった。

「これからも居ていいのでしょうか」

「それを決めるのは鬼谷さんだ」

鬼谷さんは静かに微笑む。

「ええ。そうでした。これからもよろしく願いします」

きっと、彼女の心は、まだまだ汚れて黒い海の中、沈んでいるだろう。それでも、その一片を、少しでも綺麗に出来たのかな。そうだいいと思った。

「ふふ、男性に手を握られたのは、初めてかも知れません」

悪戯っぽく笑う鬼谷さん。

とたんに自分の手に意識が行ってしまい、自分のしでかした事に気がついてしまった。

「わっ！ごめん」

慌てて手を離そうとするが、鬼谷さんがかさず両手で俺の手を包んで離さない。

「・・・もう少しだけ、握っていてもいいでしょうか」  
「・・・あ、ああ・・・」

鬼谷さんは、凍えた手の平を温めるように、俺の手を優しく包んだ。

心拍数が急激に上昇するのを感じて、俺は居たたまれず水槽の方を見る。これで、鬼谷さんとの距離も縮まれば良いな。と思いながら。

そのまま、静かに時間だけが流れる。

二人で水槽を眺めて、優雅に泳ぐ魚達を眺めた。

彼女の心の海も、この海みたいに光り透ける海になる日が来るのだろうか。来るとすれば、それは、俺たちと一緒に居る時なのだろうか。

「友達・・・」

鬼谷さんはかみしめるようにつぶやく。

いつか俺たちの『縁』は切れるかもしれないし、切れないかもしれない。けど、切れるのが嫌なら引っ張って繋がれば良い。

強引な事が似合って、この関係を無にしたいかと思っただけ。そんな奴が、若干一名居るしな。

「俺は、皆がやりたいことについていこうって思ったよ。それは信じる事でも信頼する事でも無い。楽しそうっていう俺の自分勝手な感情だけ」

「・・・はい」

「けどさ、俺能力持ってないじゃん？逆に俺が居て良いのかわかってるって」

「そんな！上村さんがいなかったら！」

「何でだろうね。俺もさ、俺がいなくなったら皆ばらばらになるんじゃないかなって思うよ」

「・・・」

「自惚れかな？」

「いえ」

「鬼谷さんが、俺たちとまだまだ友達で、一緒になにかやりたいって言うてくれて良かったよ」

「え・・・」

「だってさ、『HALLO POINT』、4人だと数合わないじゃん」

「・・・」

「帰ったら、練習しようよ。俺、まだまだ皆より全然下手だからさ」

「友達って、そんな感じでいいんですか」

「友達ってのはそういうもんだ」

友達は特別な物じゃ無い。けど、欠けたら何かが続行できなくなる。そういう不思議な関係だ。そこに信頼も、信じる事も必要ない。ただ必要なのは、あやふやな『友情』という言葉だけ。青臭い二つの文字しか必要ない。

きつと、他の事は後からついてくる。

鬼谷さんには、まず、それから知って貰わないとな。

とつくに友達とか、そんな関係通りこしてるなんて、本人気づいてないみたいだけれどな。

「そうですか」

そう言って、鬼谷さんは静かに笑った。

と、二人で笑い合っていると、突然水槽に大きな物体が飛び込んできた。巨大な水槽なので、水面は俺たちの居る場所から目測10m近くは上の方となる。

「水槽の掃除？」

「それにしても何かスマートじゃないはいり……」

盛大な泡が引いていくのと同時に、その巨大な物体の姿が詳細に認識できるようになった。

志貴崎さんだ。

「何やってんだ!？」

「ええええええ!？」

二人で目を見開いて驚く。

どん引きだよ!

何やってんだよあいつ!!もう意味分からんわ!!何で水族館であんな事になるんだ!?

「ええええええええええええええええ……」

「……………」

もう「えええ」しか言葉が出ない。鬼谷さんは思考が完全に停止しているようだ。

何だよ。何で俺が目を離すと速攻でこっという事態になるんだよ。

「ど、どうしましょうかお母さん」  
「……………」

気が動転したのか鬼谷さんまで『お母さん』言ってくるし。

「見なかった事に」  
「だ、だめですよ！」

ええ…………『あれ』の関係者ですって従業員さんに言わないといけないの…………？俺嫌だよ…………。

「はぁ…………もう…………。とりあえず、従業員さん探して、あいつを引きずり出そう。ついでにサメ用の麻醉銃でも撃ち込んで貰おう」  
「効きますかね？志貴崎さんに」

「どうだろう、効くと思う？」  
「…………いいえ」  
「俺もそう思うよ」

結果？ええ。効きませんでしたよ。どん引きだよ。宇宙人め。

閉話 俺達は始点に立つ(前書き)

10000px, 10000ユニークありがとうございます！

## 閉話 俺達は始点に立つ

「良いんだね？」

「はい」

俺達は、その後もバカ騒ぎな沖縄旅行を続けた。

植物園探索、郷土村探索、鍾乳洞見学、ジャングル探検、パイナップル狩り、シーサー作り・・・等々。とりあえず思いつく限りを何でもやった。その詳細は、機会を見て紹介する事になるだろう・・・なると思う。・・・なるといいな。

ともあれ、俺達は遊びに遊んだわけだ。連日連夜。

そして疑問に思う

「あれ？俺達っていつまで沖縄いるの？」

と。

それに対する志貴崎さんの返答はこうだ。

「いつまで居たいんだ？」

つまり結局、旅行の行程なんて糞くらえ。ノープランで俺達は沖縄に飛んだわけだ。それで良くあれだけバカな騒ぎになるんだと、再度この人達の非常識さを再認識。

「帰るぞ」

「「「「え？」「」「」」

「帰るぞ。明日」



「……えええー！」「……」

「うるさい！こんな所でぐーたらやっていると腐るぞ！」

「いーじゃんもうちょっとーおかあさん」

「……帰るよ」

「はい」

とまあこんなやり取りの後、俺達は『都市』へと帰ってきた。学生の本分怠けてたら、一気に墮落するからな。

沖縄はまた行けば良い。何度でも。次への未練を残さないと、また皆でこれなくなるだろ？

そして、学園へ登校した俺は、学園長室へと呼ばれ、今に至る。

「俺は、あいつらと一緒にこの学校へ通い、学び、遊びます」

「そうか」

学園長は、静かに机から立ち上がり、俺の前へと進み出た。

「私は、彼ら……いや、この学園で学ぶ全ての生徒達の『管理』を任されている。そして、ランク4、5の子供達のメンタルケアは、急務の所となつてはいるが……その進度は芳しくは無い。

過去、何人、何十人と『ダメ』にしてきたかわからんよ」

そう言つて、学園長は静かに自嘲めいた笑みを見せる。きつとわざと『管理』と言つたのも、彼の自嘲の内なのだろう。

「上村 圭君」

「はい」

「彼らが、怖くないかね？」

その目は、金城さんが俺に見せた目と同じ色に感じた。

「怖いですよ」

「ほう」

「志貴崎さんは、なんか力加減間違えて俺を握りつぶしそうですし山城さんは、俺を操って何か恥ずかしい事やらせそうですし野谷さんは、特訓だとか言ってゲームでスナイパーライフル構えて走ってくるんですよ。トラウマですよもう。」

鬼谷さんなんて、俺の頭の中覗いて「ふふふ上村さんってこういうのが好きなんですね」とか言って悪戯してくるんです」

「くっふふふ・・・そうか」

「それでも、あいつらと居ると楽しいですから」

「そうか。楽しいか。そうか」

学園長はひとしきり楽しそうに笑って、ポケットからカードを一つ、取り出した。

「それでは、上村 圭君。君に公務をさずける」

「・・・は？」

「公務だよ。公務。国家公務」

「・・・え？」

「何、別に今までと特に何も変わらない。彼らと今まで通り遊び、学び、育て。そしてその軌跡を、国に提出すればいいだけだ」

「・・・はあ」

「この公務の受諾によって、君はランク5の能力者と同等の権利と義務が与えられる。つまり、国へのデータログ提出によって、報酬が与えられ、学園は君の行動を束縛しない」

「・・・」

「このカードは、君の身分を証明すると同時に、彼らとの関係で生じた金銭を、経費として国から使用する事ができる。もちろん報酬

は別途口座に支給される」

カードを見ると、俺の名前の横に『日本国特別指定人物調停員』と書かれており、ＡＴＭや、各種キャッシュカードとして使用できるロゴマークが踊っている。

「・・・公務員」

「そうだ」

公務員。国に仕え、国のために必要なもろもろの仕事をする人達。議員さん、軍人さん、職員さん。色々いる。

「それを、俺に」

「そうだ」

頭がついていかない。ええと、順を追って整理しようか。

「あの、公務員って試験とか」

「君には必要ないな」

頭がショートしたように上手く考えがまとまらない。

「え・・・・・・・・と・・・・何で？」

「・・・・・・・・混乱しているな。順を追って説明しようか。丁寧にな」

何度目かの説明になると思うが、能力者達の確保はこの世界各国にとって、一番に優先されるべき事項だ。

彼らの技術・研究への協力の下、今の日本を世界的に優位な立ち位置を確実な物としてくれている。

ざっと例を挙げても、人工筋肉、未解決事件の早期解決、人工知

能A r r i c eの構築、世界一を誇るV R技術等。

個人の成績としても、志貴崎の登山記録や、山城の舞台上演など、表にでている功績だけでも彼らの価値は国にとって、代えがたい物となっている。

それだけに国にとって貴重な『資源』である彼らをどう扱うか。個人レベルで見た時に、彼らはまだ高校生。体も心も子供だ。そんな子供の心身をどうやってケアしていくのか？国の答えは学園に丸投げである。

そして国に丸投げされた学園長、教師達の苦悩たるや！！尋常な物であるはずが無い。相手は現役ばりばりに国に貢献してくれているまさに宝。未来を担うとかそんな日和ったレベルではない。今現在まさに担っているのだ。

そんな中でひよっこり現れたのが『上村 圭』という存在である。転入初日から、能力者、ランクラを引き連れていったかと思っただけ、三日目には沖縄へ。

その後も数日沖縄で彼らと寝泊まりし、各所から上がってくる報告を見ると、本当に仲良く遊んでいるだけである。そればかりが、上村 圭が中心となり彼らを引っ張る場面すら多数あった。

ひよっとしてこれはいけるのではないか。

学園は彼に、この4人の面倒を見てもらおうと思ったのである。つまり丸投げである。

もちろん大きな責任が彼の頭の上に乗っかかる事となる。あまりにも、一般人には重い役務だ。

それこそ、舌の根も乾かぬほどに喋り倒し、責任を洋服か何かと勘違いしている、国会議員ですら泣いて役務を投げ出すほどに重い。しかし、彼ならばできるのではないか。

できなかったとしても、誰も進んでやろうとしない事だ。  
友達として、遊んで仲良くして役職をこなしてくれるのならば、  
彼以上に適役はいないのではなからうか。

「というわけで、君には公務が与えられる事となった」

「つまり、皆と仲良くして、一人にならないようにすればいいと?」

「そうだ」

「俺はその記録を、国に報告すればいい」

「そうだ」

「失敗したら?」

「……」

にやつと学園長が笑う。超怖いんですけど

「まあ、気にしなくて良い。どうせ、公務の件が無くても、君は彼らと遊ぶつもりだったろう?」

「はあ、まあ」

「その遊びに、学園がついでに乗っからせて貰っただけだ」

「……そうですか」

まあ、元々この話が無かったとて、俺が彼らと遊んでいくことには変わらないわけだから、特に問題は無い……はずだ。だけど。

「皆に、このことを伝えて、了解を得たら受けます」

皆の了解はちゃんと受けないとな。

「なるほど、了解が得られれば受けてくれると」

「はい」

学園長が、ニヤニヤ笑いながら、指を鳴らす。うん。嫌な予感しかしない。

「桜から、メッセージがあります『俺は賛成だ!』」

「ミキから、メッセージがあります『さんせい』」

どこからともなく、irisさんの声が聞こえる。

「卯月から、メッセージがあります『さんせい』」

聞いてやがったな。そうとは思えない。

「凧から、メッセージがあります『よろしく願いしますね』」

「と、言うわけだ」

学園長から、カードを手渡される。

ああ、何か巻き込まれたというか、さらにひどいことになった気がする。

「ふむ、これからもよろしく頼むよ。そして、ようこそ『学園』へ。調停員」

「はあ。わかりましたよ。けどその、調停員っていうの止めてもらえませんか？」

\*\*\*\*\*

SM : 俺は賛成だ!

Miki : さんせい

NOYA : さんせい

nagi : よろしく願いしますね

M i k i : これで圭も私たちと一緒にかー

k e i : おまえらなー！

i r i s : お帰りなさい、圭

n a g i : ちょっと違いますけれど、そうですね

S M : お、これからもよろしくな、上村

明日からまた。馬鹿騒ぎの日々が始まるわけだ。

凡人改め、日本国特別指定人物調停員、上村 圭の日常を、これからよろしく。嗚呼、少しは安息の日々をくれ

M i k i : ところで、旅行は何点？

S M : 100点！楽しかったな！！

n a g i : 100点です。楽しかったですね

N O Y A : 100点

M i k i : 100てーん！まーんてーん！！

k e i : 95点で

M i k i : えー！ー！！

S M : 5点はなんだ？圭。

k e i : 次の沖縄旅行の分だよ

M i k i : 圭って結構ロマンチストだよな

S M : ふふんなるほどな

n a g i : ロマンチストですねー

k e i : うっさいわ！

k e i : 教室に行ったら覚えておけよお前ら！

M i k i : きゃー！襲われちゃうー！

k e i : うっさいよ！

n a g i : 今日はどうしましょうか

N O Y A : ゲームセンター行きたい

まあ、今までと変わらないと言う事で。

## 大事名お知らせ・改訂再編集

現在話をすべて改訂している中で、どうしてもプロット無し、行き当たりばったりで第二章を書いていたため、だらだらといつまでも続くという状況下に陥ってしまいました。

これではダメです。ダメダメです。

と言うわけで再編集してまったく別……とはなりませんが、ある程度スリム化して掲載し直します。

これまでお気に入りに入れていた全ての人を裏切るような形となっていました。

すいませんです。

ちなみに、失踪は絶対にしません。今でも毎日タイピングできており、一章もほぼ全て書き直し状態で編集集中であります。

削除前のお話は、設定の方へ上げ直しました。

基本的には、M M O R P G 編やり直します。が、彼らのドタバタをメインから除外した今の構成はどう考えても『らしくないな』とおもえてなりませんでした。

もうしわけない。

やりきらない形となり、本当に申し訳ありませんでした。

再構成した部分は、すぐにまた日を見る事が出来ると思います  
が、それまでしばしお待ちください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7712y/>

---

能力者は赤信号を認めない～彼らの遅すぎる青春～

2012年1月10日22時49分発行